
糸が心の人のかたち

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糸が心の人のカタチ

【Nコード】

N5112D

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

少子高齢化、無気力症候群、人材の海外流失 様々な要因によつて壮年層が破綻した近未来の日本を舞台にした悲劇。人造人間を生み出そうとする関俊彦博士とその息子、樹東・光冴らに訪れる過酷な現実を背景に現代社会、そして人間のカタチに鋭くメスを入れる。

ツムケ

糸が心の人のカタチ

人の葛藤は交叉の軌跡

人が進化を超越するとき

新たなる尊厳を懸けた戦いが始まる

そう、リプルリバ スの

プロログ

東京クインホテル・シンラ研究会フォーラム。

二十一世紀、最後の頭脳と謳われた故トール・シンラ博士。彼の発表した数々の難解な理論や発明の実証・開発のために発足した研究会の定期報告がホテルの大ホールで行なわれていた。

「我々は既にシンラ博士の開発した人工細胞 キザン を用いて、人造人間の肉体開発に九十パーセント以上の成果を上げています」

現在、ステージ上で発表を行なっているのは三十路程の秀麗な若輩。しかし彼の胸に付けられたネームプレートには「人造人間開発部総取締役・関俊彦博士」とその責務の確固たる様が伺える。

「残る課題は肉体を動かすソフトです」

関博士は熱っぽくなりすぎず、また落ち着きすぎずと自然な動作で自らの蟀谷を指差した。

「第二セクションで開発した人格移植AI。ご存じの通りこれはシラ博士が提唱した生命の脳髓を模造する次世代型有機コンピュータのことです。その大部分が キザン で構成され、それに制御OSがインプラントされる形となります。よって人格が存在すると言うよりは、より深い判断力が可能となったコンピュータの再現であり、人権問題やロボット工学の三原則の徹底はクリアしていると見ていいでしょう」

会場は静まりこの若き天才の言葉を一言も逃さぬようにと固唾を呑む。

「脳髓の模造は最新鋭の全方位照射型THZスキャナと、あらゆる心理学テストの結果をインタフェイスの役割も担う制御OSから キザン 形成部位に入力する方式を取ります。既に動物実験でその安全性は立証されており、人格提供者の選抜も多方面の判断より決定致しております。近い将来、人に忠実な人より優れた労働力が誕生し、少子化と共に人材不足に悩まされる救急や看護といった決してミスの許されない現場で、我々の人造人間が大いに活躍してくれることでしょう」

発表が終了し、関博士がお辞儀をすると会場中からスタンディングオベーションが沸き起こる。各方面で著名な学者も企業家もマスコミも、誰もがこの夢のような話の実現を約束するこの男に称賛を与えた。

「ありがとうございます」

関博士は誇りの極みに柔らかない笑みを浮かべ、
「やっと」

願いが成就すると目頭を熱くするのであった。

東京某市の公営団地。

夕日の柔らかい光が差し込む一室に、トントントントンとタゲの訪れを示唆する小気味よい音が響いていた。

「らららあゝ あなたがいつもキラキラ笑う」

鼻歌混じりに巧みな手捌きでネギを刻んでいるのは関樹東。せきぎあずま まだ小学六年生の男の子である。

「ふう」

樹東は材料を一通り切り終わり一息吐く。

そして柱に掛かった時計を目にし、

「光冴の奴遅いな。味噌買うのにどんだけかかってんだ？」

お使いを頼んだ弟の帰りが遅いことを憂える。

「まさか」

何かを思いついたように、樹東はエプロン姿のまま玄関から飛び出した。

「ねえ返してよ」

公営団地の敷地内に設けられた公園。

そのベンチに座って漫画雑誌を読んでいる小太りの少年とその前に立ってオロオロしている少年がいる。半泣きの少年の方は樹東と瓜二つだ。

彼が樹東の双子の弟、光冴^{ひかり}である。小太りの少年はいかにもガキ大将といった風体だ。

「ねえ……青木くん」

「うるせえ！読みおわったら返すつつてんだろ」

ガキ大将に怒鳴られ肩を竦める光冴。元来温和しい性格の彼はガキ大将にこれ以上なにも言えなくなってしまった。

「大体、諺でもあるだろ？お前のものはオレのもの、オレのものおれのも」

「あんたは ヤイアンかああ!？」

突然の絶叫と共に、ガキ大将の後頭部に鈍い衝撃が走る。

「痛っなんっ!？」

ガキ大将は頭を抱えながら振り返る。するとベンチの後に活発そうな少女が拳骨を掲げて立っていた。

「何しやがる柊沢っ!？」

少女の名は柊沢ゆう。彼らの同級生だ。

「何しやがるはこっちの科白よっ!」

ゆうは可愛らしい顔に青筋を浮かべ物凄い剣幕で喝破する。

「人が嫌がつてるつてのに漫画取り上げて。光冴がチクらないからつて、もしこのことがキキにばれたらあんたボコボコよ」

キキとは樹東のことだ。セキキアズマと呼びにくいので、彼を知るものは大抵そう呼んでいる。

「けっあんなブラコン主婦野郎なんかけちゅんけちゅん」

小躍りして調子に乗っていたガキ大将は、ゆうの表情がみるみる引きつっていくのを目にし体を硬直させる。

「まさか」

「『好きで主婦やってんじゃねえぞキイツ ク!』」

いつのまにか現われた樹東の飛び蹴りがガキ大将の背中に命中する。

「『お兄ちゃんが弟の心配して何が悪いんだパ ンチ!』」

蹴りの勢いで吹き飛ぶガキ大将に追い付きアパ カットを繰り返す樹東。

「『けちゅんけちゅんになるのはお前だ巴投げ』」

「にっ人間の動きじゃないわ……」

樹東のハイクオリティ な技の数々に瞠目するゆう。

「けったわいもない」

言葉通りけちゅんけちゅんに撃沈したガキ大将を捨て置き、樹東はポカンと口を開けている光冴に近寄る。

「大丈夫か光冴？」

心配そうに訊ねる樹東に光冴はこくこくと首を縦に振った。それを見て樹東は頷くと光冴の持っていた買物袋を受け取る。

「ちよつとは手加減しなさいよ、キキ」

呆れて物申すゆうに樹東は目を見開いて、

「光冴をいじめる奴は万死に値するわっ!!」

そう告げ夕飯の準備に戻るべく、来た道を引き返していく。

朱色のエプロンを風に靡かせて

「あつ待つてよお兄ちゃん」

光冴はベンチの前に落ちていた漫画雑誌を拾って樹東の跡を追う。

「だから言っただじゃん。バアカ」

その光景を見守りながら、ゆうは未だ昏倒しているガキ大将の尻をぐりぐりと踏み躪った。

「たっただいまあゝ」

「ん……洗面所でうがい手洗いしろ」

自宅に着くと樹東は流しで手を丁寧に洗ってから味噌汁を作り始める。

「ガラガラガラ ペツ……ねえ、お兄ちゃん今日のご飯何？」

洗面所でうがい手洗いを済ませた光冴は樹東に訊ねる。

「野菜炒めと焼き鮭……あと味噌汁だ。もうすぐ出来るから、間食すんなよ」

「はあゝい」

光冴が元氣よく返事をしたところで自宅の電話が鳴り始める。

「光冴、悪いけど出て……」

「うつうん」

電話が苦手な光冴は恐る恐る受話器を取った。

「もしもし あっお父さん！」

父親の俊彦からだ。

「えっ？うんわかった。はあゝい」

「父さん何だつて？」

光冴が受話器を置くのを見計らって樹東は訊ねる。

「今日、お父さん帰ってくるって！久しぶりだね。やったあ！あつそうそう夕飯、家で食べるそうだから」

燥ぐ光冴とは対照的に、

「なぬっ！？」

二人分の夕食を用意していた樹東は思わず眉間に皺を寄せるのだつた。

都内某私立病院の個室。

人工呼吸器を付けた女性がベッドの上に横たわっている。

「……………」

白くやつれたその女性を俊彦は悲愁の表情で見守っていた。

「もうすぐだよ…………ジン　もうすぐ、キミの願いが叶うから」

俊彦はほんの少しの欣幸を笑みに浮かべてから病室を後にした。

その姿を見かけた看護師の一人が近くの仲間たちのところに駆け寄り、

「ねっねっまた来てるよ、あの格好いい旦那さん」

と噂話を持ち掛ける。

「ほんと…………もう七年にもなるのに。毎日大変ねえ」

「入院費もバカにならないんですよ？」

「他に面倒見てくれる身内もないらしくってねえ」

そう言いながら彼女たちは、姿勢良く歩いていく俊彦の背中に目を遣る。

「あれでしょ？なんか偉い人の実験で頭掻き回されて植物状態になつたって」

「ええゝ何それ、人体実験じゃない！？」

「しい。ただの噂でしょ。でも、ホントまだ若いのに」

植物状態の命を維持し続ける大変さは尋常ではない。そのために七年もここに通い続ける俊彦を誰もが『妻思いの男』と敬愛し同情の念を抱いていた。

「たっだいまあゝ」

「お帰りなさいっ！」

ほぼ三週間ぶりの父親の帰宅に光冴は大いに喜び俊彦に抱きついた。俊彦も愛しそうに光冴を抱え込み髪を優しく撫でる。

「よしよし、元気だったかあ光冴？」

「うん、元気だったよ」

光冴の澆刺な返事に俊彦は大いに喜び、息子を高い高いするように掲げてから床に下ろした。

俊彦はそれを横で見守っていた樹東に顔を向け、

「樹東、変わったことはなかったかい？」

と柔らかい口調で訊ねた。樹東は仏頂面でそれに応じる。

「べつに、ないよ。それより帰ってくるなら早めに連絡欲しいな。」

「ご飯作るの僕なんだから」

「はは、ごめんごめん。そういえば、ホントお腹すいたなあ。飯にするか、光冴？」

「うん」

久しぶりに関家の食卓に父親が加わる。いつもは樹東と光冴が隣り合って食べるのだが今日は光冴の横に俊彦が座り、樹東は父親の正面に座ることになった。

「ねえお父さん」

「ご飯を食べる間中、光冴は俊彦の顔を見上げ引つきりなしに近況報告をし続ける。」

「僕、こないだテストで百点とったよ」

「おおっすごいなあそれは！」

俊彦は茶わんを置き左手で光冴の頭を撫でた。

「偉い偉い」

「えっへっへえ　でも、お兄ちゃんはいっつも百点なんだよ」

「そっかぁ〜お兄ちゃんは優秀だからなあ」

「……………」

樹東は黙々とご飯を食べ続ける。その代わりのように光冴が浮かれて、

「そっだよ！お兄ちゃんすごいんだよ！運動神経も抜群だし

僕のヒ　口　なんだ！」

それを聞き、樹東の表情に少しだけ変化が生まれる。

「そっかぁ光冴はお兄ちゃんが大好きなんだね」

「うん、僕お兄ちゃんがだぁ〜い好き」

光冴は樹東に笑い掛ける。それを受け樹東も照れたような笑みで応えた。

「うつ」

突然、味噌汁に手を付けた光冴が顔を顰める。

「お兄ちゃんイリコ取ってよ〜まずい〜」

「だしを取った煮干しにも栄養が沢山あるんだ、我慢して食べる」

「ぶ〜」

ほっぺたを膨らませる光冴に俊彦は愉快そうに笑った。

「お父さん　　」

「ん？」

どこからどう見ても子供思いの優しい父を複雑な心境で眺めていた樹東は意を決したように進言する。

「もう少し頻繁に帰ってこれないの？仕事が忙しいのも分かるけど数週間に一度だなんて光冴が可哀相だ」

「すまない」

俊彦は箸を置き謝罪する。無理だということだろう。

「光冴ごめんなあ、寂しい思いさせて」

「うつん。僕、お父さんがいなくて寂しいけど、僕にはお兄ちゃんがいるもん。大丈夫だよ」

「ありがとう」

俊彦は光冴の頭を抱える。そして思い出したように、

「そうだ。仕事で思い出したけど、光冴明日は学校休んでお父さんの研究室にきなさい」

「なんで？」

樹東が訊いた。俊彦は樹東に向き直って質問に答える。

「お父さんの研究室で人造人間を作っているのは知っているだろ？」

「うん」

「光冴をその人造人間のAI、詰まり心のモデルにしたいんだ」

「心のモデルってどういうことするの？」

「機械で光冴の心を読み取ったり、幾つか質問に答えてもらったりするんだ」

そこまで聞いて樹東は食べる手を止め箸を置いた。

「心を読み取るって脳をスキャンするってことだろ？危険じゃないのそれ？」

真つすぐと目を見つめて問う樹東に、俊彦も目を逸らさず答えた。

「危険なことなんて絶対にならない」

「本当に？」

「本当だ」

俊彦の険しいまでの断言に樹東は目を逸らした。いつとこの間、静寂が生まれる。

やがてサ　モが切り替わり冷蔵庫が音を立て始めるのをスイッチに光冴が口を開く。

「ねえロボットさん僕をモデルにするんでしょ？」

「ああ、そうだよ」

俊彦は光冴の言葉に頬を緩める。

「じゃあお友達になれるかなあ」

「ああもちろんさ。光冴をモデルにするんだから、絶対優しい子だよ」

「やったあゝ！」

樹東の心配をよそに、光冴は無邪気に喜んだ。

その日の夜、親子は俊彦・光冴・樹東の順に川の字に布団を並べて就寝した。

既に光冴は仰向けになつて寝息を立てている。俊彦は寝返りを打つて外方を向いた。

「ねえ本当に大丈夫なんだよね」

樹東は父の背中に杞憂をぶつける。父は背を向けたまま、

「ああ、大丈夫だ。そうさ、危険なことだったら光冴にやらせるわけない」

堅い口調で答えた。どこか自分自身に言聞かせるように。

「ごめん……おやすみなさい」

「ああ」

夜の闇に目を凝らし、樹東は光冴の寝顔を覗き込む。

光冴のロボットか。

『きつと優しい子だ』

父の言う通りだと、樹東の顔は自然と綻んだ。

ツムグ

五年の月日が流れた。

樹東・光冴、高校二年の夏。

「光冴、さつさとしないと課外に遅れる」

既に登校の準備を済ませていた樹東は、もたもたしている光冴に玄関から急かせた。

「待ってーキキ兄。国語の教科書が あった」

光冴がどたばたと部屋から出てくる。

「おまたせえ」

「ん」

樹東が玄関の戸締まりを済ませ、二人は並んで公営団地の階段を下りた。

「ヤッホー！キキ、光冴」

二人が階段を下り切ると、そこに柊沢ゆうが待っていた。
「ん」

「おはよう、ゆうちゃん。今日も暑いねえ」

彼らは三人とも、歩いていけるほどの近所にある進学校に通っている。

「しかし、あんたら年々似てきてるわね」

ゆうは歩きながら二人の顔を見比べしみじみと語った。

「まあな。髪型が違わなきゃ親でもわからんだろ」

「だねえ」

光冴は横髪を長めに残していて、樹東は短く刈つてある。そんな風に区別を付けなければ、日常生活に支障を来すほど二人の姿形は見分けが付かなくなっている。

「そういえばあんた、聞いたわよ。野球部工 スの黒田君にスカウトされたけど断ったんですって？」

「からかうように訊ねてくるゆうに、

「体育の授業で投げてるところをたまたま見られたんだ」

「いい迷惑だったと眉間に皺を寄せて答える樹東。

「こちとら家事で急がしいんだ。なのに黒田の奴いくら断つても『きみには才能がある』とかしつこく誘いにきてな」

「まっ黒田くんの気持ちも分かるけど。あんたむかつくくらい出来杉君だし。スポ ツ万能、勉強も出来る、おまけに絵もうまいや歌もうまい。それが家事にしか興味ないんだから、神さまもやつてくれるってかんじ」

「そうそう、キキ兄もう夏休みの宿題終わったんだよ」

「マジでえ」

ゆうは度胆を抜く。夏休みも始まったばかりでまだ前期課外授業も終了していない。それなのにあの大量の宿題を終わらせたというのか、この男は……。

「読書感想文以外だ。今、カフカの『変身』を読んだがこれがまた読み辛くてな」

「あの〜」

ゆうは胸の前で手を重ね、きらきら目を輝かせて樹東の顔を見上げる。

「樹東さま」

「写せんからな」

間髪を容れずに宣告する樹東。ゆうは表情を一気に崩した。

「光冴も、分かんところは教えてやるからちゃんと自分でやれよ」
「ほ〜い」

光冴は口を尖らせ返事をする。

「よお〜し」

ゆうは突然両手を上げて吠えた。

「光冴っ！こうなったら、課外の後あんたん家で勉強会よ」

「ナイスアイデア」

ゆうの提案に光冴は親指を立てて応える。

「三人寄ればもんじゅは原発っ！」

「プルサ マル計画始動ね」

ゆうと光冴は胸の前で腕を交差させ、

『MOXツMOXツ！MOXツMOXツ！』

「……………」

支離滅裂に意気投合する。そんな二人を見守りながら、樹東は「バカども寄れば姦しいだな、こりや」などと人知れずギャグを咬ましていた。

「まっ勉強するのはいいが、オレは読書するから静かにしてくれ。アレ読むの神経使うんだ」

「フッフッフ。もちのろんですわ樹東さま」

絶対騒ぐ気満々。

「はあ」

何を言ってもだめだと、樹東はため息を吐いた。

「のんきだねえ」

高いビルの屋上。

双眼鏡を手にした男が覗き見ている光景の感想を呟いた。それこそ
そのんきな口調で。

「ん？」

携帯電話に着信が入った。男は装着したイヤホンマイクで応答
する。

「もしもし？」

『もしもし、オレだ』

「ああ、法師さま？珍しいね、あんたから電話なんて」

『今、大丈夫か？』

「ん？オツケ　っスよ」

男は依然双眼鏡を覗きながら電話に応じていた。彼の横には臨戦
態勢のスナイパー　ライフルが灼熱の太陽に照らされている。

『シルズグロ　ブで問題が起きた。暫く動けん。悪いけどお前、
大智のこと預かってくれんか』

「えっ？」

にやにやしていた男の表情が惚ける。

『ダメか？』

「いや。なんつつか、よくオレなんかに大事な息子を預ける気にな
るなあて」

男は双眼鏡を横に置いて屋上の壁に凭れ掛かった。

「悪いけど、あんたの神経疑うね」

『ふん。確かにお前は目的のためなら手段選ばん男だからな。が、
同時にそれは目的達成のために最善を尽くしてるってことだ』

「なる。大智くんになんかあったときは道半ばで殺されるってか、法師さま？」

『信頼もしている』

「……………」

『お前は本当は優しい男だ』

「よしてくれ」

男は辛そうに言った。

「萎えそうになるじゃんか

オレは悪魔って罵られてる方がち

ようどいんだよ」

『……………』

「オツケ 今からそっち行くわ」

『わりいな。仕事中だったんだろ？』

「いいって。どうせこっちもノギャラだ。後回しにしたって怒られない。じゃ後で」

通話を終え、男は再び双眼鏡を手にする。

眼前に迫る光冴のキラキラした笑顔。

「ほんと、のんきだねえ」

男は青空を仰いで呟いた。

パソコンのディスプレイに映る古い雑誌の記事。その文字の一つ一つが郷愁、そして追懐の念を呼び覚ます。

「……………」

それを払拭するように貴子は聊か厳しい表情で頭を振った。

松雪貴子。職業フリ ライタ。

彼女は仲間内で『戦う女神』と称されるほど美しい女である。しかし今年で三四歳独身の彼女は世間で言うところの『負け犬』と範疇される存在。女にしても男にしても結婚して一人前という風潮が、社会の移り変りと共に必要となる制度や施設の充実云々より先に語

られる節があるのだろう。

もつとも彼女がそれを耳にしたら『勝っても負けても犬は犬。狼の私には関係ないわねえ』と自嘲気味に笑うことだろう。それ程までに貴子は今、マイノリティな人生を送っていた。

大衆の幸せに憧れもあるが決して届くことない道程も存在するのだと思い込んでいる。

でも、だからこそできることもある。

真実を求めること……真実を伝えること。

たとえ、それが命を鉛玉へと化す必要があるうとも。

そう、自分はハンタだ。真実という濃霧に包まれた獲物に標準を合わせている。

「貴子さん何読んでるんっすかあ？」

貴子の助手の高木がコヒを二つ手にしてやってきた。

貴子は高木からコヒを受け取ると、見てみると体を横に傾ける。高木はコヒを嚙りながら貴子のパソコンを覗き込んだ。

「古い記事っすね」

「五年前のものよ。フリになる前に、上から無理遣り書かされた代物」

「ふ〜ん……なにに『人造人間誕生間近！？シンラ研究会の若き天才が語る』」

五年前、関俊彦博士が発表したフォラムの記事だ。

「ふふっ『人権問題やロボット工学の三原則の徹底はクリアしてるね……人格がある以上そんな保障あるわけないわよねえ』」

「ロボット工学の三原則ってなんっすか？」

高木は記事に目を通してながら訊ねた。貴子は記憶を手繰り寄せるように目を瞑り、

「え〜と　確か『第一原則・ロボットは人間に危害を加えてはならない。あるいは、なにも行動を起こさずに、人間に危害が及ぶのを見過ごしてはならない』『第二原則・ロボットは人間の命令に従わなければならない。ただし、その命令が第一原則に違反する場合

合は例外とする』『第三原則・ロボットは自らの存在を守らなければならぬ。ただし、第一原則および第二原則に違反しない場合に限る』だったかしら？昔の作家が提唱して、今だに規範となっている制御のいろはよ」

「ふん」

高木はとくに感慨もなく聞き流した。

「でっなんでこんな記事読んでるんすか？まさか！？」

ハツとなつて顔を強ばらせる高木に、貴子はにんまりと口の端を引き上げ、

「そっそのまさか。ちよつとしたコネがあつてね、そっから仕入れた情報なんだけどこの人造人間そろそろ完成するらしいわ」

ケ キのおいしい素敵なお店ができたのとても言うように嬉々となる。

「ちよつとつつついてみたら面白そうじゃない？」

「じよつ冗談でしょっ！？」

高木は顔面蒼白になつて声を上げる。

「シンラ研究会にはあの鉄総司が」

そんな彼の口を貴子は慌てて塞いだ。

「あんまりその名を口にしないでくれる」

「すいません……でっでも危険すよ」

鉄総司。

財団法人シンラ研究会のパトロンであり、この国の財界を牛耳っていると言われている男。早い話、アンダ グラウンドの顔でもある。テロリストとすら繋がりとあると言われている鉄総司は「蠅の王」などというけつたいな二つ名で称されており、盾突けば命がないだけでは済まされないと恐れられている男である。

「高木くん。危険が危ないことは承知してるでしょ？」

「らっ落語すか？……でも今日辺り広田議員の件で地検が動くかもだから」

先週、貴子が素っ破抜いた現役議員の汚職事件。でかでかとその

証拠が雑誌に載ったことで検察も動かざるえなくなるという金星を貴子が上げていた。そして今日辺り逮捕状が執行されるのではないかと、マスコミはその議員の動向に注目しているのだ。

「そんな過ぎた事件なんか他の人たちに任せておけばいいのよ。あれは、後ろ盾からの依頼でやったまでなんだから」

「金ふんだくつてくるくせに、かつこつけちゃって」

思わず本心を吐露してしまう高木。貴子は別段怒ったようでもなく、時報でも読むような体で言う。

「高木くんのお給料、90パ セント減」

「すいませんすいませんすいません」

ひたすら謝り捲る高木に何も答えず貴子はゆっくりと立ち上がる。

「今日は情報の確認……明後日ぐらいには駄目もとでアポとってみしよ」

関俊彦博士が推し進める『人造人間開発計画』。

そこに真実の全てがあるわけではない。それでも視界の妨げになる濃霧を少しでも晴らす材料になるはずだと貴子は確信していた。

そう、自分はハンタ だ。真実という濃霧に包まれた獲物に標準を合わせている。

『変身』 ある朝、目が覚めると巨大で醜悪な虫の姿になっ

ていた男とその家族の悲劇。淡々とした説明調の文体で描かれているそれは、ことの異様さのわりに大きな事件も起きず払拭できない苦悩だけがそこにある。『そこで彼が寝椅子の下から……』

樹東は帰宅すると細々とした家事を済ませてから、自室に籠もり静かに読書感想文の課題を黙読していた。

「うーん」

度々文章が前後していたり、難しい言い回しだったり、樹東は物語の把握に四苦八苦している。

そのおり、

「さて問題です！」

隣の光冴の部屋からお世辞にも控えめとは言えないゆづの声が聞こえてきた。今朝の宣言通り二人で宿題を片付けるために来たのだが、いつのまにかクイズ大会に変わってしまったようだ。

樹東は極力、それらの雑音を脳内から排除して読書が続けようとするのだが、

「……………」

「いつまでも大人社会に同化しない或いは出来ない青年のことを何というでしょうか？」

「……………」モラトリウム人間……………」

ついつい心の中でクイズに答えてしまう。

「うゝと『二ト世代は辛いよ』！」

張り切って訳分らないことを言う光冴の声。

「ぶゝ答えは『モラトリウム人間』でした。残念」

「くそゝ今度は四択で勝負だっ！」

「ああ……………うるせえ」

樹東は本にしおりを挟んで畳の上に倒れこむ。

「Dの昇華」

「正解です」

「やったあゝV！」

樹東の予想していた通りに頗る姦しくなった。

「……………」

彼は自然と瞼を閉じる。

「じゃあさ、合理化の意味はなんなの？」

「だから、それはあ……………」

夏のくそ暑い日の光が差し込む部屋での喧騒。それでも、樹東は体の芯が溶けるような心地よさを覚えていた。

光冴が笑っている。光冴が身近で楽しそうにしている。

「アタック25みたいにしようよ」

「じゃあオセロをパネルに……………」

「大事な大事なアタックチャンス」

「チャンス、早すぎだつて」

「……はは、バカでえあいつら」
それだけで自分は幸せだ。

夕食を済ませた後、食卓に腰掛けテレビを見ている光冴。その横で樹東は慣れた手つきで食器を洗っていた。

「ねえキキ兄？」

テレビに目を向けたまま光冴は樹東に話し掛ける。

「ん？」

樹東は洗い物をする手を休めずに訊き返した。光冴は少し間を置いてから答える。

「なんでもない」

いつときの沈黙。そして、

「手伝おっか？」

樹東の背中に撫でるような声で光冴は訊ねた。

「もう終わるからいい」

素っ気ない兄の言葉にしゅんとなる光冴。

樹東は背中に目があるかのようにそれを察し、

「TVゲームの相手をしてほしんだろ？少し待ってる」

「……………」

兄の言う通りだった。ただ、なんとなく複雑な気持ちになり、光冴は黙ってテレビに目を戻した。

「ねえ、キキ兄。やっぱ野球部入れば？」

次の日の登校中。光冴はいつものようにおちゃらけた口調で言った。

「ん？」

「べつに野球じゃなくてもいいけど。そんだけ才能あるんだし、なんかやったら？」

「興味ない。それに忙しい」

樹東の言葉に光冴は少しむっとした表情になる。

「だけどさ、キキ兄そうやって忙しい忙しいって言って自分の時間ないじゃん」

「……………」

樹東はどう応えていいか分からず首を傾げた。

その様子を見ていたゆうはまたかため息を吐く。高校生になつたくらいから、一カ月に一回くらいのペースでこういう風なことが起こるようになった。光冴が兄に提案し樹東は困ったように眉間に皺を寄せる。

「べつにさ、掃除とか頻繁にする必要ないし夕食だって店屋物とかでいいじゃん」

「成長期の人間がそんなもの」

「そういうこと言ってるんじゃないじゃん。高校に入って、キキ兄友達とかできてないんじゃないの？」

「……………」

黙り込む樹東。

「もういいよっ！」

そう残して光冴は一人走っていった。

「光冴……………」

樹東は無然と弟の背中を眺める。途方に暮れるという言葉がこれほどしっくりくることもあるまい。

「どっちもバカね」

ゆうは樹東に気取られないよう口の中で呟いた。

放課後。樹東は下校を同じくするためにクラスが違う光冴の組の

教室を訪れる。

「光冴ならいないわよ」

光冴を探す樹東を見て、光冴と一緒にのクラスのゆうが彼に教えた。
「青木たちと遊んで帰るって」

「ん」

それを聞いて樹東は踵を返し、さっさと帰宅しようと歩き始める。
「ちよつとまってよ」

ゆうは慌てて鞆を手にし樹東を追った。

「……………」

樹東とゆうは黙々と帰路を歩き続ける。

こうやって考えると樹東はホントに必要な以上のことを喋らないし、逆に光冴はうるさいくらいお喋りだ。

ゆう自身は人に合わせる性格なので普段光冴がいるときは賑やかに振る舞うが、べつに根っからの調子者でも騒ぎ好きなわけでもない。

たまにはこういうのもいいかな、などと思っていた。

真夏の静寂。

熱を持ったアスファルトと靴底。木漏れ日をつくる並木の囁き。

蝉の鳴き声。どうしようもない雑音。それでも切り取った一枚の写真のようなこのひとときに酔い痴れる思いが込み上げてくる。

「なあ……………」

そんなおり、樹東がぼそりと口を開いた。

彼の声に夢が覚め、また夢に渉る。

「今朝のこと……………よく分からなくてな」

いつものように怒ってるような何かを考えているような真剣な顔つきで樹東は言った。

ゆうは少し苦笑いを浮かべフオロする。

「ふつ。まあ、あれでしょ。光冴は光冴なりにキキのこと気づかってんのよ」

「……………」

「光冴の言う通りキキもたまには羽のばしてさ」

「オレはべつに無理してるつもりないんだ」

抑揚のない声で樹東は言う。

「朝、顔を洗って歯を磨く。そんな習慣と同じことをやってるつもりだ。光冴の世話をやくのはそれが好きだからだ。だからって、オレが全てを犠牲にしているわけじゃない。オレだってテレビ見て笑ってるし、漫画だって読む。外で遊ばなかったり、友達が少ないのはオレがそういう性格だからであって、家事やってることとかとは一切関係ない。光冴が気を使うようなことはなにもないんだ」

「……………」

ほろ苦い感情が零れるような気がする。

「知ってるわ」

ゆづは宥めるように言った。

実際、樹東のそういうところを結構気に入ってる学友も多い。だから直接遊びに誘ったりする友人は少なくても、樹東は孤独というわけではない。

それでも光冴は。

「ねっ今から遊びに行かない？」

「は？」

「たまにはぱあとね」

「しかし」

突然の誘いに困惑する樹東。それでもゆづは強引に樹東の手を引いて、

「いいじゃん。カラオケでも行こうよ。久しぶりにキキの歌う関白宣言が聞きたいし」

「歌ったことねえよ。そんなの」

ぶっきらぼうに言う樹東。

「ふふ……………」

嬉しくて切ない。

握る手はとても温かいのに、その温もりが交じり合うことは叶わ

ないように思えて。

「イエ イ！」

近場のカラオケボックスに入り、ゆうは快活な曲をノリノリで歌い上げる。歌を歌うことが好きな彼女の的には大満足だったが、外方を向いて遠くを見ている樹東を目にしたら急にげんなりとテンションが下がった。

「お いキくん」

マイクを使つて語り掛けるゆう。樹東は現実に引き戻されたように彼女の顔を見た。

ゆうはため息を一つ吐いて座っていたソファに寝転んだ。

「ねえキキ」

ゆうはそのままマイクに向かって訊ねた。

「あんたってさあ、ぶっちゃけ光牙に対して近親相か」

「なんつうこと吐かすんだ己れは！？」

珍しく焦つて声を張り上げる樹東。ゆうはその珍事に少しだけ愉快になつて笑う。

「はは 冗談よ冗談」

「冗談じゃねえよ」

「だから冗談だつて あれよね。あんたは弟思いのいいお兄ちゃんなんだよねえ」

人生の八割を弟に捧げているようなこの男に、多少皮肉を込めて言つてやつた。

樹東は顔を顰めて外方を向く。べつに怒っているわけではない。こういうときは大抵、理解に苦しんでいる時だ。

カラオケボックスの中でしばらく沈黙が続いて、

「オレたちは恐らく不憫なんだ」

樹東は吐き捨てるように言う。

「母親は物心着く前に植物状態。父さんはその後から徐々に家に帰らなくなった。オレが幼稚園の頃から、包丁持って器用になんでも熟してたのも原因だった」

「……………」

「オレは小さい頃から父さんの代わりに自分がつて思ってた。でも、光冴は違う。たまに帰ってくる父さんは大げさなくらい優しくて温かい人だから、それに縋り続けたいと寂しさだけを募らせていく。だからオレが光冴の心を支えなきゃいけなかったし、それがオレの支えだった。光冴が寂しい思いをしている分だけ、出来るだけ負担をなくすことが最前だろ？それだけがオレに出来る唯一のことだろ？オレが光冴を守らなきゃいけないんだ。だから、光冴が毎日生きることが楽しいって思えるように、そうなつて欲しいだけなのに」

「

樹東は俯き後半言葉を淀ませた。涙こそ見せないまでも胸の苦しみが痛いほど伝わる。ゆうは樹東の横に座りなおし、下がった彼の頭をポンポンと撫でる。

「分かつてるつて。ごめんね。変なこと言つて。光冴もきつとキキに感謝してるから」

だけど光冴も苦しんでいる。出来すぎた兄に劣等感を持たないわけない。まして兄弟と言つても双子なのだ。見た目はまったく同じなのになんで自分だけと思つている。それでも兄に頼つてしまう甘えきつた自分に嫌気がしている。

ずつと見守つてきたものだけが知つている真実。

それでも口を挟むには、この兄弟の黒い楔が強すぎて邪魔をしている。

その日の夜。

「水道代が4600円。ガスが」

樹東は台所のテブルで家計簿を付けていた。

「光冴の大学積みたて金を入れると定期の方がギリギリ足りんから

樹東が悩ましげに電卓を叩いているところに光冴が自室から顔を出す。彼は樹東の正面の椅子に腰掛け声を掛ける。

「ねえキキ兄」

「ん？」

樹東が作業をしながら聞き返すと光冴は逡巡するように黙り込む。樹東は不振に思い手を止め光冴の顔を伺った。今朝の続きかと心配したが、光冴の顔は別段悩んだり怒ったりしているようには見えない。

「どうした？」

樹東が促すと光冴は少し間を置いてから口を開く。

「キキ兄、ゆうちゃんのことどう思う？」

「……………」

樹東はすぐに答えなかった。彼は目玉を上に向け、質問の意図を模索する。それでもよく分からなかったので正直に答えた。

「幼なじみだが」

光冴は呆気にとられたように笑う。

「そうじゃなくて、だからあその好きとか嫌いとか」

「嫌いだったらダチやってないだろ」

「……………」

どうも光冴と樹東の間ではうまく会話のキャッチボールがなされていない。光冴は椅子の上で不貞腐れるように足を抱える。

「僕は好きだよ」

「……………」

「だからあ　恋して止まないとかっていうの？」

「ああ」

やっと納得いったと樹東は頷いた。

「それで？」

「キキ兄はどうなのかなって」

「オレはあいつにそんな感情はない」

「ホントに？」

光冴は上目遣いで訊いてくる。

「ああ　友達としてはいいやつだと思うがな」

本心だった。ゆうのことは普通に好きだけど、それが恋などではなく一人の人間として尊敬しているものだ。と樹東は自覚していた。

「今日さ、キキ兄ゆうちゃんとカラオケ行ったでしょ？見かけたって人がいたよ」

「あれはあいつがたまには息抜きしたいと言い出して無理遣り付き合わされただけだ。お前がおらんかったからオレが行くはめになったんだぞ」

「ふゝん」

光冴は納得したようになしてないような体で鼻を鳴らした。

「ねえキキ兄。お願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「キキ兄から、ゆうちゃんに僕の気持ち伝えてくれない？」

「.....」

樹東は首を捻って光冴の顔を凝視する。光冴も真つすぐそれを受けとめた。

「お前なあそれは男としてどうかと思うぞ」

「だってえ」

光冴は口を尖らせる。

「.....」

樹東は黙ってボ　ルペンを手に取り、忙しく芯を出したり引つ込めたりを繰り返す。そんなことを二十回ほどしてから、

「わかった。明日の課外が終わった後、お兄ちゃんからあいつに言ってやる」

そして家計簿の作成に戻った。

「やったあゝ！ありがとキキ兄」

両手を上げて喜ぶ光冴。

「もう寝ろ。また寝坊するぞ。教科書の準備はしとけよ」

「はい」

元気に返事をしてから光冴は自室に戻っていった。

「ふう」

樹東はため息を吐くと、先ほど迄とは違って黙りと作業を進めた。

「……………」

寢床についてから樹東は中々寝付けないでいた。

光冴が恋か。当然だ。もう高校二年にもなるんだから。

樹東は寝返りをうつて壁を見る。向こうの部屋で寝ている光冴が見えてる気がした。

「……………」

あれは中学に入ってすぐだった。光冴が部屋を別々にしたいと言
い出したのは。

いつからか、『お兄ちゃん大好き』と言わなくなった。

徐々に『キキ兄』と呼ぶようになって、今では完全に『お兄ちゃん』とは呼ばない。

最近ではしつこく干渉すると、たまにはあるが『うるさい』と怒るようになった。

光冴は変わっていく。人間なのだ。ましてや子供から大人になっ
ていく時期なのだから当然だ。

「自分はあの頃のまま」

光冴の世話を焼き、光冴と共にいたいと願っている。

ゆづの冗談ではないが自分がそういう嗜好の持ち主なのかと疑っ
たこともあった。だがどうもそうではないらしい。光冴のことを独
占したいとは思わないし、ゆづと光冴のことがうまくいけば自分の
ことのように嬉しいと思う。だから、情けなくても仲介役を引き受
けたのだ。

結論として自分は恋をしないのだという考えに至った。人を慈し

み愛することは出来ても、恋をすることはないのだと。

「……………」

光冴とゆうが結婚したら、さすがに離れなきゃならない。

そうしたら自分は一人だな。

きつと何もかもがどうでもよくなる。

「お父さん…… どうして光冴だけで…… 僕のことを」

自分でも気付かないうちに樹東の瞳から涙が零れ落ちていた。

深夜の研究室。関俊彦は一人そこに佇んでいた。

人の形をした物の前に……。

「やっと完成した」

身が打ち震える喜びで天井を仰ぎ、涙を頬に伝わせる。

「これが成功すれば」

ジン　これでやっとキミの真意に辿り着く。

次の日の課外授業の後、樹東は光冴たちの組の教室に向かって闊歩する。

「ようっキキ兄」

教室に着くと、入り口近くの席の生徒が樹東に話し掛けてきた。

このクラスの人間は光冴の真似をして樹東をそう呼ぶのだ。

「光冴ならさつき、鞆置いてどっか行つてたぜ」

「いや、柊沢に用がある」

樹東が言つと、その生徒は帰り支度をしていたゆうに呼び掛ける。

「おゝい！柊沢、キキ兄が来たぞ！」

ゆうは入り口を一瞥して、

「ちよっと待ってて」

と机の中から教科書を取り出す手を休めない。樹東は教室に入り、ゆうの机の前まで行く。

「帰る前に話がある。着いてきてくれ」
「は？」

ゆうは手を止め、眉間に皺を寄せて樹東の顔を見上げる。なんなのか訊き返そうとしたが、樹東の表情がいつもより深刻に見えたので言葉を止めた。昨日の今日ということもあった。

その代わりに、

「わかったわ」

と席を立ち上がる。

「すまん」

樹東は謝意を表して歩きだす。ゆうもそれにならった。

二人は教室を後にして、裏門付近の木が茂っている人気のない場所までやってきた。光冴もこのどっかに隠れて聞耳を立てていることだろう。

「でっなに？話って」

樹東は言葉を選ぶように考えてから、

「お前、光冴のことどう思う？」

昨晚、光冴が彼に訊いてきたようなことを口にする。ゆうも昨晚の樹東と同じように首を傾げた。

「どうって？」

「だから、その好きとか嫌いとか」
「これも同じ。」

「好きよ」

ゆうはあっけらかんと答えた。

「ふっあんと違って可愛げあるしねえ」

皮肉っぽい笑みを浮かべて。

樹東は後を振り向く。視線の先にある生け垣のような茂みの中に光冴がいることが気配でわかった。

樹東は正面に顔を戻して意を決して言う。自分のことでもないの

に、柄にもなく緊張していた。

「その……光冴もお前のこと好きだった」

「……………」

「だから　その、交際？付き合ってたの、それをだな、代わりに申し込んでくれといわれたんで。いや　オレだって最初は自分で言えって言ったんだ。でも、しつこくてな」

「……………」

ゆうは目を伏せる。

「あつあの　そういうわけで」

それはどういうリアクションだ？と樹東も地面に目を落とす。

「……………」

長い間が生まれる。

足元には養分が豊富そうな濃い茶の土が敷き詰められていた。樹東はそれを靴の先で穿り返す。場の空気に耐えきれずの苦し紛れである。

「あのね」

永遠に続くのかと思うほど長かったそれが終わった。ゆうは拙く言葉を切り出す。

「そのね……光冴のこと好きだよ」

ゆうの目は泳いでいる。どういえば一番相手にとっていいのか考えながら喋っている。

「好きだけど　好きな人が好きってだからって
　　というか大切にしてるから」

「……………」

「気が置けない感じでいいけど……」

ゆうはそこまで言う両手で口を押さえ目を瞑る。樹東は睨むようにそんな彼女を見ていた。

「ああ、もう……ホントに鈍感ね」

口から手を離し、ゆうは樹東の顔を真つすぐ見つめて明言する。
「弟なの！」

「……………」

「異性としては　　キキが……樹東のことが好きだから」

「っ!？」

予想外だった。いや、ありえる話なのに考えていなかった。樹東は思考が止まったように口を半開きにさせる。

「光冴っ!？」

突然茂みから光冴が現われ、ゆうは咄嗟に彼の名を呼ぶ。樹東が後を振り向くと、既に光冴は裏門に向かって走り去ろうとしてた。

「光冴っ!？」

樹東は慌てて光冴を追い掛ける。俊足の彼は裏門を少しでたところで光冴の手を掴むことが出来た。

「光冴っ!」

「放してよっ!」

光冴は目に涙を溜めて怒号する。悠久の仇にでも会ったかのようにその目で樹東を睨み付ける。

「光冴、話を聞け　　」

「うるさいっ!」

樹東が必死で宥めるようとするのだが、まったくもって取りつく島がない。

「光冴……」

「一人にしてって言っただよ!？」

光冴が樹東の手を強引に払い除けた。その勢いで樹東は転倒する。倒れざまに空が見えた。

真っ青な、それに浮かぶ太陽は今日もカンカン照りで　　。

このくそ暑い中なんて勉強なんかしてんだとか、授業中に思った。

今年は海にいけるのかとか、光冴が花火見に行きたいって言うてたから毎日ネットでどんな祭りがあるとか調べたり、夏休みの予定を立てていて。

今日の晩飯は少しあっさりしたものがいいとか考えたり。

恋人が出来るんだったらデト費が掛かるから、光冴の小遣いアップしなきゃなとか。普通の日だった。

ゆうのことは説得しようと思っているし。

ホントに普通の日だった。

切り裂くようなクラクションが樹東の耳を支配するまでは。

『回路正常』

『ドナとの誤差0・09パーセント』

『キザン 制御レベル、ノマル』

オペレタたちの報告が飛びかう中、俊彦は椅子に腰掛け作業の行方をじっと見守っている。

『信号受信』

『インプラントチェッカ、オルグリン表示』

『最終確認に移行』

俊彦の横に立っていた若い研究員がオペレタたちに指示を出す。

『データ圧縮』

『チェックプログラム、戊から癸へ』

『プログラムキパ 正常に作動』

『軍師の解答、肯定』

その瞬間どつと歓声が沸き起こる。

完成した。

「.....」

溢れでる感奮に俊彦は天井を仰ぐ。

これでやっと自らの真価を見届けることが出来る。また一歩願いに近付ける。

「最終調整は終了しました。後はAU（人工子宮）を開放するだけです」

「ああ」

研究員の言葉に頷き、俊彦は巨大なカプセルに収められている人の形を見つめた。

『AU開放』と言い掛けたそのとき、室内の電話が鳴って俊彦の言葉を妨げる。

「もしもし」

オペレタの一人が手早く受話器を取って応対した。

「はい わかりました。博士、フリ ライタ の松雪貴子という人が取材をしたいと言ってきているそうです」

「ライタ の松雪貴子？」

どこかで聞いたことがあるような。

俊彦が記憶を探っていると、隣に立っていた研究員が彼に耳打ちをする。

「なんだって？ それは会わない訳にはいかない……すぐにでも取材に応じると言ってくれ」

「分かりました」

「始動は明日に変更する 山本くん、すぐに鉄会長にどう対応すればいいのか連絡を」

俊彦は冷静に対応する胸の打ちで、お預けを食ってしまったことに激しい憤慨の念をいていた。

シンラ研究所を訪れる松雪貴子。高木はやはり広田議員が気になる。一人で議員の自宅に張り込みにいっていた。

貴子が応接室らしい部屋に通されると、すでにそこには関俊彦が座っていた。

「お会いできて光栄です。関博士。まさかこんなにも早く取材に応じてくださるなんて本当に感謝します」

貴子は氷の彫刻のようなその美しい顔に微笑を浮かべ頭を下げた。俊彦の方も負けじと営業用の表情を作って彼女を歓迎する。

「いえいえ。お会いするのは始めてでしたね。記者としてご活躍しているとは拝見しておりました」

「あまりいい噂ではないでしょう？ 敵ばかり作っていますわ」

「それはまあ 記者の勲章のようなものでしょうから……それにしてもこんなにも美しい方とは」

「ふふ。それはお互い様ですわ。写真で拝見してたよりもずいぶんお若くてハンサムでいらっしゃる」

「恐縮です」

互いに互いの隙を伺うような誉め合い。曲者同士ではあまり意味のなさない牽制。

「ところで」

挨拶をしソファ を勧めてお茶を出す。そんな形式的接客が済んだところで俊彦の方から話を切り出す。

「今日はこういったご用件で？」

その言葉を皮切りに貴子の表情が一筋鋭くなった。とてもよく磨かれた刃物のようだと思ふ。自分を脅かしかねない凶器にも関わらず、その美しさは人を魅了する。

俊彦は背中を汗を掻いていた。

「不躰で申し訳ないのですが、とある筋の情報でおたくさまのセクションで開発中の人造人間が完成間近と耳にしまして」

「ほう、それは早耳ですね」

鉄会長からはある程度、本当のことを流すように指示されていた。或いは一気にマスコミを味方にする算段を模索しているのかもしれない。

「確かに完成間近ですよ。気密事項などの調整もあり、残念ながら正式な記者発表は当分先になる予定ですが」

「そうなんですか。実物を拝見出来る日が楽しみですね……」
「ところで」

ほらきた。

記者特有の切り返し。この絶妙なタイミングがじりじりと相手の

突破口を塞ぐ包囲網となるのだろう。

「私どもでおたくさまが現在発表している情報を出来るかぎり集めて参りましたの」

そう言つて貴子は鞆から資料の束を取り出し、ブルに広げる。

「それで、その解説をですね　　そうそう、これだ……人工細胞
キザン　　これつてやっぱり中国の山から命名されたんで？」

「あの諸葛孔明も攻略に難航したとされる要害のことですか？直接、
訊ねたわけではないのでなんとも」

「シンラ博士は三国志がお好きだったですかねえ？」

「さあどうでしょう」

「ええっと　　人格移植AI……つまり、この組合せは粘土のよ
うに人の手で造形しやすい細胞の脳味噌に人間の人格を焼き付ける
ようなものですよね？」

まったく意図とはかけ離れた話題をしてから核心をつく。本音を
聞き出すための常套手段。

分かつていればそんな手に引つ掛かりはしない。伊達に天才をや
つてゐるわけではないのだ。

俊彦は笑みを崩さず貴子の質問に答える。

「ええ、ですが細胞や脳髓というよりは複雑系の有機コンピュ
タの再現ですね。完全な制御が出来る以上、命ある奴隷ではなくあ
くまでも人格のある道具ですから」

「ええ　　わかつています　　そうですね。え」と……有機コ
ンピュタの制御と申されますと具体的にはどういった方法をと
るものなんでしょうか？」

「詳しいことは気密事項ですが、主に内分泌系の制御になります」

貴子にはっこりと首肯する。そして思いついたように燥ぎながら、
「なるほど……ふふ　　バカみたいな質問ですけど、その人造人
間ってお笑いのテレビとか見て笑うのかしら？」

と訊ねた。

それに対して俊彦は得意そうに頷く。

「もちろん。こちらが設定段階でタブにしなければの話ですが」

「フランダスの犬とか見て泣いたりも？」

「おそらく」

「へえ　　そうそう、ロボット三原則についてなんですがたしか『第一原則・ロボットは人に危害を加えてはならない。あるいは、何も行動を起こさずに、人間に危害が及ぶのを見過ごしてはならない』『第二原則・第一原則に反しないかぎり人間の命令に従わなければならない』『第三原則・一、二原則に反しないかぎり自分を守らねばならない』でしたよね」

「ええ」

「これって　　」

貴子は何かを思慮するように顔を横に向けぶつぶつと呟き始める。
「自分を守るということは、自分が壊れないようにするってことよね……これって矛盾してるような」

「はい？」

俊彦の中に一抹の不安がよぎった。貴子は澄ました顔で彼に告げる。

「ええ　　その第一原則、第二原則の通りにすればロボットは必ず人間から攻撃を受けますよ。ふふ、そういう病んだ人間は大勢いますから。なのに自身を守れという。ただのシリコンコンピュータでプログラムに従うだけのロボットならいいんですよ。いくら罵倒されても、殴り蹴られても感情なんてないんですから」

「それは　　」

俊彦はここにきて初めて笑みを消した。

この女っ　　！？

「三原則が最初に提唱されたアシモフの小説にでてきたロボットは矛盾した命令に出くわした場合、回路が焼き切れたりしてましたよね。まっ実際にはエラ　となつて受け付け拒否が起こるだけでしょうが。でも、この人造人間は違う。人を模倣しすぎている。複雑すぎる。お笑いを見て笑って感動映画で泣くことが出来る。笑えると

いうことは欲求を満たそうとする力があるということです。泣ける
ということは傷ついたら嫌だと思えることです。その上、自分を守
れと植え付けられる。それなのに人間には逆らえない。フラストレ
ションが発生する条件としてはこの上ないですよ」

「……………」

「人に忠実な人より優れた人造人間」その心が　いえ、あえ
てプログラムと言いましよう。それが奥深くで生じた矛盾によって
壊れないといいきれますか？内分泌系の制御。快樂のベクトルを操
作すること。命の奴隷。あなたはあくまで優秀な有機コンピュ
タの再現だと言いますが、ならあなたはその人造人間の構造を10
0パセント把握できてるんですか？決して暴走しないといいきれ
ますか？」

淡々と語る貴子の言葉に俊彦は、先ほど自分を魅了した美しき刃
物を喉首に突き立てられた思いがした。

「ひつ必要なのは制御システムの把握だ」

なんとか貴子の言い分に待ったを掛けようと言葉を絞るが、先程
までの余裕はまったくない。俊彦の声は震えている。

「たとえば　そう、たとえば自爆因子を組み込むとか。それに
壊れれば捨てればいいだけの話だ。いや違う　違います。だい
いち必要なんです。この人造人間が……。知ってますか？このまま
少子化が進めば、来世紀中には日本の壮年人口は破綻してしまうん
ですよ！国の労働力が消えてしまえばいったいどれだけの悲劇が待
っているか　そのために　いえ、絶対にいるんだ。僕が

「

……………」

貴子は真剣な表情のまま、心の中で冷笑を浮かべていた。

未知数が露呈していく。濃霧を払う材料としては申し分ない。

「膨大なプログラムのスパゲティ化　現在、最も問題になっ
ているテクノクライシスの一つですよ」

まるで『王手』と宣告する棋士のように貴子は言った。

「くっ」

俊彦は俯くとポケットに挿していたボ
ルペンを手に取り、忙し
く芯を出したり引っ込めたりを繰り返す。

「貴様」

下を向いていた俊彦の目がぎょろりと動いて貴子を捕らえる。

そして、

「まさか「アシハラ」の差し金」

「っ!？」

鬼首が降りかかる。

「博士っ！」

ノックもなしに応接室の戸が開き、研究員が大童に駆け込んだき
た。

「？」

「息子さんが車に」

「へっ!？」

気温三十度・湿度八十パ セント以上の熱帯夜。

「スア ハア スア ハア」

樹東は窓を閉めきつた部屋の隅で布団を被って震えていた。

「スア ハア スア ハア」

先程まで辛酸が呼ぶ興奮で床をのた打ち回っていた。

「スア ハア スア ハア」

電気は帰宅したときのまま点けてない。とかく絶望に似た暗闇の
中で樹東は一人打ち拉がれていた。

「スア オト スア サン」

昼間、霊安室での出来事が頭によぎる。

「……………」

呆然とやってきた父が横たわる光冴の顔に掛けられた白布そつと摘んだ。

『嘘だ』

吐く息だけで呟いてから、狂ったように光冴の体に泣き絶る。

『嘘だっ　嘘だと言ってくれえええ　こっさああ』

父の絶叫に、膝に顔を押しあてて隅の地べたに直接座っていたうの肩がピクリと跳ね上がった。

父に付き添ってきた看護師が沈痛な面持ちで佇んでいる。

『嘘だよなあ光冴ああ』

父の悲愴が狭い霊安室にこだました。

『だって……だって……もうすぐだったのに　あとちょっとで三人で暮らせるようになるはずだったのに……』

瞬きすることも口を閉じること忘れ、パイプ椅子に凭れ掛かっていた自分を父が睨み付ける。一瞬、光冴のそれとダブって心臓が締め付けられた。

『お前がっ！お前がいてなんでっ！』

狂気の表情をした父が自分の衿を掴み上げる。

『やめて！？おじさん』

ゆうがバネのように跳ね起きて自分と父の間に割って入ろうとする。

『落ち着いてください！お父さん』

看護師も父を止めに入った。

『何のためにお前を光冴と』

『ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ』

『

騒ぎを聞き付けて医者だとか看護師とかが霊安室にばたばたと駆け込んでくる。

結局、父と引き離されるように自分が部屋から出された。後は全てから逃げるために一人帰宅した。

「ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ

「
樹東は呪いのように謝罪を繰り返す。

「ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ

「
光冴がいなくなった。世界から……自分の前から消えた。訳が分から
ない。理解することが出来ない。

「ハアッハアッハアッハアッハアッ

吐き気が襲う。

「ぐげえ うあ
「

朝食べたきり他に何も食べてない。胃酸だけがその出口を求め吐
き出される。

「げぼっげぼっ

「
咳き込むと残った汚物が糸を引いて口からたれる。

「……………」

樹東は汚れた床の上に崩れ落ちた。まとまらない思考に時計の進
む音だけが耳にまわり付く。

。展望の効かない夜が明けるには秒針の刻みがとてももどかしく

シンラ研究会・人造人間開発部。

「本気ですかっ!？」

研究員の一人である山本博士はたった今、俊彦の放った言葉に我
が耳を疑った。

「もう少し様子を見たほうが……もし、システムに欠陥が見られた
ら
「

年の若い山本は、言葉を選びながらも俊彦に思い止まるよう説得
する。それだけの実力と信頼が自分にはあると彼は自負していた。

だが、俊彦は泣き腫らした目を山本に向け首を横に振る。

「もう既に鉄会長には話を通してある。会長は二つ返事で快諾してくれた」

「くっ」

あの鉄総司が許可したのなら、これは一研究員の山本が口出しできる次元ではなくなつたということだ。へたをすれば命にかかわることとなる。だとしても納得することはできない。

「一研究者としての意見を言わせていただきます」

山本は腹に力を入れ言い放った。

「これは明らかに非人道的な行為であり、あなたは私的感情で判断を誤っています。長年お世話になつているものとして私はあなたを尊敬しています。今のあなたの境遇に同情もします。だからこそ私は自暴自棄とは思えないあなたの行動を諫めたいんです」

かつて山本がこれほどまでに自分の意志を曝け出したことはない。彼は常に人を立てることを忘れないお人好しな男だ。だからこそ今自分にやれること、それが一個人としての責任なのだと考えることが出来る君子でもある。きっぱりと言い退けることが礼儀であること。俊彦は部下の心遣いに感謝した。しかしそれでも曲げられないこともある。それが自分の幸せなのだと信じて止まない道程。

「ありがとう山本くん。でも、もうだめなんだ。早く　早く次の段階に進まなければ僕は壊れてしまう。あの女の言ったことなんかもうどうだつていい。妻の、ジンの真意に触れることだけが僕の全てだ。そのためにクロスの成果を手っ取りばやく知る必要があるんだ」

「……………」

「それにこれは樹東のためでもある」

「息子さんの？」

俊彦は自嘲気味に頷く。

「アイツは光冴がいなきゃだめなんだ」

「……………」

「さつき、樹東に酷いこと言ってしまった。本心だった。それでも彼には感謝している。だから光冴の代わりにクロスを与える。僕にはそれしかできないから」

そう言つと、俊彦はゆっくりと振り替へり人の形を見据える。

人工子宮の中でじつと佇むそれに山本も目を向けた。

「やはりあなたは間違っています」

もっと他にたくさんやり方があるはずだ。それらを全て放棄して、最も背徳な果実に手を延ばそうとしている。

「ばかだと思うか？」

俊彦は疲れ切った笑みで問う。

「ええ、ばかです。……いえ、ばかなのは私も同じだ。この研究自体愚かしいことだったのかもしれないと最近になって後悔しているんですから」

「そうかもしれない」

「そうです」

「だけど……それでも人は、人形が必要だったんだよ。自らを慰めるために。たとえそれがどんなに神を冒涇した行為だとしても」

俊彦は静かに告げた。その象徴である人の形に否定も公定もせず
に。

いつのまにか樹東は眠りに就いていた。いや気を失っていたというほうが正しいのかもしれない。それなのに彼は布団の中にいた。

「うつつ」

「」

物凄い頭痛で目が覚める。

目を開くと樹東は、今置かれている状況が把握できずに、いつと
きの間ばうつとしていた。しばらくして尿意があることに気が付き
彼は這うように布団からでる。そのまま四つんばいの格好で台所へ
続く襖を開けた。

「おはよう」

「……………」

樹東は硬直する。

なぜか台所のテブルにゆうが座っていて当たり前のように挨拶してきた。どういふことを考えようとするが頭痛がそれを邪魔する。樹東はとりあえず小用を足そうと、よろけながら立ち上がりトイレに向かった。

「……………」

膀胱をすつきりさせてから台所に戻るがやはりゆうがいる。しかも、テブルの上にはなぜか二人分の食事が用意されてあった。

樹東はそれらを見つめ、流しの蛇口を捻って水をがぶ飲みする。これでもかと喉を潤してから、樹東はその場にへたり込んだ。

「あのさ玄関、開いてたから勝手に入った」

ゆうは申し訳なさそうに言う。

そこでようやく樹東は思いつく。自分がきちんと布団の中にいたのはきつと彼女が畳の上に倒れていたのを運んでくれたからだ。

「それから台所も勝手に使わせてもらった」

「……………」

「キキが作ったのに比べたらまずいかもしれないけど食べて」
「とてもじゃないけどそんな気になれなかった。」

「いない」

樹東はフロリングの床に目を落としたまま小声で答える。そんな彼を見下ろしているゆうは少し強制するような響きで、

「食べて」

「ともう一度進める。樹東は首を振って拒否する。」

「食べて」

それでもゆうは無理強いする。

「いない」

今度はきつぱりとした口調で断る樹東。

「食べてよっ！」

「いらないうっていつてんだろっ!？」

語気を強めたゆうに刺激されて樹東も怒鳴った。ゆうを睨み付ける。彼女は自分は間違ったことをしてないと真つすぐ樹東を見下ろしていた。

「……………」

圧倒的な精神力の差に、樹東は根負けして頂垂れる。

「ごめん。食欲がない」

叱られた子供のようになった樹東を目にしゆうは、

「あつそ。じゃあ私だけでいただくわ」

と自分の作った食事を食べ始めた。

「けっこういけるじゃん」

わざとらしく批評を口にし、ご飯を掻き込む。

ゆうとて食欲なんてもうとうない。光冴のことは自分のせいだ。

そう考えると胸が焼ける思いだ。それでも、自分より落ち込み今にも生きることを放棄してしまいそんな樹東の歩行器になろうと必死でご飯を喉に押し込んだ。

「……………」

樹東もそれを感じ取り泣けてくる。ゆうへの感謝ではなく、自分という存在の違和感に情けなくなっていた。今にも蒸発していきそうなのがする。

「……………」

カチャカチャ箸とお茶わんの当たる音だけが空間を支配していた。外界から隔てられここだけ時間がゆっくりと流れているような錯覚に陥る。世界には自分とゆうの二人だけしか存在していないのではないかと感じる。

本当のことだ。

光冴がいらない以上、自分という存在がぽっかりと世界から孤立し、そこに無理遣り侵入してくるゆうだけが隣にいる。

殻に綴じ込むことさえ出来ない。そう思ったとき、家の電話が鳴り始めた。

「……………」

樹東は動かない。仕方なくゆうは食べるのを止め立ち上がった。

「はい、もしもし関ですが。えっ？あっはいそうです。いいえ。」

はい、今かわります」

ゆうは受話器から耳を外し、

「お父さんからよ」

と樹東に出るよう進める。樹東は顔を上げ親機の横にある子機を目で指した。

「ふう」

世話が焼けると息をついてから、回線を子機に切り替え樹東に手渡した。

「もしもし」

恐る恐る電話に出る樹東。

「うん。大丈夫」

父が自分の安否を気づかってきた。思えばこんなこと、生まれて初めてではないだろうか？

「いいんだ、べつ」

昨日のことを謝ってくる。樹東としては謝られる謂れはないと思った。父が言ったことは本当のことだし、言われて当然だと思っていたから。寧ろ謝られたりしたら却って心苦しい。

「うん。わかった。えっゆうも？」

樹東は自分を見守って見下ろしているゆうの顔を見た。彼女は小首を傾げる。

「わかった。聞いてみるよ」

そう言って電話を切る。

「どうかした？」

「今から迎えをよこすから、研究室にこいって……ゆうにも出来れば来てほしいらしい」

「わたしも？」

ゆうは驚く。樹東の父が何の用だろう。いやな緊張が込み上げて

くる。光冴の死に同じ息子である樹東に対してあんな取り乱しかたをしていた姿を見ていては、あまり会いたい気にはなれなかった。光冴の死の原因といえる自分がどの面下げて会えばいいのか検討もつかない。

「……………」

ふらふらと立ち上がり着替えをしようと自室に向こう樹東を見て、彼女はさつと彼の体を支える。

樹東の重みを感じながら、これは光冴の重みと同じなのだとゆうは不思議な感じを覚えた。

シンラ研究所に到着した樹東とゆうは、迎えにきてくれた山本にテレビモニタ やパソコンみたいなものがたくさんある講堂くらいの広さの部屋に通される。正面にあるキボドが並ぶカウンタ調のテーブルに十人近い人たちが座っていて何やら専門的なことを言っている。その部屋の中央に設置されたデスクに俊彦が腰を下ろしていた。二人がやってくると彼は立ち上がり、

「わざわざ悪かったね、樹東」

と疲れた笑みを浮かべた。昨日の今日で目の周りは赤く泣き腫らしているが、ずいふんと落ち着いており、どこか余裕すら感じられる。

「柊沢さんも、ご足労ただいて申し訳ありません」

丁寧にお辞儀をする俊彦に、ゆうもかしこまる。

「いいえ、その」

「昨日はたいへん失礼なところをお見せしてホントに恥ずかしいかぎりです。今日も、樹東のことが心配で訪ねてくださったんでしよう」

「あつその ええ」

「ありがとう」

深い感謝の言葉。俊彦の敬愛が目に見えて伝わってくる。

「いいえ」

思いがけず懐かしい思い出に出くわす。そんな郷愁にゆうは寂しく目を細めた。

この人、光冴に似ている。

親子なのだから顔が似ているのは当たり前だ。しかし見るものが受け取る雰囲気は樹東のものでなく、やはり光冴のものに近い。大人になれば少し鬱陶しくなっていく純粹さ。生きていくのにときとしては邪魔になってしまいう一途な感情。子供のように我侭が罷り通っているのだと思わせる無邪気な一面。

それは愛しくも儚い保育器の中の未熟児。光冴の場合、樹東がそれだった。守りすぎてダメにする。光冴自身はそれに気が付き、藻掻いていた。日が変わる度に樹東に対しての態度がコロコロと変わっていたのが他人のゆうにでも分かった。甘えながらじたばたしていた。彼は焦っていたのだ。保育器から這い出ることに。だけど焦りすぎて呼吸の仕方を知らぬまま蓋を開けてしまった。

この人は……この半端に力を持った大人は誰に心を預けているんだろう？

「樹東、今日来てもらったのはきみたちに見てもらいたいものがあったからだよ」

「見てもらいたいもの？」

俊彦の言葉に樹東は疲労しきった顔を歪ませた。俊彦はそんな彼を心配することなく話を進める。

「うん。僕の研究の成果だ。あれだよ」

俊彦は左の壁を指差す。そこにはMRIのような筒状の機械が縦向きに置かれていた。

「山本くん？」

「はい。全ての準備が整いました」

抑揚なく答える山本の言葉に俊彦は大きく頷いた。

「クロシングオバ 始動っ！」

俊彦の宣言と共に部屋中が騒がしくなる。『始動プログラム入力』

『初期始動完了』

『回路切断』

『プルコード』

『SAF排水』

オペレタの口早な報告と共に、筒状の機械の駆動音が辺りに響いた。

『AU開放』

機械のフロントが音を立てて上に開いていく。

「足？」

ゆうは眉を顰めた。緩慢に上がっていくフロントの隙間から人の素足が見える。

「まさか……」

樹東の顔が強ばった。

見覚えのあるその体。毎日脱衣所の鏡で嫌でも目にしている。そして、それと同じものがこの世にある。いや、昨日まであった。裸の男体が首まで曝された。

そして、顔が。

『光冴っ！』

樹東とゆうの声が重なった。

そう、そこに光冴が立っていた。ぬめぬめとした液体塗れになりながら、目を瞑っている。やがてそれは顔を上げ目蓋を開けた。

「お兄ちゃん？」

その言葉に樹東は弾けたようにそれに駆け寄る。

「おいっ！？お前、光冴なのか？」

肩をがっしり掴み詰問した。

イエスだつて言ってくれ。そうじゃなきゃオレっ……。

熱くなった血が頭の血管を押し広げて駆け巡っている。答えの是非によつてはショックで死してしまうのではないかと思われるほどに。

だが、樹東の期待に反して光冴の顔は首を横に振る。

「僕はクロスだよ、お兄ちゃん。光冴の人格が移植された人造人間なんだ」

「人……造？」

樹東は凍り付く。疲れた頭ではそれがどうということなのか理解できなかった。

「前に人造人間を作るのに光冴の心をコピーするって言っただろ。それがこのクロシングオバ……クロスだ」

俊彦は一人と一体に歩み寄り、裸のままのクロスに白衣を羽織らせる。

「人造人間？これが」

信じられないと、樹東はクロスの顔を撫でた。まったく人間と変わらない肌。姿形も表情の作り方も喋り方さえ光冴とまったく同じである。

後ろでその様子を見ていたゆうは考えを巡らせるように口を押さえている。

「人格移植を行なう際、本来なら unnecessary 記憶は排除するつもりなんだけど、今回は試験型と言うこともあってそのまま移植した。もちろん命令に従ったり、人を傷つけてはいけないなどという制御プログラムは内蔵されているけどね」

「……………」

そうか。体格は今のものでも人格のコピーをしたのは五年前。だからこいつは『お兄ちゃん』っていうんだな。

樹東はいつのまにか自分でも気が付かないうちに薄笑いを浮かべていた。

「なあ……オレのことお兄ちゃんって思うのか？」

べとべとしたクロスの髪を撫でながら訪ねる。

「うん。制御や知識レベルを上げてから少し混乱してるけど、ほとんど光冴と変わらないから」

クロスはにっこり笑って答えた。

「お父さん」

樹東は血走った目を俊彦に向ける。

コレをくれ。コレがなきゃオレは死んでしまう。

「クロスの成長抑制を完成予定年のオリジナルと同じ年令にしておいてよかった。肉体の精製にかかる時間にはまだ課題が残されているからね。でもこれくらいまで育っていれば十分だ。抑制してこれ以上成長しなくてもそれほど目立つことはないしね」

「……………」

「樹東。クロスには今日から当分の間、光冴として生活してもらう。クロスが成功品かどうか判断するには日常生活に置くのが手っ取り早いからね」

「じゃっ じゃあ 」

歡喜を押さえるべく声を震わせる樹東。

「一緒に暮らしてもいいんだね？オレがもらってもいいんだね？」

「ああ、光冴として接して上げなさい」

俊彦の言葉を耳にし、樹東はクロスを抱き寄せる。

「いいか。今日からお前は光冴だ。オレがお前のお兄ちゃんだ。いいな！？」

「うん、お兄ちゃん」

樹東は喜びで胸がつまり涙を零す。

コレは光冴だ。誰が何と言おうが光冴だ。オレの生きる意味が戻ってきた。お父さん、ありがとう。

「……………」

その光景を見守っていた人々のほとんどが喜ぶ樹東にほろりとなる。しかし事情にある程度明るい山本は父親が父親なら息子も息子だと、弟の代用品で心を満たしている樹東に怪訝な目を送っていた。そしてもう一人、

「ちよつと待ってください」

柊沢ゆうが思わず声を上げる。

「私あんまり頭よくないから話それほど理解できたわけじゃないけど、その子は光冴じゃなくておじさんの作ったロボットなんですよ

ね？それを光冴とすり替えて、日常生活を送れるかどうかテストするためいき
樹東くんと共に生活させる、そういうことですよ
ね？」

「ええ」

「そんな安全かどうか分からないものと、樹東くんと一緒にさせるんですか？」

「それは」

俊彦は困ったというより悲しんだ様子で目を逸らした。ゆうはそれを見て心臓がどきつと跳ね上がる。自分が傷つけてしまった、自分が可哀相なこの人に悪いことをしてしまった。

「くっ」

ゆうは俊彦の雰囲気は衝迫されそうになるのを必死で押さえ、

「キキもキキだよ！」

と代わりに樹東の説得を試みる。

「たとえ見た目は同じでも、それは光冴じゃないんだよ。それともあなたにとっての光冴はそんな作り物で誤魔化せるような安っぽいものだったの！？」

「うるさい！」

樹東はクロスを抱き寄せたまま怒鳴り声を上げる。

「他人のお前にオレたち家族の何がわかるってんだ！？」

「っ！？」

「オレたちは常に光冴が中心だった。その光冴がいなくなって、心にぽっかりと穴が空いて、それを埋めるためにこいつに縋って何が悪いっ！？」

絶叫しながら樹東はクロスを抱く腕に力を込める。

「痛いよ。お兄ちゃん」

か細いクロスの声に樹東はハッとなって、

「ごっごめん」

慌てて腕を解く。

「ごめんな光冴。大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ」

どこことなく嬉しそうに訊く樹東にクロスも同じように笑って頷いた。

そして樹東はゆうに顔を戻し、

「オレの心を埋めてくれるのは光冨だけだ。たとえそれが人形でもな」

「……………」

分かってる。そんなこと、キキを好きな私が一番よく理解している。だけど、たとえそれがこの世にあるたった一つの方法だったとしても、どんなに残酷な答えだとしても、間違っているものは間違っているわ。

ゆうはその様子を後ろで見守っていた山本を見た。

彼もゆうと同じことを感じている。それでも俊彦の背後にある、とてつもない力の流れには逆らうことが出来ないと苦虫を噛み潰した表情で佇んでいる。

「柊沢さん……………」

俊彦が真つすぐとゆうの目を見て口を開いた。

「ありがとう。あなたはホントに樹東のことを思ってくれているんだね」

「あつ」

穏やかな響きを持つその言葉にゆうは赤面する。それを見て俊彦は優しく微笑んだ。

「今日はあなたにお礼が言いたくてご足労いただきました。光冨のこともいつも見守ってくれていたそうで 腑甲斐ない父親として何度お礼を言っても足りないくらいです」

「……………」

「ですがもう一度だけ僕の身勝手を許していただけませんか。僕の息子たちを、もう少しだけ見守っていてください。お願いします」

俊彦は地面に頭が着きそうな勢いで頭を下げる。

やはり、なんて我侘な大人だろう。すべて自分の思い通りにしよ

うとしている。そんな風に言われてしまったら断れるわけない。

「うつ　うつ　」

樹東が泣いている。

光冴がいなくなつてから何度見たらう。いなくなる前は一度も見ることがなかったのに。

もういやだ。これ以上彼のそんな姿を目にするのは。

「見てください！貴子さん」

シンラ研究所前に車を止め見張っていた貴子たち。樹東たちが出てくるのを見て高木が声を上げる。

「二人いる。片方は昨日事故で　」

「ええ」

貴子は口元だけで笑い、樹東の横で笑っているクロスを見据えた。
「とうとう、暴走し始めたようね。狂った果実は甘いだけでは済まされないわ」

「あれが人造人間」

信じられないと高木は呟く。

「人間の代わりの労働力。寧ろ人そのものの代わりだわ。だからこそ、恐ろしいのよ」

俊彦の言葉。『知ってますか？このまま少子化が進めば、来世紀中には日本の壮年人口は破綻してしまうんですよ！』

人のやること、やれることが増えすぎた。

彼の言う通り、人は文明の進化によってその歴史を閉じてしまうのかもしれない。

「.....」

そのときは潔く滅びればいいのよ。それが私たちの選んだ道ならね。それでも自ら代行者を作り上げ、破滅を導くことは決して許されるものではないわ。

「貴様、まさか「アシハラ」の差し金

彼らは私のことなど全てお見通し。

もう、引き返すことはできない。

そう、自分はハンタ だ。真実という濃霧に包まれた獲物に照準を合わせている。

つづく

ムスブ

ムスブ

その光景はいつもと変わらぬ朝に見えた。

さあずま樹東がいてゆうがいる。そして光^{こくさ}冴のカタチをしたものが笑顔を浮かべて歩いている。

変哲もない少年少女の登校風景。

ただ一つ、人ならざるものが在ることを除いて。

「本気で光冴くんとお人形をすり替えるつもりなのね」

貴子は路上駐車した黒い4WDの中から二人と一体が歩いていく姿を遠巻きに観察していた。関俊彦だけならいざ知らず、その息子の樹東まで何食わぬ顔で実験に加担するとは彼女には少し理解できなかった。

或いは、知らされてなくて人の形を光冴本人と思い込んでいるのか？ いや、それはないはずだ。調べでは光冴の最後を見届けたのは他ならぬ樹東だったのだから。

「関光冴の死亡届けは出されていませんね」

助手席に座ってノトパソコンを弄くっていた高木が貴子に告げる。

「それどころか、ひき逃げ犯の搜索はすでに打ち切られています」
事故そのものをなかったことにしようとしている。信じられないといった様子の高木に貴子は温い笑みを浮かべる。

「あの男が関与しているんだから、それ位するでしょ」

「そうですね」

鉄総司 「蠅の王」と呼ばれる男の見えざる手がそこら中に存在する。そう考えるとぞっせずにはいられない。

「それにしても妙な気分になるわね」

貴子は遠ざかっていく樹東たちに目を戻して言った。

「あんなによく笑う人造人間を見てると」

クロスは先程から引つきりなしに喋っていて、ゆうがそれに相槌を打ち、樹東はそれをいとおしいそうに横目で眺めている。会話の内容は聞こえないが、彼らの表情を見ればそれが滑稽な話だということが推測できる。

「どうして」

高木も二人と一体に目を向け呟く。

「どうして、人造人間に心なんて必要なんだろう？」

人造人間は所詮労働力の補強。あんなふうに笑えることは寧ろ邪魔なはずだ。

「心が必要なわけではないのよ」

「えっ？」

「心はただの副産物。必要だったのはただ、賢い人工頭脳」

今世紀に入り、将来的な見通しとして急浮上した問題。労働力の確保への不安。

少子高齢化。

職業選択の自由。

ヘッドハンティングなどにおける、有能な人材の海外流出。

無気力症候群の増大。

原因は数多にあれど、前々から問題視されていたことの積み重ね。それでも、実際に目に見えて深刻化しなければ誰も本気で対処しようとしなかったものばかり。気付いた頃には後の祭りで狼狽えることしかできない。

そこに降って湧いて出てきた人工細胞キザンを用いての人造人間構想。

「その前からロボットによる労働力補正の案はあったの」

だが、一番に人材を必要としたのが介護や看護、救急といった細やかな判断が必要とする環境だった。

「シリコンコンピュータ、いわゆる集積回路による人工頭脳では、不可能とまではいわないにしろ予算やコンピュータ そのもの大きななんかを考えた場合、とても現実みを帯びている話とは言い難かったのよ」

キザンを使つた有機コンピュータ。人の脳髓を模倣する人格移植AI。

「よくよく、考えればクロン人間とそう変わりないように思えるけど、現実そんなことを論議しているほどの猶予がなかった。当然のように、人権保護団体や宗教家の猛反発はあつたけど、一人っ子政策で壮年バランスを一気に崩してしまつた中国を始めとしてアジア諸国の切羽詰まつた状況には何を言つてもむだだつた」

エネルギー 関連の会社を世界中に持つ鉄グループの存在も大きかつた。

「みんな面倒臭いのよ。シンラ研究会に年間ウン百億という費用を投じることの方が、原因の根本的解決を目指すより遥かに楽だからね」

そう。ロボットに心が必要だつたわけではない。全ては国を作つていく人間の怠慢である。

「そうか……だとして」

高木が何かを思いついたように呟く。

「どうしたの？」

「あついえ」

貴子の問いに誤魔化すような笑みを浮かべて首を振る高木。

「なんにしてもこんなこと間違つてるんですよ。しっぺ返しを食らうのは、どんなときも原因を作つた人たちじゃなく、弱者や関係のない人々だというのに」

「そうね」

すでに樹東たちの姿は見えなくなった。

学校に向け先回りしようと貴子はサイドブレキを下ろしてアクセルを踏みしめた。

「光冴っ！」

クロスを教室に連れていくと、既に登校していた光冴の友人数名が堰を切る勢いで集まってくる。

「お前、事故にあったって　大丈夫だったのかっ!？」

その中でも特に親しかった青木が心底心配した様子でクロスに訊ねた。フェイクで頭に包帯を巻いているクロスは、

「うん、大丈夫だよ。ちよつと頭打っただけだから」

とにつこりと笑って答えた。誰もその笑顔を人が作った模造とは思わないだろう。それを見た友人たちは皆同様に安堵で胸を撫で下ろした。

「はあ　心配したんだからな」

「携帯全然繋がらないしよ」

「今日、こなかったら家に行ってみようって話してたんだぜ」

「携帯壊れちゃって　みんな心配してくれてありがとう」

のんきそうに言うクロスを見て、全員自分たちの取り越し苦労に苦笑する。本当のことに気付くにはクロスは余りにも光冴そのものだった。だが、その中で一人だけ異変に気付くものがいた。

「あれ？」

青木だ。彼はクロスとその後立っている樹東とを見比べる。

「光冴、なんか白くなっただ？」

「っ!！」

しまったっ!!

樹東はどうしてそのことに気付けなかったのかと内心焦る。当然だ。樹東も光冴も色白の方とはいえ、生まれたてのクロスと十七年間紫外線にさらされて生きていたものとを比較すれば一目瞭然である。

樹東は助け船を求めるべく横にいるゆうを見る。ゆうは慌てて、

「ちょっと貧血気味なのよ。多少、出血したし　病み上がり何だからあんたたちもこんなとこで立ち話させてんじゃないわよ」
クロスの腕を取り光冴の席へ引いていく。それに釣られるように、みんなも移動を始めた。

「……………」

心配そうにクロスを見守る樹東。そんな彼を気にして青木が、
「オレたちで気分悪くなつてねえか気いつけとくから、そんなに監視してんじゃねえよ。ブラコン」

「……………」

棘のある言葉に少しむっときたが、樹東は無関心を装いクロスに暇を告げる。

「じゃあな、光冴」

「うん」

クロスの満面の笑みを受け取って樹東はその場を後にした。

「すかしてんじゃねえよ、バァカ」

廊下に行く樹東の背中に青木は小声で毒突いた。

「白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ……………」

一時間目、樹東のクラスは国語の授業が行なわれていた。

「じゃあ、牧水の短歌の感想を聞」

「えっ？」

気も漫ろだった樹東は教師からの突然の指名に我に返る。クロスのことが心配でたまらず授業どころではなかったのだ。

「あっえっと　」

樹東は教科書を手にし立ち上がる。

「この短歌の出来は、白とアオという色彩を象徴的に用いており、空と海の対句によりアオの大きさと白鳥の小さを表現した上で、隠喩的に世俗と離れた作者の孤独感を表現している所にあります。更に倒置法によりその効果を向上させているのだと考えられます」

樹東は淀みなく答える。微塵も一瞬の焦りの色を見せることなく。教師はぼやくように言う。

「百点」

「……………」

「ただし、オレが訊いたのは感想であつて作品解説ではないがな」

「……………」

教師に揶揄されても樹東は無表情にただ前の黒板を眺めていた。彼が何を考えているのか計りかね教師はため息を吐く。

「宮下、お前感想言ってみろ」

「えっ おれ？」

樹東の後の席の生徒、宮下は突然教師に質問を振られどきまぎとなる。

「えっと悲しいかんじがする かな？」

結局、照れ笑いを浮かべ乍ら適当に答える宮下。

「五点」

「低っ！」

「だが関、お前のよりはましだぞ？」

「……………」

樹東は何も答えない。教師は更に続ける。「お前、こないだの『こゝろ』感想文 倫理の椎名先生に見せたら、これだけ臨床心理学に長けたレポート、大学の専科生にだって書けないだってよ。分かるか、オレの言っている意味が？」

「……………」

「お前は頭がいいし、知識だつて半端じゃない。でも、感想を書けといわれたんなら感想を書けよ。自分の心の断片を表現する大切さを知るとか、それを養ふこととかが重要なんだからな。分かったか？」

「分かりました」

樹東は答える。しかし、国語教師からしてみればそう言っている最中にも、樹東からなんの感情を読み取ることが出来ない気がして

苛立ちを覚えた。

「もういい、座れ」

「はい」

樹東は静かに着席をする。

国語教師は牧水の歌の解説を始めた。ほとんど樹東の言ったことの復唱である。今の吊し上げとも思える行動、役目を取られた嫉妬心からとも感じられた。

「……………」

樹東は授業を聞くでもなく、只管シャ　ペンをノックして芯を出し続けていた。

「白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ……」

二時間目、今度はゆうたちのクラスが国語だった。

「じゃあ、牧水の短歌の感想を聞」

「はい」

教師に指名され、クロスは元気よく返事をして立ち上がる。

「えーとお、なんていうのかなあポツンってしてゾワゾワって感じ？ほら、そう……夜とかみんな寝てるのに妙に頭だけ冴えてて寝れなくて思わずお兄ちゃんを起こしたくなるときの気持ちみたいな」

「ふむ」

「まあ寂しいんだと思うけど、でもそれだけじゃない気もする。たぶんアオって色とかね海とか空とかに、ちよつとだけ希望の匂いもするのかなあ？よく分かんないけど」

「はなまる」

「えへへへ」

教師の苦笑混じりの褒め言葉に、クロスは上目遣いになり口角をきゆうと引き上げて微笑んだ。

「っ！？」

何の気なく振り返ってクロスを眺めていた青木の脳裏に言い知れ

ぬ不安がよぎる。

なんなんだ　　いったい……。

ただ光冴が照れ笑いを浮かべただけではないか。それがなんだっていうんだ？

「……………」

漠然とした迷いに理由を見いだそうとする青木。だが、何の答えも見つからぬままただただ時間は流れていった。

そして、放課後。

「光　　」

青木がクロスに声をかけようとしたが、

「光冴、帰るぞ」

いつのまに來たのか、教室の入り口に立っていた樹東の声に阻まれてしまう。クロスは青木に気付くことなく、尻尾を振るように樹東に駆け寄っていった。

「……………」

タイミングを逸し、なんとなく青木は茫然と一人と一体の背中を見送る。

ゆうが彼らを追うべく小走りで青木の横を通り過ぎていった。

「大丈夫だったか、光冴？」

下履きに履替えた辺りで、樹東はクロスに訊ねた。クロスは無邪気な笑顔で頷く。

「うん」

「ゆう？」

樹東はゆうにも訊ねた。ゆうは呆れたようにため息を吐いて答える。

「大丈夫だと思うわよ。内面は別としても、幼いところあったから光冴は。多少の不具合はいつもの冗談ってとられると思うし」

「そうか」

頷き樹東は歩き始める。ゆうとクロスもそれに続いた。

二人と一体が校門へと校内の敷地を歩いていると、彼らの目の前に野球のボールが降ってきた。樹東はそれを手に取り、ボールが飛んできた方を向く。

「おう、関！」

グラウンドからユニホム姿の野球部員が声をかけてくる。黒田だった。樹東をしつこく勧誘してくるエスである。

「悪いけど、ボール」

投げ返せと黒田が頼んでくる。だが、樹東はそれを無視してボールを地面に転がし再び歩きだそうとする。

「おいつ関！」

黒田の難色にクロスが樹東に代わってボールを投げ返そうとする。「行つくよー！せえのっ！」

「へっ？」

誰もが予想できないことが起こった。クロスの投げたボールの速さが尋常ではなかったのだ。黒田は思わず仰け反り、ボールは彼の後方の地面に深く減り込んでいた。

「あれ？まだ運動調整がうまくいってないのかな？」

クロスの眩き。ボールの速さは軽く二〇〇キロを超えていた。

「行くぞ！」

樹東は逃げるように早足でその場を後にする。

「変に思われたでしょうね」

校門を出て幾分か行ったところでゆうが口を開いた。

「知るか！」

樹東はイラついた様子で吐く。

「ちっ黒田の奴、いいかげんしつこい」

「アレでしょ。例の事件で野球部員の大半が退学になったから早急に部員獲得しなきゃ廃部になるってんで焦ってんのよ」

例の事件とは夏期大会予選で敗退した日、黒田と数名を除いた野球部員が飲み会を開いたその席で暴力沙汰が起き警察に補導されて

しまった事件のことである。退学者や停学者が出るまでに至り、その場にいた全員が部首になったのだ。

「ほら、球技大会とかでキキに憧れてる後輩とかけっこういるみたいだから、キキが入れば入部希望者が出てくるかもって思ってるのよ」

「オレの知ったことじゃない」

「じゃあ、ボク入るっかな？」

樹東とゆうのやり取りを聞いていたクロスが言った。

樹東は一瞬だけ驚いた顔をしてから、

「光冴が本当にしたいんなら止めないけど、父さんの許可がもらえるまでは我慢しろ」

と釘を差す。

それにクロスは素直に頷いた。

「まったく、高木くんどこまでお昼買いに行ったのかしら？」

運転席のシートを倒し助手の高木、というより彼が持つてくるはずの昼飯を貴子は今か今かと待ちわびていた。

「それにしてもあの運動能力。人間より優れたたつていう看板は伊達じゃないわけね」

不意にクロスの豪速球を思い出し、ぼやくように呟く貴子。先程まで高台からクロスの動向を双眼鏡で見張っていたのだ。

「……………」

ほぼ人間。にも関わらず、運動・知的共に能力は人間の比ではない人形。

貴子と思う。

アレにブラックマ ケット以外に商品価値を付けることができるのか。裏取引としての利用価値ならいくらでもある。だが実際アレを一般常識人が目の当たりにしたとき、果たして利用したいなどと

思うのか？

「生きた奴隷ではなく……か」

人々の欲望が世相に反映する。実害がなければ気付くことはなく、有害物質を垂れ流してしまふような。被害者は大抵、無関係者や弱者。高木の言う通りだ。

貴子がぼうつとそんなことを考えていると何ものかによってトンと運転席の窓ガラスが叩かれる。目を遣るとそこには警官が立っていた。貴子は慌ててシートを起こし、パワ ウインド を開ける。

「あの」

人のよさそうな顔をした警官は気を使った様子で口を開く。

「ここ、駐車禁止なんですけど」

貴子は内心やばいと思いつつ軽い口調で答える。

「あゝ連れを待ってたのよ。すぐ行くから勘弁してくれないかしら？」

キップきられるか？半ば諦めていると、

「構いませんよ。美人の頼みですし」

警官はおよそ相応しくない言葉を残しその場から去っていった。

「？」

こんなことがあるのかと、貴子は幸運を噛み締める気持ちより呆れる気持ちの方が先立ちつつ、小さくなっていく警官の背中を眺めた。

「あの警官、どっかで会ったことなかったかしら……」

思い出せない。思い出せないのだがごく親しかった誰かさんの顔が頭に思い浮かぶ。

「兄さん？」

なんでだろう……今更。

貴子は唇を噛んだ。

自分が捨てたのに。

「すいません。遅くなって」

高木が買物袋をぶら下げ戻ってくる。

「ええ？結局コンビニのパンなの？」

高木の昼飯のチョイスに腹を立てる貴子。高木は申し訳なさそうに頭を掻きながら弁解する。

「すいません。どこのお弁当屋も混んで。コンビニ弁当よりはパンのがいいんじゃないかって」

「しょうがないわね……パンに牛乳なんて昔のドラマじゃあるまいし」

「まあやってることは似たようなものですけど」

ヘラヘラしながら高木は言う。そんな彼の顔を見て貴子は思う。そういえばなんでこいつは自分に付いてきたんだろう？

貴子がフリ になるとき同じ出版社の後輩だった彼から自分を使ってくれと頼まれ何の気なく助手にしたのだが……。

「ねえ、高木くんもしかして私のこと好きだったりする？」

「ええっ！？何を今更 当然じゃないっすかあ！？じゃなきゃ追っ掛けて助手になったりしませんって」

高木の反応に貴子は目を丸くする。彼女としてはもっと慌てたり赤面したりを予想してたのだが。

「じゃあ、何でアクション起こさないの？」

子供じゃないのだから、好きなら好きで告白するなり何かしら行動を起こすのが普通ではないか。

「それはだって貴子さんボクのことアオウトオブ眼中じゃないですか。だから、ボクの魅力に気が付いてくれるまで待とうと思ったんっすよ」

「たぶん一生こないと思うけど」

苦笑しながらの貴子の言葉に高木は困ったと頭を掻く。

「まあでも、こうやって手伝いできてるだけでも結構楽しかったりしますし」

「ふ〜ん」

貴子は高木から目を逸らし少しの間考え込む。そして、

「命の危険があつても？」

と真剣な声で訊ねた。高木の方はいつものヘラヘラした調子で答える。

「そりや危なくないにこしたことないけど、死ぬときは一緒だつたんで映画みたいでカッコいい気がしますね」

「……………」

高木のバカみたいな発言に貴子は呆れる。

「そつえば、あなた家族は？」

「……………」

何の気なく訊ねた貴子。それまで笑顔だった高木の表情が一瞬だけ消える。それは本当に一瞬で、それでも貴子が見逃さなかったほど色濃く出ていた。

貴子は悪いこと訊いたと思った。

「あつえ」と

「……………」

「あつあの……………」

二人は互いに気を使った体になる。それに可笑しさを覚え高木は吹き出した。

「アハハ……………」 死して屍拾うもの無しなんですよ、ボク

「そつそう……………」

天涯孤独という意味なのだろう。それでも高木のお茶らけた言い草にどう答えていいか分からなくなる貴子。

「そうだ、さつきボク思ってたんですけど……………」 もし、今回このタイミングで光冨くんが死ななかったら、クロシングオバ……………」 がこんなに早く外の世界に出されることはなかったんですよ

「そつね……………」

「恐らくですけど、このイレギュラ……………」 がなければ関俊彦の方はもっと慎重にことを運んでいたはずですよ。でも、それは誰かさんの意図とは違った。だからこそ光冨くんは……………」

「まさか!？」

貴子は驚愕した。

「つまり鉄総司の目的は人造人間の量産ではなく始めからその暴走にあったとすれば」

「

- -」

「人造人間に使われている、人工細胞 キザン は恐らくシンラ博士が亡くなったときに外部に流失してしまったんです。だから、それが世に出てしまう前に、 キザン の危険性を人々に知らしめようとしているんじゃないでしょうか？」

「牽制、或いは原爆投下のような」

貴子はわなわなと体を震わせた。

「私はどうやら思い違いをしていたようね」

私はハンタ だ。真実という濃霧に包まれた獲物に 。

『変身』

それまで家族の生活を支えてきた男が醜惡な虫に変身したために、家族の手で部屋の中に監禁され蔑ろにされそして最後は父親に投げ付けられた林檎が元で死んでしまう。斯くて男の死によって家族は絶望の中の希望に手を延ばせるまでに至る。

「

.....」

樹東は無言で本をデスクの上に置いた。そして椅子から立ち上がり畳の上に寝転がる。

傑作と呼ばれるものの所以は、その示すものが読むものによっていかようにも取れるところにあるのだと思う。この作品にしてもそうだ。暗闇の中にも無数に転がる幸せを説いているようにも、人生を切り開く困難を説いているようにも取れる。

しかし、樹東の中に深く突きささったのはただ一つ。主人公である男の死。父親が投げた林檎。この作品の不幸は男が虫に変身してしまったことではなく、日常の影に腐敗が進んでいた家族の中に 。

「ちっ」

樹東は今日の国語の時間を思い出す。

自分にだって相手が何を訊ねているのかだとか、作品解説と感想の違いくらい分かる。『白鳥はかなしからずや空の青海のあをも染まずただよふ……』

あの歌を読んだときだって、世界の広さともうそこにいない光牙、そしてその代わりのクロシングオバに虚しさを覚えずにはいられなかった。

そう、いつも頭に浮かぶのは光牙のことばかり。

小さい頃はそれを素直に書いていた。

原稿用紙に埋まるのは『光牙が、光牙を、光牙だから、光牙は、光牙しか、光牙も、光牙に、光牙と、光牙』……。当然、同級生にからかわれた。自分だけなら別にどうだっていい。

光牙もからかわれたらしい。

もう、書けない。自分のことで光牙が傷つくことは絶対にあつてはならないのだから。

「光牙……うぐっ」

「お兄ちゃん」

クロスの声がして樹東の部屋の襖が開かれた。樹東は慌てて涙ぐんだ目を擦って、平然とした顔で対応する。

「どうした？光牙」

「宿題ほとんど終わったんだけど」

「そうか。頑張ったな」

樹東は内心感心する。光牙が残していた宿題の量は数時間で片付けられるようなものではなかった。樹東でさえ一日かけてやっとくらしいの。

これが人造人間の實力。

「でもね、国語で分かんない問題がいくつかあつて知識レベルはバジョニアップしてあるけど、認識力が一二歳のままでインストルされてあるから……」

そして、限界。

「兄ちゃん見てやるから持っておいで」

「わーい」

クロスはキラキラした笑みを浮かべ、樹東に駆け寄った。

「『日本の牛乳は腐れにくくて心配だ』これは、牛乳に添加物が多量に含まれていることを暗示してあるんだ」

「なあーんだ、だったらそう書けばいいのにねえ」

「いや、それが問題だから」

「エヘヘヘ」

クロスの笑顔は光冨の笑顔。幸せな気がした。

そう、気がしたのだ……。

青木はクラスメートたちとゲムセンタでときを過ごしながらかし頭の中は光冨のことが気掛かりでならなかった。

「　よな？」

「あん？」

友人に何かを訊ねられたのに上の空だったために聞き逃してしまつ青木。友人は苛立ちながらも同じことを繰り返して訊ねた。

「だからあ光冨の奴が無事でよかったよなって訊いたんだよ」

「あ、ああ」

「お前ら中学の頃から連んでたんだろ？」

「それがなんかあつたらやっぱショックだよなあ」

「そうだな」

青木は気のない返事で答える。

「それに前の日、光冨の奴何か様子変だったしな」

「そうそ、オレも気になつて　」

彼らの中には普段、人の生き死にを平気で語るものもいるだろう。しかし、実際に自分たちの身の回りで生死の問題が発生すれば少なからず不安や恐怖を感じるものだ。

「前日……」

青木はぼそりと呟く。そして、彼はまだ気付いてなくとも、光冴と今生の別れとなったときのことを思い出した。

事故の前日。

その日も光冴はいつものように青木たちとゲームセンターで道草を食っていた。

「なあ光冴もたまにはすれば？」

友人が光冴にゲームをするように進める。光冴は大抵、人がしてるのを横から見ながらお喋りをしていることが多かった。

そして、光冴はいつものようにニコニコしながら断る。

「いいよいいよ」

「金ねえの？」

「ううん。お小遣いほとんど貯めてるから」

「なんか欲しいものもあるのか？」

「べつに……何となく」

そのやり取りを横で見ていた青木だけが光冴の真意を理解していた。

兄である樹東は一家の家計を管理し、今日々の高校生にしては異常な程自分のことにお金を使わない。それなのに光冴にはしっかりお小遣いを与えている。

そういう現状に光冴は気を使っていた。そんなにいらないと断つても、いいからと押し返される。

だから、たまに樹東と一緒に共有できるようなものを買うに止め、ほとんどを貯金箱の中に収めているのだ。

そのことを知っている青木は気付かれない程度のため息を吐き、「オレが奢るからしてみろよ」

とゲーム機に小銭を投入して光冴を座席に座らせる。

「ええ、いいのに　　てか、対戦入ったじゃん」

光冴の座らされた台は格闘ゲムで、しかも向かい側の座席に座っている赤の他人と対戦をするはめになってしまった。

「いいだろ？たまには光冴の腕前をみんなにも披露してやれよ」

「ふーん、光冴ってゲム強えんだ。意外」

「まあ家で鍛え上げられてるから」

ゲムがスタトし巧みにコントロラを操作しながら答える光冴。

「家でつてキキ兄のことか？あいつゲムも一流かよっ！？ありえねえ」

「まあキキ兄ができないことつていつたら小説書くくらいじゃない？絵とかは上手に描くけど、何故か感想文とか苦手らしいし」

そうこう言っている内に光冴はノダメジで相手に圧勝した。この腕でも樹東には到底及ばないのだが……。

「いやはや強いなあ、お前」

向かい側の対戦相手の男が立ち上がり、光冴の方を覗き込んできた。男は着物に袈裟と所謂僧侶の格好をしていた。

「ん？あれ？」

男は光冴の顔を見て疑問を口にする。

「お前、さつきカラオボックスにいなかったか？可愛い女の子連れて」

「光冴ならずつとオレたちといたよな」

「それつてキキ兄のことじゃねえ？こいつ双子の兄がいんの」

光冴の代わりに友人たちが答える。

「ふーん、双子かあ。そういえば確かに髪型が違つてたな」

「あの」

黙つて男の顔を見上げていた光冴が口を開く。

「ボクとどつかで会つたことない？」

「ん？」

光冴の問いに男は少しだけ考えてから、

「んーどうだろ。オレは初めてだけど、もしかしたら　　つて、

やばっ！もうこんな時間じゃん！？」

男は何気なく壁に掛けられた時計を目にし慌て始める。

「熱中しすぎて保育園の迎えに遅れるとこだった。じゃあな坊主ども」

そう言つて急いでゲムセンタを出ていった。

「なんだあ、あいつ？てか坊主はためえだろつてんだ」

「坊さんがゲセンに来ていいのかよ！？」

いけないという法律はないが法衣ではなんとなく来て欲しくない。

「光冴、あいつのこと知ってんのか？」

青木が訊ねる。

「んゝ思い出せない。なんとなく引つ掛かるけど。それよりボク、もう帰る」

光冴はどことなく棘々しい雰囲気醸し出しながら足早に帰りだした。

「なんだ、あいつ？」

「なんか怒つてなかった？」

光冴の様子に首を傾げる友人たち。光冴の背中を睨むように見送つていた青木は小さくため息を吐き友人たちに告げる。

「ああオレもちょう帰るわ」

光冴の後を走つて追い掛けた。

「光冴、ちよつと待てよ」

「アオちゃん……」

光冴は無表情で呟く。

「一緒帰るぞ」

「うん」

二人は並んで帰路を歩き始める。

「……………」

今日はこの夏一番の真夏日かもしれぬ。狭い道路。車が横を通り過ぎると、不快な熱風が二人を包んだ。

「蝉、うるさいね」

沈黙に耐えかねたように光冴が呟いた。青木は小さくため息を吐き訊ねる。

「樹東と柊沢と一緒にカラオケにいたつてのが気に食わねえんだろ？」

「……………」

光冴は樹東とゆうの両方に嫉妬している。青木にはそう見えた。

「なあ、思い切って女でも作ったらどうだ？ちよつとは気分転換にでもなるかもしれねえぜ？」

「アオちゃんは？」

「オレはてめえと違ってモテなんだよ！不細工だからな」

「そだね」

「ってそこはフオロ するとこだ」

「エヘヘヘ」

「ふっハハ」

緊張の糸が解れる。

だが、光冴の笑い方は明らかに昔と変わっていた。昔はもっと可笑しさの中に恥じらいを滲ませるような笑い方をしていた。でも今は態とらしく、大げさに顔をくしゃくしゃにさせる。

何かを誤魔化すため。だからそれに気付いたものは少しだけ辛くなる。

「あのさ、なんだったらオレが柊沢に」

「いい」

告白の代行の申し出。きっぱり断られてしまう。気が置けないもの同士だからこそ出来ることと出来ないことがある。それを分かっている青木は口に出した。

「そうか」

「いつも、ありがと」

光冴の謝意は蝉時雨に掻き消される。

この日の夜、光冴はゆうへの告白の代行を樹東に申し込んだことを青木は知らない。どうして彼がそんな行動に出たのかは誰にも分

からない。

今となつては聞くことすら出来ない。

少しずつ、少しずつではあるが光冴の死は確実なものになっていった。じりじりと、見えない手に背中を押されるかのように。

「そうか」

青木は呟く。

「ん？なんか言ったか？」

「いや、なんでもない」

青木は取り繕うように友人たちに笑顔を向ける。

そう、先を感じた違和感は笑い方。あの笑顔を見たのは何年ぶりだっただろうか。

次の日の授業と授業の間にある十分休み。青木はクロスに近付き声を掛けた。それを目にしたゆうの頭に緊張が走る。光冴と一番親しかった青木には万が一にも気付かれてしまうかもしれないと。

「よう、光冴。体、大丈夫か？」

「うん。えっと、青木くん」

「なんだよ、いつもみたくアオちゃんって呼べよ」

「あっうん」

クラスメートの情報はゆうがクロスに集合写真などを見せざつと教えただけであつた。故に普段の呼び名までに気が回らなかつたのだ。

「そついえば小学校の頃とか覚えてるか？オレ、お前のこといじめたよな」

「え……」

クロスは考え込むように目を上に向ける。光冴からインストールされたメモリを手繰っていた。

「あっそうだった、そうだった。青木くんって太った子からいじめ

られてて あれ、痩せた？」

「光冴っ!？」

ゆうは思わず大声で名を叫んだ。それに驚きクロスは不思議そうに彼女の方を向く。その横で青木の体が小刻みに震えていた。

「別人だよ」

「えっ？」

「青木実……オレと同姓同名だった、デブ野郎……オレと光冴が連みだしたの、中学入ってからだったからな」

「それは」

「昨日思い出した。オレ、聞いたことがあったんだ。光冴の親父さんが光冴が小六のときに光冴の心をコピーしてロボット作ってるって話」

「っ!？」

取り繕うとしたゆうの口は、青木の確信を突く言葉によって塞がれる。

「光冴とそっくりなロボット作ってるって」

そう言い放って青木は弾けるように教室を飛び出していった。

「なあ樹東 sin25は？」

「0・4226」

休み時間に宿題をやっていた宮下に訊ねられ、樹東は教科書の三角関数表も見ずにさらりと答えた。

「サンキュ」

「ん」

「しかし、あれだな」

その光景を横から見ていたクラスメートが感心する。

「関数表、丸暗記してる高校生なんざ樹東だけじゃねえの」

「まっそれでオレ助かってるけどな。いちいち調べなくてすむし」と宮下。

「なあ、もしかして円周率とかかなり言えたりする？」

「昔、光冴にせがまれ一万桁以上暗記させられたことがある」

「一万桁ってありえねえ」

樹東の発言に周囲が明るくなる。

「でも、樹東って万能人間だけど嫌味じゃないからいいよな」

「言えてる。ブラコンなのもツボだし」

「ほっとけ」

樹東は怒ってるような照れているような、堅いけどどこことなく微笑ましくなるそんな表情で答える。

「誉めてんだって。たまにだけどさ、樹東みたいな兄貴がいたらと思うし、オレ」

「ホントホントっ！うちの糞兄なんか頭わりいくせしていつちよまえに人のことこき使ってバリむかつくし。光冴見てると羨ましいとか」

「関樹東っ！？」

樹東を中心に展開されていた談笑。それを止めたのは、物凄い勢いで教室に入ってきた青木だった。

「貴様っ！」

青木は動揺して立ち止まる生徒たちを掻き分けるようにして進み、樹東に詰め寄る。

「光冴をっ　　光冴はどうしたっ！？」

「っ！！」

青木にがつしりと肩を捕まれた樹東は、真相に辿り着いた彼に魂を掌握されたように固まった。

「お前、行き成り現われて何分け分かんねえこと言っただがんだよっ！」

宮下は端から見れば言い掛りを付けているとも取れる青木の行動に憤慨し、彼を樹東から引き剥がすように突っ掛かっていく。

「光冴ならそこいるじゃねえか！」

いつのまにか、ゆうとクロスは飛び出していった青木を追って樹

東の教室にやってきていた。

「アレは光冴じゃねえ！」

「っ！？」

「アレは光冴そっくりのロボットだろう！？」

青木の言葉に教室が騒めく。あるものは何を馬鹿げたことをと呆れ、あるものは何か面白いことになってきたと野次馬的好奇心を募らせる。

「青木、あんた」

「柊沢つてめえも知ってたんだろ でなきゃオレが気付いて、てめえが気付かねえはずがねえかな！」

「それは」

青木の追及に絶句するゆう。

「関の親父つていえば息子どもほっとくほど忙しい科学者だつてこ
とくらい近所の人間なら誰だつて知ってるっ！」

「……………」

「そいつがシンラって奴の遺産使つて人造人間作ってるって話も、
そのモデルが光冴だつてことも、知ってたんだかなっ！？」

青木は樹東やゆうが知らなかったようなことまでをも口にする。

疑心に駆られた彼は昨日の夜、インタ ネットを使って調べていた
のだ。検索エンジンで「関俊彦博士」とキ ワ ド検索しただけで、
その程度の情報なら簡単に得ることが出来た。

「この間まで、光冴の肌はこんなに白くなかった…… 光冴はもうあ
んな風に笑うことができなくなってた……」

「お兄ちゃん」

クロスはゆうの後ろで不安そうに呟く。

「光冴はもうっ！」

青木はクロスをビシッと指差す。

「てめえのこと」お兄ちゃん」とは呼ばねんだよっ！」

「……………」

この頃になると教室は静まり返っていた。青木の叫びだけが蒸し

暑いはずの教室に乾いた風のように広がる。

「もう一度、訊く」

青木が自制心のあらん限りを尽くし、押し殺した声で樹東に問う。
「光冴はどうした？」

「……………」

長い沈黙。

そして、

「あれは、光冴だ」

「このっ」

青木の放った拳が樹東の顔面に入る。その衝撃で樹東は椅子や机を巻き込みながら後方に吹っ飛んだ。教室が騒然となる中、青木は辛そうにクロスを一瞥してその場を去っていった。

「樹東　鼻血……大丈夫かよ？」

樹東の鼻からボタボタと血が滴り落ちていた。白いカッターに赤が広がる。

樹東は顔を上げクロスを見た。クロスは心配そうな表情で自分を見ている。

「あう、落ちにくいんだよ鼻血は」

内心、動揺していないわけではない。それでもクロスがいれば自分は自分を保つことが出来る。そう言聞かせるしかない。

「クレンザ　とかで、いけるかな」

樹東はクラスメートから提供されるティッシュを鼻に詰込みながら、出来るだけ普段どおりに振る舞おうと努めた。

調整のために俊彦のもとに訪れたクロシングオバ。

「うゝむ」

俊彦はクロスから青木との一件を耳にし唸り声を上げる。

「恐ろしいや情報化社会。公開も機密もあったもんじゃないねえ」

「そんなのんきに言ってる場合ですか!？」

俊彦の揶揄めいた言い草に、非難をぶつける助手の山本。

「実験が外部に漏れた以上、即刻中止するべきです」

「大丈夫だって。マスコミは会長のお力で押さえておけるし」

「ですが」

「それに明日から課外授業が終わって夏休みも本格突入だろ？」

「うん」

「今のところ順調だし、もう少し様子をみよう」

どことなく陽気な口調の俊彦。山本はそんな彼を複雑な面持ちで見ている。

「よし。もう帰っていいぞ光冨」

「はい。えっと、お兄ちゃんには会わなくていいの？」

「えあ？」

クロスの指摘に一瞬俊彦の目が泳ぐ。

「ああ　その、忙しくてね。二、三週間もしたら仕事峠こすから。そしたらしばらくゆっくりできるようになるから。きみからよろしく言っというて」

「うん」

クロスは研究室を後にし、樹東が待っているロビーに向かう。

「お待たせ　問題ないって」

「そうか」

樹東はいつもの仏頂面をほんの少し緩めながらクロスを迎える。

その鼻にはでっかい脱脂綿がテ　ピングされていた。

「ん　父さんは？」

何気ない体で訊ねる樹東。

「あっうん。忙しいからよろしく言っというてって」

「そう」

クロスの答えに樹東は文字通り固まった。まるでフリズした画面のように、表情も体も微動だにさせず。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「えっ？あつ、いやぼうつとしちまった。血出しすぎたかな？」

樹東はわざとらしく顔を歪ませて頭を掻いてみせる。

「うゝむ。今日の夕飯はレバ　にでもするかな？」

「えゝ！！」

それは光冴「クロスの嫌いな食べ物ワ　ストワンであつた。

東京クインホテル　その吹抜の豪華なロビ　を貴子は颯爽と歩いていく。その出立ちはいつものス　ツではなく、漆黒のイブニングドレスであつた。背中が大きく空き陶磁器のように滑らかで真つ白い素肌を惜し気もなく頭にさせたそのドレス姿はとても様になつており、行き交う人々が思わず振り返ってしまうほどである。

貴子はボ　イにエスコ　トされ、VIP専用のエレベ　タ　に乗り込んで最上階の展望レストランを目指した。

「お待ちしておりました、松雪様」

レストランに到着すると、支配人と思われる老齡の紳士にうやうやしく迎えられる。

「お連れ様は既にお見えになられてございます」

彼の表情には緊張というよりいささか怯えの色が見え隠れしていた。

それもそのはずであつた。

「久しぶりだな」

「ええ」

貴子の連れ。夜景のよく見える個室にとおされるとテ　ブルには車椅子に乗つた男が莊厳と待ち構えていた。

詰め襟のス　ツ姿のこの男　彼こそ各世界の重鎮に居座るものどもさえ恐れを抱き、逆らえば死にすら値しない報いが待っていると語り継がれている魔王　「蠅の王」　鉄総司　。

直視すれば両目を潰されるなどという尾鰭まで真剣に囁かれています。

るその男を、貴子は曇りなき眼で見据えて挨拶する。
「お久しぶりです、兄さん」

シンラ研究所 その屋上で俊彦は一人座って綾取りをしていた。

日はすっかり落ちていたが、満月や前に建っている病院の照明で手元を確認できる程度には十分だった。

「東京タワ ですか？」

いつの間にか助手の山本が近付いてきていて俊彦に訊ねた。

「エッフェル塔だったりして」

茶化したように言う俊彦。山本は少しだけ苦笑して俊彦に訊ねる。
「博士は考え事があるといつもここに来て綾取りしてますね？」

「んゝまあ 手先動かすと脳が刺激されるってことは実証されてることだから」

俊彦はタワ を崩しほうきを作り始める。ほうきはやがて洋ばさみ、和ばさみに変わり最後には鳥になった。

「どうして樹東くんにあつていかなかったんですか？」

「 -っ!!-」

俊彦の手がピタリと止まる。

「それに忙しいっていったて、お家に帰る時間ぐらいならあるじゃないですか？」

「」

「 どうして 」

「 何が言いたい？」

手の中の鳥が小刻みに震えた。

「なんでキミにそんなこと聞かれなきゃならない？」

そして鳥は握り潰される。

「僕はただ なにか心に引っ掛かることがおありになるなら、何か相談に乗れないかと思って」

「相談に乗る？キミに相談なんかして何になるってんだ！？」

立ち上がり、力一杯怒鳴る俊彦。普段、温厚な彼からしてみれば最大級の怒りの発露に他ならない。

「僕より劣ってるくせにつ！」

「なっ！？」

「僕より優れた人間はジンとシンラ博士しかいなかった！！その二人にもう僕の言葉が届くことはない。僕が頼れる人間はもうこの世にない！みんなクズばかりだ！！クズにこの僕のなにが分かるってんだ！」

俊彦は一気に捲くしたて肩で息をする。

そして、

「ごっごめん」

我に返りそう呟くと俊彦は山本の前から逃げるように去っていった。

「なんて哀れな人だ」

人間は他人を見ることで自分を形づくっていく生き物だ。つまり人生の師はその瞳に写る全ての他人。

だが、俊彦の目は完全に閉じられている。そうであっても生きていけるだけの能力が彼には最初から備わっていたから。

「それでも心のカタチは――」

いくら手先が器用でも、誰かに手解きを受けなければ 或いは誰かの模倣をしなければ それはいずれこぐらかる系の如く。

「父の葬式以来だから五年ぶりか」

「ええ」

鉄総司と松雪貴子の間にあるテーブルに高級そうな料理が並べられる。

両者はそれらに手を付けることなく互いの目を見つめ合っていた。二人の表情に再開を喜び合う感情は出ていない。鉄総司は不躰に、

松雪貴子は何かに耐えているかのように眉間に皺を寄せている。

「ふう　　こんな素敵な個室があるのだからわざわざ高価なレストランを貸し切りにしていただかなくてもよろしかったのに」

「ホテルが勝手にやったことだ。わしは知らん」

ひねくれた子供のようにつつけんどんに言い放つ鉄総司。

「わし、ですか……」

ほんの少し笑みを取り戻し、貴子は鉄総司に訊ねる。

「それシンラ先生の真似ですか？」

貴子は懐かしそうに目を細める。鉄総司は舌打ちをして外方を向いた。

個室の戸が叩かれ、タキシードの若い男が断りを入れて入室してくる。首に銀色の皿を掛けているところを見るとソムリエらしい。

「お飲み物は何にいたしましたしょう？ シャト　ブリアンでしたらボルドーの　　」

「お酒は結構です。込み入った話がありますから」

そう言ってから貴子はアレっと思う。

「あなた、どこかでお会いしませんでしたかね？」

その若きソムリエとどこかで会ったことがあるような気がするのに思い出すことが出来ない。優秀なジャ　ナリストである彼女は一度見覚えのある顔は決して忘れない自信があつたが　　おかしな話である。

若きソムリエはにっこり笑って、

「ああ、それはですねえ　　」

「下がれ」

答えようとしたところ、鉄総司の言葉に止められてしまう。結局、ソムリエは小さくお辞儀をして個室から出ていった。

「お前、話があつたのではないのか？ わしとて忙しい身だ。さつさとしたらどうだ」

「申し訳ありません。では、単刀直入に。兄さん、あなたはクロシングオ　バ　をどういうおつもりで開発なさってるのですか？」

言葉どおり貴子は前置きもなく核心に入った。

「あんなものが理に適っているなどと本気で思ってたっしやるわけではないでしょう？あんなもの誰も望まない。寧ろフランケンシュタインコンプレックスの再現だと誰もが畏怖の念を抱くでしょう」

「……………」

「先日の会見で関俊彦は彼の妻、ユジン・ア・ガイアに取り憑かれていただけと分かりました。人造人間開発はもともア・ガイア博士が企画立案でありその指揮権を握っていたもの。しかしそれが原因で彼女は植物状態に陥ってしまった。関博士はただそのことに翻弄されて大儀などなく研究を引き継いでいるだけ。それを誘導したのは兄さんでしょ？そして関光冴を亡きものにしたのも」

「……………」

貴子は鉄総司の沈黙を肯定と取る。

「やはり、人造人間を暴走させることにその目的があるんですね？全てはその環境を作るための策略　キザンの恐ろしさを世に知らしめるために」

「だとしたらなんだ？」

鉄総司は興味がなさそうに答える。

「牽制と刷り込み　兄さんのやろうとしていることにまったく共感が持てないわけではありません。墓石行政などという言葉があるくらいです。世の重大事が起きないとそうそう問題を認識するのに困難な節があります。自発的に事件を引き起こし牽制や問題定義をする。それは近代における戦争のカタチそのものです。テロリストも大国も恐怖を以て人々を傅かせようとしている。それを兄さんはキザンとこの国を使って再現しようとしているんでしょう？」

「ふん」

鉄総司は鼻を鳴らして貴子の話を聞き流した。

「でも、それは正しいことでしょうか？先生は前に私に言っていました。全ての人間は子供に憧れを抱かれるようになる努力をしなければならぬって。これはつまり、人間を指針するものは恐怖や弾圧

ではなく憧憬や希望だということです。恐怖で作り上げる理想に何の価値が

「くだらん」

貴子の話を中断させるようにそう呟いてから、鉄総司は目の前の皿に乗っている分厚い牛ヒレ肉を不自由そうにナイフで切り分け口に運ぶ。

「兄さん……」

違う 彼の真意はそこにはない？

「貴子、もうお遊びもそこらにしとけ」

鉄総司は諭すような口振りで言った。

「遊び？それは私の仕事のことですか？」

「そうだ」

「どういう意味です！？」

貴子は声を荒げる。

「私はこの仕事に 真実を知ること命を賭けています！それをあ

「痴れ者がっ！？」

鉄総司は右手を突出しナイフを貴子の鼻先に向ける。貴子は思わず仰け反った。

「小娘の分際で命を賭けるなんぞと口にするのは百年早いっ！」

「うっ」

「貴様、よもやわしに生かされておると認識できてないほど馬鹿ではあるまい」

「承知しています」

貴子は辛酸を嘗める思いで顔を歪める。

「お前が首を突っ込もうとしている真実とやらが、どういう意味をもつものかも分かっくらんくせに」

「その通りです。私は何も分かっているのかもしれない。でも、だからこそそれを知りたい。そのためにどんなことでもする。どんな危ない橋も渡る。そう決めたんです。自分の意志で、その道を歩

んでいこうと」

「馬鹿が　人は意志の力で進むことなど断じてできん。そう、人は水面に落ちた木の葉だ。自らが立てた波紋は淵に当たって跳ね返り、その身を揺らす。吹き荒ぶ風にあらぬ方へと流されるであろう」

「……………」

「人は意志の力で、波を乗り越え、風を捌いて流れていくのだ。それも理解してないお前に何が出来る!？」

貴子は頂垂れる。

「それでも私は先生が何故死ななければならなかったのか　それを知りたいんです」

「っ!？」

「あの優しかった兄さんが悪魔の名を冠するようになったように、私だって変わってしまったんです」

「……………」

長い沈黙。

「もう、お前と話すことはない。立ち去るがいい」

「失礼します」

貴子は立ち上がり鉄総司に背を向ける。

そして鉄総司は彼女の背中に最後の言葉を告げる。

「貴子。これは脅しではない、警告だ。お前があくまでわしに逆らい我が道を行くというなら、残りの人生せいぜい背後に怯えて暮らすがいい」

「兄さんこそ　たとえどんな大儀があろうと　人の命を奪

い、幸せになる権利を踏み躪ったその行為を　先生が見ておられたなら決して許しはしないと心にとどめておいてください」

貴子はそう言い残しその場を後にした。

「……………」

音を立てて閉まる扉。

鉄総司は苦渋に目を瞑った。

「先生」

その声は先程までとは打って変わって、とてもか弱い子供のようなものである。

「先生、僕はこれで」

「センセは答えてくれないよん」

突然横から声がした。鉄総司は慌てて目を開け視線を上げた。するとそこには先程のソムリエがニタニタしながら立っていた。

「だってセンセはもう死んじゃってるしね」

「貴様、音もなく近付くなどいつも言っとうろが!？」

「しかたないじゃん。オレ、忍者だし。ニンニン」

ソムリエは巫山戯た様子で印を結ぶ。

「しかし、アレだな。似てなかったね彼女」

そのとたん、ソムリエの顔の皮膚がボコボコと膨れ上がっていく。そして、

「オレたちにさ」

腫れが退くと共にその顔が別人へと変わっていた。

その顔は目の前にいる鉄総司をほんの少し若くしただけで、ほとんど瓜二つであった。

「首尾は？」

鉄総司が男に訊ねる。

「ダメ。警視庁にもぐってみたけど誰が光冴を殺ったか分からないかったよ。せめて「香神」が誰なのか突き止められればな」

態とらしく両腕を上げ首を横に振る。

「でも尻尾は突いておいたよ」

「だからアイツが来たのだろ。少しでもこちらの情報を探らせるために」

「ふむ 牽制は用意した。恐らく奴らの動きは二・三日遅延する。その間にやれることだけはやってみるよ」

「コピペよ。計画通りにことを運べ。全ては「アシハラ」の力を封じ、「進化の指針」と「リプルリバ ス」の動向を見極めるためだ」

「わかってるって センセの弔い合戦だからな」
ほんの一瞬だけ二人は同じ表情になる。
そこには並々ならぬ決意が滲み出ていた。

翌日。

「じゃあ、オレ買物行ってくるから。大人しく待ってるんだぞ」
「うん。いつてらっしゃい」

夕食の買い出しに出掛ける樹東に、テレビに熱中していたクロスはぞんざいに手を振って応じる。

ちよっぴり寂しかった樹東は小さくため息を吐いて家を出た。
「いつけえ！スサノ ンっ！！そこだぁ」

クロスが見ていたのは夏休みの特番アニメの再放送である。ほぼ十二歳の脳であるクロスはすっかり填まり込んで、宙にパンチを繰り出したりしながら見ていた。

そのおり玄関のチャイムが鳴る。

「ちえっいいとこなのに」

クロスは口を尖らせながら玄関を開けた。

「やぁ」

立っていたのは野球のユニホームを来た男だった。

「あっ野球部エ スの」

「そう。黒田だよ」

それは樹東をしつこく野球部に勧誘してくる黒田だった。

「お兄ちゃんなら買物だよ」

「いや、今日はキミに用があつて来たんだ。ちよっといいか？」

「え」とお

クロスは後を向いて躊躇する。アニメが見たかったからだ。

「うん？なんだ、テレビ見てたのか？じゃあ終わるまで待ってるから上がらせてもらってもいいか？」

「それならいいよ」

クロスははにかむように笑って黒田をキッチンに案内する。そして彼に麦茶を出してから自分は再びテレビの虫になった。

「わぁお、カッコイイっ!」

「それ、おもしろいのか?」

「超おもしろいよ」

食卓の椅子で体操座りしながらアニメを食い入るように見ているクロスがあまりにも幼く可愛く見えて、思わず黒田はクスリと笑ってしまう。

「終わった。ありがと、待ってくれて。で?話ってなに?」

「ああ、ええつと」

「もしかして野球部の件?ボクさぁ野球やってみたいんだあ。でも、お父さんがもうちょっと待ってなさいって言うから、お父さんの許可が出たら入れてくれない?」

「ああそれはオレとしても嬉しいよ」

「ほんと?やたっ!」

クロスは文字通り両手を上げて喜ぶ。

「実はその件も含めて聞きたいことがあったんだ」

「なに?」

「キミ、人造人間ってほんと?」

「」

黒田の問いにクロスの顔が硬直する。

「昨日の騒ぎ聞いてたんだ。青木の奴がずいぶん怒ってたよな」

「っ!」

「人参、玉葱、じゃがいも　　後、肉はチン太屋だな。特売やってたから」

樹東が買物袋をぶら下げながら歩いていると、
「おいっ!」

「ん　青木……」

声をかけられ振り向くと、そこに青木が立っていた。顔がやつれている。目は真っ赤に腫れ、枯れはてたという印象がある。

「何か用か？」

「用がなきゃてめえになんか話かけるかよ。オレはてめえが大嫌いだからな」

すごい言われようだった。しかし、樹東も負けじと言い返す。

「オレもお前が昔から嫌いだ。お前と連みだしてから光冴のがらが悪くなった」

「がらがわるなっただあ？成長つて言うんだよ、アレはっ！？そんなことも分からねえくせに兄貴面すんじゃねえよ」

「オレは光冴の兄貴だ。オレが守っ

」

「で、結局守れなかったじゃねえか？」

思わず目を逸らす樹東。

「お前はそうやっていつも光冴を守る守る守るって言って光冴を追い詰めてたんじゃねえかっ！？」

「っ！？」

樹東にとって寝耳に水だった。

だが、それは幼なじみのゆうなら知っていたこと。そして、それは青木も同じ。

「お前が光冴を苦しめてきたんだろうが？」

「……………」

そんなはずはない。オレは光冴を守ってたんだ。

「今日も暑いな」

「……………」

クロスの黙秘。黒田は出された麦茶を啜ってそれを受け流す。

「しかし、アレだな。フランケンシュタインの創った怪物はさぞ醜かったらしいが……キミはとても可愛らしいな」

「……………」

黒田は右手を出してクロスの頬にそつと触れた。

「凄く綺麗な肌だ。とても人造のものとは思えない」
パシッ

クロスは黒田のその右手を弾いた。

「ふっ」

黒田は右手を擦りながら立ち上がる。

「なにをそんなに恐がっているんだ？」

「……………」

「お父さんやお兄さんにバレないように忠告されているからか？」

黒田はクロスの両肩をがっしり掴む。

「なあ、怪物は醜かったからフランケンシュタインに捨てられたのかな？」

そしてぐいつとクロスの体を押した。二人はガタガタと椅子と共に倒れこむ。黒田は仰向けに倒れたクロスに覆い被さり、再び右手をクロスの頬に当てた。

「違うだろ？役に立たなかったからだ」

黒田の左手がクロスのＴシャツの裾から侵入していく。

「フランケンシュタインにとって被造物は美しくなければならなかった。醜いものを必要としなかった」

「くう」

「恐怖はそこに憑りついただけだ」

ジITTERとした汗が体中から滲み出る。ヴウンと首を振っている扇風機の音が妙に鬱陶しく耳に纏わり付いて。

「キミのお父さんやお兄さんはキミに何を望んでいるんだろうね。なあ、クロシングオバよ」

「あんだ」

クロスは自分の肌を這っている黒田の左手を掴んで制した。

「あんだ誰？」

その日、貴子は本当に久しぶりの休暇を取っていた。

「許せないわ、兄さん」

既に日も高いというのに貴子はクラの効いた部屋のベッドの中で真っ白いシャツと戯れていた。

「あんなに先生に愛されていたのに
私だって本当は。」

憎しみが募る。愛する人の意志を何一つ受け継いでいない兄に。

「もしもし」

携帯電話になる。相手は高木だった。彼はひどく慌てた様子だった。

「なんですって？」

拘留中の広田議員が今朝、原因不明で突然死したとのニュース。

「分かったわ　ありがとう」

電話を切りアンテナを顎に当てて何かを考え込む貴子。そして、ハッとなる。

「そうかあのソムリエ　あの時の警官」

一昨日、貴子の駐禁を見逃してくれた警官と昨日のソムリエ。顔こそまったく別人であったが。

あの黒目勝の目は兄さんの。

「アレは兄さんのクロン……」

どういう理屈かは知らないが変幻自在。拘置所にすら侵入できるのか？

「ちっ」

広田議員が鉄総司と何らかの関わりがあつたのであろうことは薄々感付いてはいたが、みすみす暗殺されるとは。

いや、寧ろその事実気付かせてもらったことは幸運といえるかもしれない。

「人が殺されたっていうのに……私も兄さんのこといえないわね

「

兄さん　あくまであなたが、あの哀れな人造人間を利用するというのなら私もそれに便乗させてもらいます。

そう、自分はハンタ　だ。真実という濃霧に包まれた獲物に標準を合わせている。

「こんなことしている暇はないわね」

貴子は忙しく携帯電話をプッシュする。

「もしもし、貴子です。少しご相談があるのですが」

霧が晴れていく。

「

「あんた誰？」

クロスの問い。今の今まで薄笑いを浮かべていた黒田から表情が消える。

「ボクの名前、知っている人は限られてる。さすがにこればかりはネット上にも漏れてないよ」

「くつくくつ　　ははは、まいったなあ」

黒田はそう言うとう頭を抱えて立ち上がる。

「近すぎず遠すぎず、おまけに野球のコスプレができて嬉しい、いい人材に化けたのに」

黒田の顔がブクブクと膨れ上がっていく。

そして　　。

「鉄総司……」

その男の名はクロスのメモリ　の中に存在した。この国の経済を掌握し、数多の権力者さえ畏怖する悪魔「蠅の王」と。

「いや、オレの名はコピペだ」

「あんたはボクと同じ？」

コピペはにつこりと笑って首肯する。

「元がキザンで肉体強化と変化するためにインプラントを施してる

という意味では同じだな。まっ言ってみれば兄みたいなもんだ。ただ、人格移植はしてないけど」

「何しに来たの？」

クロスは不機嫌に顔を顰める。

「おいおい、ご挨拶じゃないか。まあいい、さっきの問いの答えを聞きにきたんだ」

「問い？」

「そっ 俊彦と樹東がお前に何を求めていると思うか？」

「……………」

クロスは目を伏せた。コピペは挑発的な語気をさらに強める。

「はっ！お前ももう気が付いているんだろ？ 俊彦はお前を必要としてない。ある実験の礎だよ、お前は。そして樹東は」

「お兄ちゃんはお前を必要だと言ってくれたもんっ！？」

クロスはコピペの言葉を遮り叫ぶ。

「違うね。光冴を見ているだけだ」

「ボクは光冴だっ！」

「本気で言っているのか？ 光冴のことをよく知っている人間が見れば、光冴とお前は全然似てないって言うだろうさ」

「っ！？」

『こいつは光冴じゃない』 青木の言葉がクロスの脳裏に過る。

「樹東だっっていうかお前に飽きるだろ。お前は代用するには似すぎている。でも、全く似ていない」

「……………」

「いくら外見が美しくとも、役に立てない以上お前は怪物だよ。捨てられたら最後、お前は心の底から本当の怪物に成り下がるだろうさ」

「捨てられる？」

ボクが？お兄ちゃんに？そんなはずない。

「そんなはずない」

クロスは擦れた声を搾り出す。

「だったらお兄ちゃんに聞いて見るよ？ボクと光冴、どっちが好きって」

「うわああああああああああ」

絶叫。そして光冴はへたり込む。

「せいぜい争えよ。運命に」

コピペはそう言い捨て去っていった。

あれは中学に入って最初にあつたテストから数日過ぎた日だった。小さい風が並木を揺らす。

「ん？」

帰宅途中だった青木の足元に丸まった紙屑が転んできた。青木は何気なくそれを手にし広げてみる。

テストの答案だった。国語の、しかも百点満点の。名前のところに関光冴とある。同じクラスの奴だ。そいつは別のクラスにそっくりな双子の兄がいるということもあってわりと学校では有名な人である。

「あつ」

その当人がとぼとぼ歩いているのを見付けた。青木は声を掛け彼に近寄る。

「テスト落としてたぞ」

「……………」

光冴は青木の差し出したくしゃくしゃの答案に一瞥くれると困ったような嘆いているような表情をした。

青木は少し驚く。光冴とはそれほど仲が良いわけではないが、彼は見かけるたびに恥ずかしそうに幼さが残る笑みを浮かべている、そんな印象があつた。

だけど目の前にいる彼はどこか大人びて見えて、それでいて。

「ああ、ありがとう」

光冴はいつものように微笑んで青木から答案を受け取る。青木は感じた。今、彼は頑張って笑っているのだと。

「どうかしたのか？」

青木の問いに再び光冴から笑みが消える。しまったと思った。泣きだすんじゃないかと思ったからだ。だが、光冴は予想とは逆にさつきよりも数段強く笑顔を作った。

「実はコレ捨てたんだ。そこのごみ箱に。風で飛んだね」

「捨てた？百点のテストを？」

青木の疑問に光冴は本当のことだと頷く。

「なんで？」

聞くべきではないのかもしれない。でも聞かずにはいらなかった。

光冴は少しの間逡巡していた。やがて意を決したように口を開く。

「意味ないから。百点とつても」

青木にはよく分からなかった。

「どういうこと？誉めてくれる奴がいらないとか？」

「うっん、そんなことないよ。お兄ちゃんはきつと誉めてくれるから」

そうだろうと思った。兄の樹東が異常なほど弟思いなのも有名な話であった。

「じゃあなんで？」

光冴は目を伏せる。

「だってお兄ちゃんは全部満点だもん。百点以外とつたことない人だもん。誉められても虚しくなるだけだもん」

青木は色んな意味で愕然とした。

百点以外取ったことのない人間がいるのかということ。誉めるということが人によって傷つけるといふことがあるということ。そして、目の前にいる同級生が屈辱の中に生きているということ。

「じゃあ」

光冴は踵を返し歩きだす。その背中がとても小さく見えた。彼は小柄なほうだけど、それでも目の錯覚のように小さい。胸が締め付けられるほどに。

青木は泣きそうな自分がいることに気が付いた。そして、彼をほっとけばきつと後悔するということにも。

「あのさ」

青木は努めて明るい声で彼を呼び止める。

「家に寄ってかねえ？」

「えっ？」

振り返った光冴は何を問われているのか理解してないような、惚けた顔をしていた。

「あっおもしろいゲ ムあるんだ。つきあえよ。な？」

光冴の瞳が一瞬下を向く。そしていつものように恥ずかしそうなそれでいて幸せそうな笑みで頷いた。

それから青木と光冴の付き合いが始まる。しばらくの間、光冴はいつも明るく振る舞っていた。でも半年くらい過ぎたくらいから、本当にたまにはあるが狂ったように泣きだすようになった。

「お兄ちゃんはお父さんに構ってもらえない復讐をボクにしてるだけなんだ」

「お兄ちゃんの優しさはボクを縛り付けてるだけなんだ」

「お兄ちゃんがいるからお父さんが帰ってこないんだ」

そのたびに青木は光冴を宥めまし、遊びに連れ出したり、面白い話をしたりして光冴を元氣付かせた。

「部屋を別々にしてもらえよ」

「そのお兄ちゃんってのやめたら？」

「嫌なことは嫌って言えよ」

アドバースもした。

そして光冴は笑顔を取り戻す。

「ありがと、アオちゃん」

幸せな気がした。

そして、分からなくなる。礼を言いたいのはおれの方だよと。

樹東は耳を塞いだ。心を閉じた。

買物袋をバシヤバシヤ音立てながら走って帰った。

沈んでいたクロスの様子にも気付かず、その日はありあわせの食材で夕食を作った。

「光冴……お父さん……」

寝ながら泣いた。

「お兄ちゃん」

クロスはそれを横で見ていた。

つづく

モツレル

ガラクタのエチュ ド

(クロスの見た悪夢)

青い空 アスファルトに浮かぶ逃げ水

蝉の鳴き声 幼い光冴の脚のアップ

主婦A>聞きました？関さんところの奥さんのこと

主婦B>ええ。旦那さんも忙しいみたいで、ほとんど子供たちだけで生活してるらしいでしょ？

団地の煽り 入り口階段

主婦B>でも、お兄ちゃんがすごくしつかりしてるから。柊沢さん
とこの奥さんに自分から料理の作り方、訊きに行ったんですって
主婦A>へえ、そう。すごいねえ

錆の浮いた鉄の扉 光冴の手が映り込み扉を開ける

光冴>お父さん？

俊彦の笑顔のアップ

樹東>どうして(エコ)

古びた洗面所 箆から垂れたタオル

物が置かれた使われないヘルスメタ

染みだらけの足拭き 広角レンズを使用したような圧迫された閉

鎖空間

樹東>ん？

浴槽に凭れ掛かっていた樹東

光冴>どうしてお父さんは帰ってこないの？

樹東の無言　ジヨボジヨボ（浴槽に溜まる水音）

光冴>教えてよ（語気強め・押さえた感じ）

樹東天井に目を向ける　俯瞰からの浴室　湯気がかかる画

樹東>お父さんはオレたちを捨てたんだ！？

バシヤ（何かが浴槽に投げ込まれる・音だけ）　暗転

俊彦>違う！

ラボ　クロスの脚のアップ（裸足）

俊彦>ボクが欲しかったのはこんなじゃない……

ガシヤ（何かが割れる・音だけ）　床にガラスの破片が散らばる

俊彦>アイツのせいだ！アイツのっ！？

クロスの真っ白い脚がガラスの破片を踏む　滲む血

女1>誰のせいなの？

俊彦>樹東がつ！あの化物が、ボクからキミも光冴も奪ったんだ！

？

台所　幼い樹東、踏み台に乗り拙い手つきで懸命に包丁を扱う

光冴>お兄ちゃん（嬉しそうに）

俊彦>お前のせいだ！！お前が母さんを廃人にしてボクから光冴を

奪った！

樹東、包丁を持ったまま振り返る　捌かれた魚のアップ

包丁と樹東の手は魚の血で血塗れ

樹東>どうしてボクを見てくれないの

踏み台を下り俊彦に躍り寄る樹東

樹東>どうして光冴だけなの（虚ろな目で）

振り上がる包丁

光冴・クロス>止めて！（ステレオで）

グシュ　赤

女2>あんたが悪いのよ。あの兄妹ばかりに構うから、私を見てくれないから！？

白衣の女が白衣の子供らしき人物にナイフを突き立てる（ワンカット挿入）

光冴（クロス？）の顔アップ　瞳孔が開いていく

樹東＞ギヤアアアアアアアアア

（後・イメ　ジの洪水、セリフ被りぎみ）

樹東＞お前は光冴だ！

俊彦＞もうすぐだよ、ジン

ゆう＞なにやってるの

樹東（子供）＞お兄ちゃんがついてるから平気だろ？

青木＞光冴はどうしたっ！？

俊彦＞百点とったのか？偉い、偉い！

子供＞へっブラコン野郎なんか恐くねえ！

俊彦＞光冴として接してあげなさい

樹東（子供）＞買物なんてオレが行くのに

樹東＞もうすぐ終わるからいい

青木＞樹東の奴はなんでも出来るからな

ゆう（幼く）＞キキくんすごい

コピペ＞せいぜい争えよ、運命に

青木＞光冴にそっくりなロボット作ってる

ゆう＞光冴は、そんな作り物で誤魔化せるような安っぽいものだったの

樹東＞オレの心を埋めてくれるのは光冴だけだ！たとえそれが人形だとしてもな

台所で血塗れになりへたり込む樹東　その頭を抱えるゆう

二人を見下す俊彦

俊彦＞全部お前のせいだ！？　独り占めしようとするから！！

ゆう＞そのの、何が悪いのよ（息交じり）

樹東＞……………

放心状態の樹東のアップ

ゆう＞人間、誰だって

俊彦＞人間じゃ　人間じゃないくせに

ゆう＞へっ？

樹東の右目だけがピクリと大きくなる

クロス>お兄ちゃん、人間じゃないんだ（嘲るように）

モツレル

朝起きて、ご飯を食べたらしめることがないことに気が付いたゆうの足は、自然と樹東のもとへ向かっていた。

「まだ、早かったかな？」

インタ フォンを鳴らしても返事が返ってこない。まだ二人とも寝ているのか？

「バカみたい」

そう呟いて、ゆうは扉に背を向ける。引き替えそうと階段を下りようとすると、

「青木？」

四階と三階の間の踊り場に青木が息を切らして立っていた。

「お前んちに行ったらここに向かったって」

「何か……よう？」

青木は見上げていた視線を下に落とす。古びたアスファルトの階段に決意を後押しする何かがあるとでもいうのだろうか？

「あれからずっと考えた。アレはオレの思い過しで、光牙はただ事故のせいだとえば記憶喪失になってるだけじゃないのかとか

そんなこと……考えた。いろんな 可能性必死で探した」

「……………」

ゆづはぎゅつと拳を握る。少しでも気を抜けば自責の念で押し潰されてしまいそうだ。

「答えてくれ 柊沢」

「……………」

「答えるよっ!？」

団地の狭い階段に、青木の悲痛なる問い掛けがこだまする。

「光冴は死んだ」

渴き切った喉に空気が擦れる。

「光冴は私のせいで死んだ。私が 私が樹東を取ったから

光冴、シヨックで走っていった それで……………」

「ああああああああああああ」

青木は頭を抱えしやがみこむ。

自分のせいだ あのととき、光冴にあんなこと言ったから。

なにがどう原因になっているかなど、この世は 特に人の心

は複雑すぎてひも解くことなどできない。

それでも他人は、返らぬ答えに恐れを抱き罪の意識に埋没する。

「どうしてっ! どうして光冴じゃねんだ!？」

「……………」

「どうして なんで………… お前らあんな仲よかったじゃんか! お

前が樹東見てたことは知ってたよ。でも、なんで樹東なんだ!？あ

いつはお前のことなんか」

「知ってるわよっ!？ そんなこと…………。それでも私はキキが

」

その背中に呼び掛けても、彼がこちらを振り向いてくれることはない。

彼は優しい。でも、その優しさは常に私を通り過ぎ。

彼の頑なな眼差しに心惹かれる。ただ、その瞳に私は写ることな

く。

彼は一つの使命を背負って生きている。それは光冴を 家族を護ること。それ以外のことは全て些細なこと。

そう、私のことも。

どうしてこんな奴好きになったんだろう。分からない。

分からないけど 彼が私の前から消えることは考えられない。
だから私は 。

「どうしようもないの」

「光冴は……蔑ろにして 光冴はどうなんだよ!？」

「光冴が死んで 供養してやらなきゃいけない こんなの
間違ってるってことくらい分かってるけど キキがアレに縋り
付く姿見たら私 光冴のことを虐げてもキキのことを 」

「……………」

アレがあまりにも光冴に似ているから混乱する。だけどアレはたしかに光冴じゃなく、性質的に似ても似つかないのに、それでもみんなアレに縋り付きたくなくなってしまう。それはまるでパンドラの匣の中に入っていた最後の希望。そして、地獄の亡者に垂らされた蜘蛛の糸の如く。

「うがああああああ」

「キキっ!？」

扉の向こうから樹東の苦痛に歪んだ絶叫とガシャンと何かが倒れる音が聞こえてきた。

「キキっ!どうしたの?」

ゆうが扉を叩いて返事を求めるが返事が帰ってくることはない。
「何かあったの!？」

下でクロスを監視していた貴子と高木が騒ぎに駆け上がって来て
ゆうに訊ねる。

「キキが 友達の叫び声が聞こえてきて」

「鍵は?」

「開いてない」

「退いてください。ボクが開けます」

意外にも高木がそういつて前に出た。そして彼は懐から細長い針金を二本取り出す。

「高木くんあんだ……」

よもや高木にそんなスキルがあつたのかと啞然となる貴子。

「昔取つた杵柄です」

「昔取つた杵柄つてスパイ大作戦でもやってたの？」

「いえ、チャリの依頼で天使を少々」

「……………」

などわけの分からないやり取りをしているうちに、高木は数秒とかからずに鍵を開けてみせた。

「キキッ!？」

高木を押し退けるようにして玄関の扉を開けると、ゆうつ青木は我先にと家の中に駆け込む。

「なっ!？」

短い廊下を抜け台所まででたところで二人は目の前で繰り広げられている光景に固まつた。

「うぐっ」

クロスが仰向けに横たわる樹東の上に申し掛け、左手で樹東の首を締めている。更に掲げられた右手には包丁が握られている。

「あぐっ」

そして振り下ろされそうになっているクロスの右手を樹東が必死の抵抗で阻止しているところだった。

「退いてっ!」

遅れて来た貴子は叫ぶと床に転がっていた椅子を手に取りクロス目掛けて振りかぶる。椅子はクロスの側頭部にヒットし、クロスは横に吹っ飛んで壁に激突した。

「……………」

ぐったりとなつて壁に沿って倒れこむクロスを確認し、同じく意識を朦朧とさせている樹東に目をやる貴子。

樹東の右腕に切傷があり、そこから血が流れ出ていた。貴子は冷蔵庫にかけてあつたタオルを取り急いで止血する。

「高木くんこの子運んで。私はコッチを運ぶから」

そう言つて貴子は昏倒したクロスを一瞥する。

「救急車は？」

「こつからなら車の方が早いわ」

おまけにここから一番近い病院はシンラ研究所の真ん前にある。
もつともその病院もクロガネ経営のモノではあるが。

私立クロガネ総合病院前。

「つきましたよ」

コピペは軽トラの助手席に乗っていた母娘に言った。彼女らはこ
こへ来る途中の大通りでタクシ が拾えず困っていたのを、通り掛
かったコピペが行き先が同じだからと乗せてきたのだ。

「本当にありがとうございました神父さま」

母親は軽トラから下りると丁寧にコピペにお辞儀する。

「いいっていいって。あつそれとオレのは神父じゃなくてただのコ
スプレだから」

「ふふ」

母親は冗談だと思い小さく微笑む。

「お兄ちゃん」

娘の方が口を開く。少女はまだ低学年程度の背丈だがずいぶん大
人びた雰囲気漂わせている。というより顔が恐ろしく整っている
のだ。

「気をつけてね」

「んっ？ああ」

儀礼的な別れのあいさつをすませて母娘は病院の入り口へと去つ
ていく。それを一頻り見送ってからコピペも軽トラから下りた。

「よいしょつと」

軽快に荷台へ飛び乗り、コピペは積み荷に被せていたシ トを外
す。

その様子を見るものがあればぎよつとなつたことだろう。

今日も朝から燦々と降り注ぐ太陽に反射して黒々と重厚な光を放つ物体の数々。コピペはそのうちの一つ、RPG 7（ロケット推進式榴弾）を手に取り首を傾げる。

「はてさてうふふ！？計画通りに壊れてくれるのかねえ、クロスくんは」

口調はおどけているがその目付きは鋭く、コピペは病院の真向いにあるシンラ研究所をじっと見据えた。

クロガネ総合病院・外科病棟待合ロビ。

「よかったね、大したことなくて」

治療を終えソファで休憩している樹東にゆうが言葉をかけた。出血の割に傷は浅く縫う必要もない程度だったらしい。

「何があつた？」

青木が詰問する。その横には高木も付き添っていた。

「分からない」

呆然とした表情で樹東は首を横に振る。その声は首を締められた後遺症からか多少擦れていた。

「オレが朝飯作つてたら光冴が起きてきて、突然オレの持っていた包丁を奪つてきて」

それから揉み合いの末、首を締められてあの状態に至った。腕の傷はそのときのものだという。

「……………」

あのクロスの表情、アレは明らかに常軌を逸していた。そもそも人造人間は人間を襲えないように制御されているはずである。

「壊れたか」

そう呟いた高木を樹東が見上げる。他の二人も彼を睨み付けた。

「あつごめ」

「あうつあえつ」

樹東の表情が嗚咽で歪んでいく。

「うわああああああ」

「キキ……」

樹東は子供のように泣きじゃくる。ゆうがそんな彼の頭を抱えた。

「……………」

続かない平穩。まるで呪いのようなのだ。

シンラ研究所。

『インプラントチェッカ、オルグリン表示』

『プログラム・誤差0・001パセント』

『軍師の解答、肯定』

飛びかう、プログラマやオペタの報告。

「何故だ　　なんでだ……」

研究室の真ん中に設置されたデスクに腰を下ろしている俊彦は激しくボ　ルペンをノックしながら呟いた。そんな彼の横に立っている山本が声を掛ける。

「やはり制御及びその他のシステムに異状は見受けられません」

「じゃあなんで　　なんでだよ!？」

俊彦は立ち上がり山本の白衣の衿を掴み掛かる。

なんの異状もないのにクロスが樹東を襲った。目的達成間近にきてのこの事態。

焦燥を押さえることなど到底不可能であった。

「よく分からないもの無理して使うからよ」

浴びせられる冷たい言葉。声のした入り口付近に目をやると貴子が立っていた。

「連れてきてやったんだから見学ぐらいは許してくださいね」

「……………」

俊彦は虚ろな目付きで貴子を見つめる。

「どうするつもりですか？」

「……………」

「なんにせよ、アレがあなたの優秀なご子息を襲ったのは事実ですからね」

「優秀……そうかつ!？」

俊彦は何かの事実が付き目を剥く。

「そういうことか。クロスは壊れているわけじゃないっ!だって

」

グイグイ

突如鳴り響き始める警報が俊彦の言葉を遮る。

「何事だ!？」

山本が近くにいたオペレタの一人に訊ねる。

『軍師がハッキングされています』

「なんだとっ!？」

スパコンピュータ 軍師 このシンラ研究会を縁の

下から支えている頭脳であり、恐らくこの世でもっとも優秀なコンピュータの一つであろう。

「馬鹿な 軍師 はあらゆる状況を想定して、如何なる自体でも外部からの侵入はできないように設計されているはずだっ!！」

山本の怒号にも似た疑問にオペレタの一人が答える。

『いえっ外部からではありません。研究所内 この部屋からのハッキングですっ!！」』

「この部屋だと」

この室内にある 軍師 以外のコンピュータ といえば 。
「っ!？」

室内にいるものは一斉に同じ方向に目を向けた。

「クロシングオバ」

ソレが眠っているAU（人工子宮）へと。

「そんなはずない」

俊彦は声を震わせ囁く。

「そんなわけないじゃないか。確かにクロスの体にはマシンインプラントが施されている。でも、そんなもの 軍師 のそれに比べ

たら些細なものだ。とてもそのプロテクトを突破できるはずがない」

「いえ」

山本が青い顔をして首を振る。

「あなたは元々医学部出身でご存じないかも知れませんが、軍師の中枢には生体部品として キザン が使用されているんです」

「なんだとっ!？」

「キザン はブラックボックスの固まりです。或いはテレパシのようにクロスに同調現象を起こしたのかもしれない」

「……………」

室内が警報音のみに支配された。そしてオペレ タ が告げる。

『軍師 のコントロール、完全にハッカ に掌握されました。こちらからのアクセス、受け付けません』

警報音が鳴り止む。恐らくこの施設の全てを統べることの可能な軍師 が止めたのだらう。

「……………」

静寂 それは前奏曲が始まる前の張り詰めた劇場の空気。破壊のエリアか、嚇怒のレクイエムか……いずれにせよ不穏が訪れる前触れであることは誰しもが感じていた。

『これは…… 軍師 がクロシングオ バ のマシンインプラントの制御プログラムを書き替えています』

クロスに施されたロボット三原則に基づく制御が消されていく。

「人を襲わない」

「命令に忠実」

「自分を守る」

科学という力で紡がれた封印の呪縛が解き放たれる。

「やはりかそうきたか」

山本の吐息混じりの囁き。

軍師 を落とされた時点で、この場にいる人間になす術はない。『AU解放されます』

ウィ ンという機動音とともに人工子宮の扉が前のめりに開いて

いく。

「……………」

ドロドロとした液体が研究室の床に広がっていった。
フロントが完全に解放されるとソレはゆっくりと目を開く。
そして全身に繋がれたコードをブチブチと無理遣りに引き千切つて前進し始めた。

「クロス」

俊彦が絶望に溺れているかのようにその名を呟いた。

「お……兄ちゃん」

制御システムという殻を自ら破り今まさに誕生した。

人類の英知が作り出した　　いや、人々の愚痴が産み落とした怪物。

「嘆きの王」

その名はクロシングオバ……。

「あっちいのう」

軽トラの荷台に寝転んで日光浴（というよりほとんど人間バベキュ）をしていたコピペは太陽にその恨みを零した。

「ん？」

首に一筋汗を掻く。

汗など別に珍しくない。蒸し風呂のようなこの状況で、さっきから全身引つきりなしに掻いている。

ただ、その一筋だけが妙に冷たかった。

「……………」

コピペは起き上がり空を仰ぐ。

風がない。空は相変わらず蒼いのに、なぜかピリピリとした雨雲を胎んでいるように思えた。

「服従する蜘蛛の頂」

「っ！？」

どこからともなく声が聞こえてきた。

「世界の網は全ての虫けらを捉えんとす」

「ビンゴ」

「たとえそれが、自らを殺すことになるうとも」

コピペは横に放り投げていたRPG 7を担いだ。

「……………」

腰を低くし緊張の面持ちで研究所の玄関を見据えるコピペ。額から流れ落ちる汗は決して暑さからのものだけではない。

永遠とも思えた張り詰めた時間が過ぎ、

「来た」

ガシャン

派手な音と共に崩壊する玄関ホールの大ガラス。

ゆっくりとした足取りで出てくるクロス。その身には引き千切られた深緑の緞帳を纏っていた。歩調に合わせて棚引くその姿は、まさに詠えたマントの如く。

「わああう！『AKIRA』みたいで、超イカスう」

コピペは目を輝かせ、昔見たアニメ映画を思い出し口ずさんだ。

「ほんじゃま、ドカンと一発やりましょつかねえ」

コピペがRPG 7の引き金を引くと円錐の底を二つ張り合わせたような形の弾頭が砲身より発射される。その弾頭は十メートルほど推進すると安定翼を展開し、自らの固体ロケットに引火して加速。秒速295メートルの速度でクロスに向かっていく。

「……………」

弾頭が着弾する瞬間、クロスは少しだけ身を沈めてから跳躍する。

ダンッ

炸裂する榴弾。

「なっ！？」

コピペは我が目を疑った。

三十メートル以上先で、しかも助走なしで跳躍したクロスが今、自分の頭上を翔んでいる。もとい跳んでいる。小さな影が通り過ぎクロスはそのまま軽トラの十メートル先で着地した。

「『少林サツカ』かよっ！」

驚愕するコピペ。そんな彼に構うことなくクロスは爆風で裾を焦がした深緑の緞帳を靡かせ病院に走っていった。

「しゃらくせえ！やってやろうじゃん」

苦笑いを浮かべるとコピペはRPG 7の砲身を放り捨て、荷台に積んである重火器の数々の中からカル・グスタフ（無反動弾）を手に取り構えた。

「お大事に」

医師が母娘に言った。先程、コピペに便乗して病院にきた母娘である。医師はこれから休憩らしく彼女たちを正面玄関のあるホールまで見送りにと付き添ってきていた。

「どうも」

「さよなら、先生」

母娘は丁寧に別れを告げて医師に背を向ける。そして帰路につこうと歩きだしたおり娘が急に足を止めた。

「……………」

「どうかしたの？」

母の問いに娘は応えない。そして遠くの方で何か爆発音のようなものが聞こえてきた。

「何かしら？」

母は周囲の人間がそうしているようにきょろきょろと首を動かして訝しがる。

「お母さん」

「なあに？」

「靴ひも解けてるよ」

「あら、ほんと」

娘の指摘通り右側の靴ひもが解けていた。母はひもを結び直すそうとしやがみこむ。

その瞬間、

アッ

鼓膜が破れんかというほどの爆音がしたかと思うと辺りは熱風と爆煙に包まれた。

飛び散るガラス片。その一つが母の頭上を掠める。

「割れた心……その器強靱なり」

院内が混沌と渦巻く中、娘は誰にも届くことのない言葉を紡ぐ。

「迷走する双壁の片割れ」

その詩が終わるかいなか、もくもくと立ち籠めている黒い煙の中から深緑の少年が現れ風のごとき速さで走り去っていった。

「うつつ」

頭を抱え呻き声を上げる母を一瞥し、娘は後を振り返る。

「死もまた生のカタチ……」

床に倒れ臥す医師。

「ヒュイ」

息が漏れる音。その首筋にはガラス片が突き刺さり、絶命は間近なのだと言われ出る赤い血が語っていた。

娘は忍びなさそうに目を瞑る。

「さよなら、先生」

そして二度目の別れを告げた。

外科病棟待合ロビ。

「なんだ？」

高木が言葉を漏らした。

「……………」

泣き疲れ放心している樹東以外の人々は同様に訪れた異変に警戒する。

地面が揺れた。一瞬、地震かと思ったがその後も散発的な揺れが続く。

そして爆音。まるでいつかテレビで見た戦争映画みたいな。

「なんかやばくねえ？」

青木が戦慄に声を鳴らした。

心なしに建物が発射してきた錯覚に陥る。事実、頭上から蛍光灯や天井の埃がハラハラと舞落ちてきていた。

「ねえキキ非難したほうがよくない？」

ゆうが未だ心ここにあらずの樹東の体を擦る。周囲の人々もちらほら非常口などに向かい始めていた。

「ねえキキ」

「光牙」

突然、樹東は覚醒したように目を剥きその名を口にする。ゆうたちも彼の送る視線の先に目を向けた。

「クロシングオ　バ」

高木の呟き。

煤で黒くぼけた深緑のマントを纏い、ソレは立っていた。まるで戦場から帰還してきた戦士　いや、そう喻えるにはあまりにも幼く、そして美しい　それは殺戮の天使の様相だった。

「お兄ちゃん」

クロスが虚ろに囁く。

「光牙っ！？」

「やめろっ！」

弾けたようにクロスに駆け寄ろうとする樹東を青木が羽交い締めにして止める。

「離せっ！」

「アレが普通じゃないってのが分からねえのかよっ！？」

「離せっ！離してよっ！！」

藻掻く樹東の力は半端ではなかった。体格では勝っていた青木だったが樹東の筋力は彼のそれを遙かに上回っている。樹東が解放されるのも時間の問題だった。

「お兄ちゃん」

「光冴っ！」

「ボク……誰？」

ダンッ

響く銃声。同時に側面の窓ガラスに放射状の輝が入り、クロスが仰け反る。

「……………」

向かいの病棟にワルサ WA2000（狙撃銃）を構えたコピペの姿。彼は続けて引き金を引く。

「光冴っ……！」

飛び出す樹東。

「しまっ」

そうコピペが口に出したときには既に弾丸は樹東の背中に命中していた。

「キキィ！」

飛び散る血が地面に落ちるよりも早くゆうは樹東の元へ駆け寄る。ぐったりとゆうに体を預ける樹東。弾丸は彼の腹を突き破っていた。

「くっ」

すっころんだクロスは半身を起こして、左肩に着弾した弾丸を右手で穿り返して摘出する。

そして、

「ヤバっ」

クロスは弾丸を人差し指と中指に挟んで右腕を振りかぶった。放たれた弾丸は、或いは銃で発射されたのと同じくらいの速さでコピペに向かっている。

「うひょ〜」

思わぬ反撃にコピペは間拔けな声を上げて身を屈める。その際、世界で最も高価とされる狙撃銃を窓から地面に落としてしまった。

「ちっ」

クロスは舌打ちをしてその場から去っていく。

「キキっキキっ」

ゆうは動かなくなった樹東にしがみつき泣きじゃくる。

「樹東っ！」

青木と高木も彼に駆け寄った。

「キキっ！」

「くっ腹じゃあ止血もできない。早く手術をしてもらって
ピ」

「？」

何か電子音みたいのが聞こえた。

『緊急事態によりレストモ ドへ移行』

「キキ？」

樹東の中から彼のものとは別の声が聞こえてくる。

『テロメラ ゼ一部解放、コード00に従いアポト シス誘発、キ
ザン制御レベル112・113・114』

「っ！？」

「嘘だろっ！？」

「これは」

ぐちゅぐちゅぐちゅ

「傷が塞がってる」

まるで実験の早送りのビデオを見ているかの如く速さで樹東の銃
創が再生していく。やがてそれは始めから傷などなかったといわん
ばかりに綺麗な肌へと変貌を遂げた。

「……………」

自分たちは夢でも見ているのかと疑った。だが、確かに自分の手
は樹東の生暖かい血の感触で支配されている。

「はぁはぁ」

樹東が息を吹き返した。

「キキっ！」

「光冴…………どこに？」

樹東はゆっくりと立ち上がる。

「……………」

愕然と立ち尽くす一行。誰も事態を飲み込めていない。

「とにかく研究所に行こう。キミのお父さんに話を聞くんだ」
高木が言葉を搾り出した。

『ECM（電子妨害手段）展開』

『軍師、ECM（対電子妨害手段）展開』

「次、ファイアウォールっ！」

山本の指示に素早く応じるプログラマたち。

『プロトコル変更』

『変換率53・3%』

『ダメです。クロシングオバ、依然 軍師との交信が続いています』

電波妨害も駄目。通信間の暗号を書き替えてもクロスと 軍師はそれを瞬く間に解読して隔たりを突破する。

驚異的な計算処理能力。これもキザンのなせる術か。

「くっ！」

壁一面のモニタを睨み唇を噛み締める山本。

「ホメオスタシスは破棄しても構わない。なんとしても 軍師の本体を取り戻すんだ」

「山本さん」

プログラマ たちに的確に指示を出し続ける山本の背中に弱々しい声が掛けられた。

「っ！」

振り返った山本は一瞬ドキっとなる。

クロシングオバが立っているかと思ったからだ。だが、よく見ればゆう達に連れられてきた樹東だった。

「樹東くん」

「山本さん……何があったの？光牙は？」

樹東の問いに無言で首を振る山本。

「……………」

樹東は父を探す。だがこの研究室に俊彦の姿はなかった。

「お父さんは？」

「樹東くん、怪我を？」

山本は樹東の着た黒いＴシャツが血でガビガビになっていることに気が付く。

「怪我が……治ったんだ」

樹東が声を震わせて訴える。

「背中を……うつ射たれたのに……一瞬で治ったんだ」

「まさかっ!？」

山本のその言葉は樹東の言っていることを疑っているのではなく、ある推測に対しての驚愕の発露であった。

「お……お父さんは？お父さんはどこ？」

山本にしがみつくように問い掛ける樹東。山本は搾り出すような声で答える。

「地下二十三階、オ ガンズXと呼ばれる部屋に」

「オ ガンズX……」

高木がボソリと復唱した。

「廊下をでて突き当たりのエレベータ……このパスを使えば直通で行ける」

そう言って山本は自分のＩＤカードを樹東に握らせた。

「……………」

樹東はじつとカードを握った自分の右手を見下ろし固まる。

「樹東くん、行きなさい」

「あっ」

山本に樹東の躊躇が見抜かれた。

恐い。

そう、恐いのだ。そのエレベータは文字通り地中深くまで繋がっていて、もう二度と這い上がってくることはできないような、いや、始めからそこが自分の世界だったのだと思い知らされてしまう

ようなそんな不安に襲われる。

そしてなにより、父が恐かった。

それでも山本は真つすぐと樹東を見下ろし告げる。

「行ってお父さんと向き合いなさい」

「……………」

「キミたち家族の過ちを 何をしなければならなかったのかを
話し合つてきなさい」

「……………」

家族の過ち 欠けていた歯車 それを探すための最初の
一振り。

「キキ」

ゆづの呼び掛けが背中を押す。

樹東はゆつくりとした足取りで廊下を進んだ。そして、エレベ

タの前に辿り着くと震える手でカドを溝に差し込む。

ウィーンと音を立ててエレベータが動きだす。やがて扉が開い
た。

「……………」

樹東はエレベータに乗り込む。ゆづ、青木、そしてちゃっかり
高木も後に続いた。

長い時間をかけて下降する密室。

「……………」

これは父への道だ。長く深く届くことのなかった それが今、
開かれる。

「意外に明るいもんだね」

目的地 オ ガンズXと呼ばれる部屋に辿り着き、高木が感
想を漏らした。彼の言う通り、そこは予想以上に開けていて明るか
った。

「太陽光みたいだね。光ファイバで届けてるのかな」

「当然だ。ここは昔、ある特別な人間を育てていた場所だからね」

「父さん」

広い部屋の奥、何やら分からない器材や器具が所狭しと置かれてある場所で俊彦はへたり込むように座っていた。

「最初の人造人間が誕生した場所でもある」

「っ！？」

樹東は俊彦の後にあるものを見て我が目を疑った。

「母さんっ！？」

それは透明なカプセルの中に入っていた女性。樹東の言葉が正しければ彼の母親。

「ユジンニア　ガイア博士」

高木がその名を口にする。

「いや、違う。これもキザンで作った人造人間。やはりあなたは彼女の完全なるコピ　を造ろうとしてクロシングオバ　を　」

「キミはあの女の助手か」

俊彦は高木を目にし嘲るように笑った。

「その通りだよ。ジンが病院のベッドで目覚めることは絶望的。だからボクは彼女の完璧なコピ　を作ろうと思った。そのための人格移植 A I だ」

「植物状態になっても記憶が消えるわけではないと聞いたことがあります」

「そう。だけどその記憶を結ぶ神経細胞が死滅している。だからその代用としてクロシングオバ　が必要だった。アレの脳を人間として熟成させてから記憶を除いた部位をキザンでコピ　しジンの記憶を移植する。脳髓の代用は混乱を生むかもしれないが、所詮人間は記憶の集合だ」

「しかし、それも失敗に終わった」

高木の突放すような言葉。俊彦は顔を真っ赤にさせて怒鳴り散らす。

「お前がっ！！お前が悪いんじゃないかっ！？」
「っ！？」

その血走った目は確実に樹東を射抜いていた。

「お前がいたからボクは ジンは そしてクロシングオ
バ までっ!？」

「父さん」

「お前はっ！お前はいつもボクの前に立ちふさがる」

「お父さん、僕は 」

「お前が人間じゃないからっ!！」

俊彦の絶叫が広い室内に響く。

地下深く、太陽の光が降り注いでいるのにもかかわらず、そこは
まるで奈落の如く絶望に翻弄された人間たちの思いが蠢いていた。

つづく

ホドク

ホドク

環境と遺伝子の差異における教育成果の違いを模索する系統
様々な人種の孤児をグル プに振り分け、現在提唱されている色
々な教育方針を各グル プごとに試みてその成果を観察するアカデ
ミ。

これはその昔、現クロガネグル プの会長である総司の祖父・武蔵^{さし}が提唱し、総司の母・巴^{ともえ}が実施した試験的孤児院であり、優秀な
人材を育成するための教育機関である。

そこが始まりの場所。

訪れた悲劇をひも解くために知らなければならぬ真実の断片。

二五年前

「今日は顔色がよさそうだな」

シンラ博士はベッドに横たわる鉄総司に訊ねた。

「うん」

体中にいくつも点滴をされている少年は少しだけ首を動かし笑っ
てみせる。それが今、彼に与えられている自由の限界だった。

「わしが毎日来てやっとなるんだ。少しはよくなってもらわんとな」

「へへ、先生には叶わないな」

この光景を端から見るものがあるとすれば、いぶんシンラ博士は偉そうに見えるかもしれない。というのも、一見総司少年よりもシンラ博士の方が幾分も幼く見えるからだ。

しかし、実際シンラ博士は十五歳。総司少年は十三歳。博士の方が二歳年上であり、その功績からも敬われるべき立場である。

「ありがとう、先生」

「ん？」

突然の少年の謝意に博士は戸惑うように眉じりを下げる。見た目の割にいつも硬い顔の博士がこんな表情を見せるのは、或いは総司少年の前だけかもしれない。

「僕、先生がいるから頑張って生きようって思えるんだ」

「そうか」

「先生、僕」

そのおり、ピピピと電子音が鳴り、総司少年の言葉を遮った。

「悪い」

音の正体は博士のポケベルだった。博士は白衣のポケットからそれを取り出し、ディスプレイに目を落とす。そしてイラついたように顔を顰めた。

「先生、呼び出し？」

「……………」

博士は答えない。忙しい身の上ながら時間を割いてここに来ているのだ。そのなけなしの時間を邪魔されては憤慨を覚えないはずはない。

総司は一瞬だけ寂しい顔をして、それでも博士に悟られないうちにめいっばいの笑顔を作って博士に言う。

「先生、行って」

「だが」

「大事なこともしれないだろ？」

「……………」

博士はいつときの間考え込んでから何も言わずに病室を後にした。
これはいつもの習慣だった。

『さよなら』を言うには寂しすぎる。でも『また』と言えば嘘の
ように聞こえるから。

残された総司少年は首をゆっくりと天井に戻して呟いた。

「行くなよ バカ……」

アカデミ 内の廊下を颯爽と歩いていくシンラ博士。アカデミ
の生徒たちは同様に脚を止め遠巻きに博士を見る。

「ほら、見るよ。トル」シンラがいるぜ。毎日、総司坊っちゃん
の見舞いに行ってるって噂、本当だったんだな」

「うん？どれ」

「あれだよ、あれ」

「はん？シンラってたしかオレらより一、二こ下だろ？あれ、小学
生じゃん」

「お前、知らないの？第二次性徴不全」

「なんだよ、それ」

「なんか、原因不明らしいけど、第二次性徴が起こらないんだって。
つまり、ずっと子供のまんまってやつ」

「ふ〜ん」

「それでさあ噂だけど、その病気のやつって性徴に栄養使わない分
が頭にいくから天才になるとかならないとか」

「ええまじでえ よくねえそれ」

「バア力。じゃあお前、天才になるかわりに一生セックスできなく
てもいいのかよ」

「うっそれは まあ 」

「だろ？それに、いくら天才でもあれじゃあな」

小さい背中 ぶかぶかの白衣姿に送られるそのほとんどが、
羨望や尊敬ではなく哀れみや蔑みの視線であつた。

技術開発部・第一ラボラトリ。

「ごめんね、シンラ。呼び出したりして」

シンラ博士が研究室の入り口を潜ると、待ってましたとばかりにチムで一番年長者の青柳めぐみが博士に話し掛けてくる。とはいうものの、その青柳とてまだ二十代前半。アカデミが創立した当初に入籍した生徒であり、一歳の時に入籍したシンラ博士と同期のさくらだった。

「なにがあつた」

眉間に皺を寄せて問うシンラ博士に青柳は小馬鹿にしたような笑みで答える。

「いや、たいしたことじゃないんだけどね。電話でいいとも思ってたんだけど、どうせあなた医学部にいつてると思つてさ。あそこにいるんじゃない携帯つかえないし」

「……………」

普段から目付きの悪いシンラ博士に見上げられると、なぜか責められているような気になり青柳は苦笑して本題に入る。

「ふん。被験体は失敗したわ。だから処分してを請求しようと思つけど、まっその報告をね」

「失敗」

シンラ博士は眉を潜め被験体、眠っている子供のチンパンジに近寄った。

「なんかさっきレントゲン撮ったら、脳腫瘍ができてるみたいでさ。そついいながら青柳はレントゲン写真を数枚取り出す。

「！」

シンラ博士はひつたくるようにそれを奪い電光板に張り付けた。

「バカな！昨日まではこんな影見えなかったぞ」

「まったくおかしいよね。でもさ、どのみちこれは私たちのせいじゃないよ。はいとこ処分して」

「イレギュラ　だ！原因が分からん以上、それを探らならんかうがつ！？」

一喝するシンラ博士。その迫力にたじろぎながらも青柳は宥めるように言う。

「そりゃあなたの言うことも一利あるけど、実際問題私たちにそんな時間ないでしょ？」

「なければ作れっ！失敗すれば次があるなんぞと甘い考えだから前はいつまで立っても進歩せんのだ！」

「っ！」

その言葉にムツとする青柳。

しかし、博士に対する抗議を申し出たのは彼女ではなく他のチムの面々だった。

「そんなに言うなら、シンラ君一人で調べたら？」

「そうだよ」

「ただでさえ、こっちは前に二匹も失敗して上からやあやあ言われてんだからな」

チムメイトにしてみれば寧ろそうしてほしい気持ちだった。一言で言うなら誰もシンラ博士と反りが合わないのだ。

「よかるう」

そしてそれは博士とて同じ。

もともとこの開発チムには数カ月前に上から頼まれて渋々加わっていたのだ。それで望まれていないというのならこっちから願い下げである。おまけにこの研究自体始めから乗り気でなかったということもある。

『イメジ・コントロラ』　その名の通り、思っただけで機械を動かせるという代物。脳内にインタフェイスとなるマシン

インプラントを施し、それを介して例えば機械仕掛けの義足や義手を思い通りに動かすことを目的としている。しかし、博士にしてみれば頭の中を弄くってまでする必要のあることなのかはなはだ疑問だった。

「わしは今日かぎり を引き取って、このチ ムを離れる」
「ちよつと待つてよ」

一番最初に頭に来ていた青柳だったが冷静になってシンラ博士を諫めようとする。

「そんな急に言われても それに、みんなだつてちよつとイライラしてるだけだし」

「……………」

「それに の原因調べるにしたつて一人じゃむりでしょ？ だいたいあなた物理系だし」

「ふん」

シンラ博士は鼻だけで笑う。

「確かにわしは物理系かもしれん。『ゲ ジ理論を掌握する触媒の予見』『THZ波発生方式の確立』『ベリ ナノクレ シュの構造理論』」

それらは全て過去に博士が提唱した理論や発見である。 たった十五歳にして、次世代科学技術の基盤になるであろう体系を一人で作つた博士はやはり天才の中の天才と呼べる。

「全て机上の論理だ。 おまけに脳外科に関しては素人当然」

「でしょ？ だから」

「だがな なんの成果も上げていないお前らに足を引つ張られるくらいなら一人の方がまだましだ」

「……………」

そこまで聞いて青柳は言葉を失つた。 いつときの黙止。

やがてわなわなと声を震わせ言う。

「わかつた。 そこまで言うならもういい。 上には私から言うから」

「……………」

「たしか、第三ラボが開いてたからそこを使いなさい。 今日中には移す。 勝手にしたら」

「ふん、邪魔したな」

そう告げるとシンラ博士は研究室を後にした。 そんな彼の背中を

見送ってから、チ ムメイトたちは『何様のつもりだ』だの『むかつく』だの口々に言い合う。

ただ一人、青柳だけが、

「はぁ」

疲れたため息を吐いて頭を抱えていた。

数日後。

「.....」

第三ラボにて、被験体 のCTスキャナ 画像を睨むように見据えるシンラ博士。

「やはり妙だ」

の脳内にできたこの腫瘍。脳腫瘍の種類は良性・悪性含め約一三〇種あると言われるが、いずれにしる脳にできれば生命の危険をきたすもののはずである。にもかかわらず にはこれといって深刻な病症は見られない。おまけにこの増殖の仕方、どこか秩序だっているような.....。

「ふう」

博士は背もたれに寄り掛かり視線を画面から天井に移す。

正直煮詰まっていた。大体無理なのだ。数式の構築や時間に余裕のある研究ならいざ知らず、臨床医学にたった一人で挑むなど。

それでも博士は人を頼る術を持たない。

そもそも彼の協調性のなさには理由があつた。

それは先に語られた「第二次性徴不全」が関与する。

原因不明の奇病が天才を生む。眉唾物の噂だが、しかしそれも強ち間違えとはいえなかった。事実、博士の脳は常人のそれより何倍も活性化した状態を常に保っており、それが今日までの彼の天才ぶりの要因となっている。

脳の活性は、或いは棚牡丹なものに思えるかもしれない。しかし、それは同時に慢性的な神経症を発症することになる。脳の限界はど

れだけの情報を処理できるかではなく、多数のネットワークを束ねた上でどれだけ自己を形成し続けていられるかにある。その枠を超えた情報処理を行えば統制が取れなくなりジレンマに陥りストレスを誘発する。それが思考の限界。その限界を常に超えている博士は重度の精神病を併発しており、それを無理繰り抗精神病薬を始めとする大量の薬で押さえこんでいるのが現状であった。根本の原因が分からないためにそうするより外なく、この無二の天才の理解者はほんの一握りしか存在しなかった。

「……時間だ……」

博士は をＣＴスキャンから抱え出し、ゲジの中へそつと寝かせる。ゲジは結構な大きさのものである。今は麻酔が効いて大人しくしているが、時間が経てばまたその中で元気に遊び回ることだろう。そんな姿を観察しているとこの動物の方が遥かに人間的だと博士は思う。

一人でいると自分には心がないのではないかと感じる。その癖、人の中にいるといつもイライラしている自分がいる。

緊張・侮蔑・孤独・閉塞　　まるで知恵の実を食べた代償のよ

うな……。

「行ってくる」

未だ眠っている　　に博士は抑揚のない声で告げた。

唯一、そのどちらでもない自分になれる場所に　　。

シンラ博士が鉄総司の病室を訪れると、そこには先客がいた。

鉄貴子。総司の種違いの妹だ。

「今日は、先生」

貴子は柔らかな笑みを浮かべて挨拶する。

「ん」

博士は軽く会釈し、ベッドの中の総司少年に目をやった。総司は俯せに寝ていた。背面に点滴を射していたからだ。

「へへ」

総司は貴子とは異なる笑みを浮かべる。どうやら互いに父親似らしかった。

「痛いかな？」

博士は総司少年に訊ねる。いつものように眉間に皺を寄せたままだが、それでもどこか優しい労わりが伝わってくる。

「平気だよ」

少年は枕に顔を押しつけて答えた。気に掛けてもらえることがとてもとても嬉しくて、くしゃくしゃになる顔を博士に見られるのが気恥ずかしかったからだ。

「ふふ。じゃあ私、行くね」

貴子は二人に気を使って席を立つ。まだ十歳にも満たない彼女だったが、こういう嗅覚の働くところは女子特有の早熟のなせる所なのか。或いは不遇の兄に対して、女としての譲歩の表れなのかもしれない。

「そついえば先生、大丈夫？」

貴子は戸の所まで行くと思い出したように博士に訊ねる。

「なんか今、たった一人で何かやって大変そうだって青柳先生が言ってたけど」

青柳が？余計なことを……。

博士は左頬を強ばらせて履き捨てるように言う。

「べつに　一人の方がかえってやりやすいくらいだ」

「そつか、余計なお世話だったね」

「構わん」

「ふふ、それじゃあ」

貴子は静かに病室を出ていった。

「ねえ先生？ホントに大丈夫なの？そつ言えば疲れてるような

」

「ふん」

心配そつに見上げてくる総司の目を、博士はそつと手で覆い隠し

た。

「わしの心配など、百年早い」

「へへ」

「ん？」

「先生の手のひら柔らかい」

「なっ」

博士は素早く手を引つ込めた。総司はつまらなさそうに、

「あゝあ、もつと触れてたかったのに」

と口を尖らせた。

「バカ」

博士は照れ臭そうに外方を向く。

「へへ」

妹から聞いていた普段の博士。こういう表情をするのはおそらく自分の前だけ。それがとても嬉しい。

博士は視線を総司に戻す。総司はじつと博士に見下ろされ照れ臭くなった。

「なっ何？」

「……………」

博士は答えず総司の頬に手を添えた。

「あっ」

「これで満足か？」

「うっうん」

博士が恥ずかしがりながらも自分の要望に応えてくれた。嬉しすぎて泣けてくる。

でも、その手は暖かいけどとても小さくて。

「ねえ先生」

「ん？」

「先生は　その……病気で辛いと思ったりする？」

「分からね……わしは生まれたときから変わつとらん。違う自分を想像したところでそれは推測の域を出んからな」

「そつか」

総司は首を動かし博士の手から頬を離して反対側を向く。博士はその手を、向けられた総司の後頭部に置いた。

「僕は辛い。やっぱ想像すると違う自分、健康な自分の方がいいと思う」

「そつか」

博士は総司の髪を撫でる。慰めるように。

「でもね、今の自分でよかったと思うこともあるんだよ」

それは毎日のように博士が自分の所へやってきてくれること。たとえそれが同情でも、可哀相だと思われるだけだとしても、それで博士を繋ぎ止めることができるなら。

「ん？」

「やっぱ教えない、へへ」

「そつか」

博士は強めに総司の頭をくしゃくしゃ撫で繰り返した。

更に数日が過ぎた。

この頃になると、シンラ博士に打つ手はなく の飼育をただただしているような日々が続いていた。

「……快活そのものだ……」

ゲ ジの中で美味しそうに果物を頬張る を眺めながら博士は呟く。

内心、焦りが無いといえは嘘になるだろうが、今の博士はどこか和んでいるようにも見える。

結局、謎の腫瘍もその原因も全く分からずじまい。それでも当の被験体が元気ならそれはそれでいいのかもと思う。幸い、上からは何の咎めも催促もないし、なにより人間より動物の相手をしている方がずっと気が楽だった。

「キッキイ」

「まだ欲しいのか？仕方ない奴だ」

物欲しげに餌をねだる　に博士はバナナを手渡す。　はぺコリとお辞儀をして丁寧に皮を剥いて食べ始める。

そんな姿をいつものように眉間に皺を寄せ観察していると、研究室の扉がノックされ、返事をするのも待たずに開かれた。

白衣を着た子供が入ってくる。背恰好は博士と同じくらいなので十歳前後くらいか？

「誰だ？」

博士はその子供を睨み付ける様にして訊ねた。はつきり言って柄が悪いことこの上ないが、子供はそんな博士に怯えることなく整った顔立ちを柔和に崩した。

「ボク、関俊彦っていいいます」

そう、この瞬間こそ天才ト　ル〃シンラ博士と後にその意志を継いだといわれている関俊彦との初顔合わせであった。

「わ」

俊彦は挨拶もそぞろに、ゲ　ジを見て目を輝かせたかと思うと燥いで　に駆け寄る。

「可愛い！」

そしてしゃがみこみ、まるで動物園にでもきたかのように食い入るように　を観察し始めた。

「.....」

あまりにも無邪気な俊彦の行動に博士の方が幾分気取られてしまふ。

「おい」

しかし、気を取り直し博士は聊か強めの口調で言い放つ。

「名を名乗るだけでわしの問いに答えたと思うところのか貴様っ！」

初対面で『誰だ？』と訊ねられた場合、自分の所属するものなり何なりを付随するのが常識である。

「あっごめんなさい。可愛かったからつい」

臆することなくにこやかに謝罪する俊彦。

「今日づけで医学部より転属してきました。上から先生の補助をするようにって」

「なに？」

「これ先生に渡せって」

俊彦は立ち上がり、小脇に抱えていたクリップボードを博士に手渡す。転属に関してのもろもろの書類であつた。それらをざっと流し見ていた博士は俊彦のプロフィルのところまでいくとその実績に目を見張る。

「関俊彦、十歳。医学部六回生」

この年齢で大学の医学部六年目に相当する学力を持っている。いや、アカデミ内での進級は他の教育機関より遥かに難しいことを考えるとそれ以上か？

自分よりは劣るが。

「まさかお前」

クリップボードを持った博士の手が小刻みに震えていた。

「オレと同じ」

『「第二次性徴不全」なのか？』そう続く博士の言葉を察し俊彦は答える。

「たぶん違うと思います」

少し間を置き顔を紅潮させて俊彦は言う。

「えっと　その、精通現象は半年くらい前に　その……」

「……………」

射精が可能　つまり第二次性徴はすでに始まっているということだ。となるとこれはアカデミの大意である　優秀な人材の作り方を模索する系統　が本当の意味で完成に近付いているのかもしれない。

「それにボクそんなに頭良くないですよ」

頭を掻きながら謙遜する俊彦。

そんなはずはないが　俊彦の安穩な雰囲気はいわゆる天才とは程遠い気もする。

「ボクちよつと記憶力がいいだけなんです。だから、計算とか遅くて、へへ」

「あつても手先はすごく器用なんですよ。ほら」
俊彦は白衣のポケットから輪になつたタコ糸を取り出し、素早く綾取りで杯を作つて博士に見せた。それから流れるような手つきで杯が蝶に変わり更には富士山になる。

「ねっ」

「……」
確かに自己紹介をするよう促したがよもや特技まで披露されると思わず、博士は啞然となる。

「えつとボク、前から博士の下で働きたいって思ってたんです。よろしくおねがいします」

「わしは助手などいらんっ！帰れっ！！」

照れ臭そうに言う俊彦に、博士は怒鳴るようにしてクリップボードを押し返す。普通なら憚然となるなり怯むなりしそうだが、やはり俊彦は笑顔を絶やさず、

「ボクにその権限はありません」

と正論を言つてのけた。

「問題があるんだつたら上に言つてくださいね」

「……」

年下に旨い具合あしらわれ博士は聊か戸惑つてしまう。

見た目も行いも幼いくて思慮に欠けているのに、なぜか人を圧倒する雰囲気俊彦は持っている。その起因がなんなのか計りかねるが、明らかにこのアカデミの生徒たちの大部分とは一線を引いている。幼い頃から高い水準を求められ、競争することを強いられている彼らのほとんどが皆、傲慢で猜疑心の強いものばかりだ。そんな彼らと比べ、俊彦は優秀さの割にずいぶん幼稚に見えるし、またその幼稚さが逆に人間としてのレベルの高さを思わせる。

「お前、どこからの要請できた」

博士は俊彦の指摘するように上に直接事情を訊こうと電話の受話器を取る。

「えっと たてまえは」

俊彦は押し返された書類に目を落とし、確認しながら答える。

「技術開発部・人事課だけど」

「……………」

「実際、頼まれたのは総司さんです」

「なにっ!？」

総司の名を耳にし、博士は電話をプッシュしていた指を止める。

そして受話器を置き、

「貴様、総司を知ってるのか？」

驚き訊ねる博士に俊彦は笑顔のまま頷く。

「ええ。前に研修で世話したときに気に入ってもらっちゃって、たまにでいいから話し相手になってって頼まれたからたまに顔を出してます。それで、先日総司さん博士のこと心配してて」

「ちつ余計なことを……………」

舌打ちをして外方を向く博士の顔は怒っているが、それは照れを隠しているのだと思わせる。俊彦もそれに気が付き笑みを一層深めた。

「あつでも前にボク、総司さんに博士に興味があること言ってたんでそれで頼みやすかったんだと思いますよ」

「……………」

博士は逡巡するように床に目を落とす。

人と関わるのは鬱陶しいが、総司の好意を無下にする気にはなれない。

「勝手にしろっ!」

吐き捨てるように言っただけで博士は乱暴に椅子に腰掛けた。俊彦はまたしやがみこんでとじやれ始める。

「博士 この子、名前は？」

「だ」

「　　かあ。じゃあガンちゃんだね。ガンちゃんせつせつせでできる？
こうやるんだよ」

「キッキ」

チンパンジ　相手に遊戯を始めた俊彦を見て、博士はここは幼稚園かと頭を抱えた。

「ランランランランランラン」

と一区切り着くのを待ってから博士は俊彦に訊ねる。

「お前なにしにきた？」

俊彦はよくできたと　の頭を撫でながら答える。

「ここにくる前に詳細を青柳博士に聞いてきました」

「なに？」

「レントゲンも見ただけ、ガンちゃんのこの様子からもアレは腫瘍じゃないですね。たぶん　　」

「たぶん？」

「あつ、いえ　　とにかく『イメ　ジ・コントロ　ラ』ってのと一緒に摘出してみましょう」

「摘出……わしは手術なんぞできんぞ。お前がやるのか？」

「まさか　　さつき、知り合いの先生に頼んどきました。明後日に時間割いてくれるそうです。優秀な脳外科の先生です。だから安心していいよ、ガンちゃん」

「……………」

そういうことか。

関俊彦。幼稚で思慮に欠けているわけではなかった。自信があるのだ。自分というものに圧倒的な自信が……。だから怒られても平気だし、多少型破りな行動に出ても最後には全てが自分に平伏すと本能的に知っている。

だが人は完璧ではない。自信とは挫折と表裏である。それでもこのアカデミ　という社会から隔離された世界の中では、恐らく俊彦は完全無欠の専制君主で居続けられる。水中の鮫は決して陸上の獅子とまみえることはないのだから。

「……………」

危ういな。コレが 優秀な人材の作り方を模索する系統 の目指すものなら、自分と同じように「進化の指針」の標的に。

「ふん」

たった数分会話を交わただけで、博士は俊彦の本質を見極めていた。

色んなことが分かりすぎる。だから、人といるのは嫌いだった。

「信じられん」

顕微鏡を覗いていた博士は驚愕する。

プレパラ トには先程 から摘出した腫瘍の一部が挟まれていた。「ただの有機化合物だったものが核を持ち細胞分裂するなど

」

腫瘍の正体は、『イメ ジ・コントロ ラ 』の研究でマシンインプラントとチンパンジ の脳を繋ぐために使われた人工大脳皮質が増大したものだ。ただの人工物のはずだったそれが生物の細胞と同じように核をもち異状な細胞分裂を行なっているのだ。

「でも、薄々は気付いていたんでしょ？」

シンラ博士の横で同じように顕微鏡を覗いていた俊彦が言った。

博士は顕微鏡から目を離し俊彦を睨み付ける。

「なんだと？」

「だって、この人工皮質って博士が提唱したベリ ナノクレ シュってのを使ってるんでしょ？」

ベリ ナノクレ シュ トル「シンラ最大の功績とされる代物。

シンラ博士が物質を結びつける力に、ある画期的な法則性を見いだしたことにより簡単な電圧制御でナノレベルにまでその構造を操作できる有機化合物が生み出された。それがベリ ナノクレ シュであり、今後の文明発展に或いは原子力以上の貢献を齎らすである

うと期待されている。

今回のマシ ンインプラントには、このナノクレ シュの実用実験も兼ねており、そのためにシンラ博士は開発チームに参加していたのだった。

「未知の物質ならこういうことだって予想できますよね」

「……………」

その通りだ。予想はしていた。

なのにあれこれと悩んでいたのは、その意味するものの恐ろしさに対し本能的にその考えを排除しようとしたからだ。

「でも、ホントすごいですよっ！」

俊彦は興奮して言った。

「これがナノクレ シュをベ スにした細胞だとしたら電圧制御で遺伝子を簡単に操作できる代物かもしれない。もしそうだとしたら人間は神」

「黙れっ!!」

博士が声を上げ俊彦の言葉を制した。さしもの俊彦もその迫力に体が跳ね上がる。

「博士？」

「……………」

博士は答えず目を瞑る。怒りにも似たためらいの形相で。
俊彦の言う通りだ。

もしそれが本当なら人間は神にも等しき力を手にしたことになる。命を掌握する力。そんなものあつてはならない。

「処分するぞ」

「なっ!?!」

シンラ博士の出し抜けの発言に俊彦は一瞬理解に苦しんでしまう。

「なんですか？」

「何度も言わせるな! コレを処分する」

「冗談でしょ？」

「冗談のわけなからうがっ!!」

身も竦むような怒鳴り声。しかし、ことの重大さに俊彦も怯んでいなかった。

「冗談にしか聞こえませんか！！コレはもしかしたら人類史始まって以来の快挙かもしれないですよ！人類の高見を知ること、それこそ科学者の誉れ。コレは僕らを未知なる世界へと導く方舟かもしれないのに」

「そうかもしれん」

つまりそれは人が進化を超えること。

定められた進化の終着である「リプルリバス」それを補

正しようとする「進化の指針」本来なら人の知恵も力も及ばないはずの戦いに参戦することとなる。

すなわちこれは悲劇の種。

「だが、辿り着く頂が桃源郷とは限らん。或いは」

「じゃあ、博士はアインシュタインが人殺しだとも言うんですか？科学が人を殺すのだと？」

「……………」

「だったらなんのために科学者はいるんですか？所詮ボクらは真理に触れることに喜びを感じる人種です。そして博士はすでに真理に手を触れた人間だ。なら、遅かれ早かれコレは生まれる運命だった。なら博士の手でコレを指針するべきじゃないんですか？」

俊彦の言い分は正論である。

責任と義務を問う上で、全ての人間が生み出したものに対してそれを負うのが妥当。それが偶然の産物なら尚更だ。

だが。

「貴様は結局なにがいいたい？詭弁を振り翳すなら、わしのもとから去れ！」

「やはり博士は迷ってる」

「っ！？」

俊彦は勝ち誇っているとも相手を労わってるともとれるようなゆるい笑みを浮かべた。

「本当に詭弁なら聞く耳を持たなければいいだけです。その言葉が口からでるのは心のどこかで迷ってるから。コレを研究すればもしかしたら総司さんを救えるかもしれないって思ってるんでしょ？」

「そっ！」

そんなことはないとは言えなかった。

『ボクは辛い。やっぱ想像すると違う自分、健康な自分の方がいいと思う』

顔を背けて呟いた総司の姿が浮かぶ。弱音を吐くことを屈辱と知っているものの弱音。生れ付きという理不尽な運命に対しての苦しみ、憤り、嘆き シンラ博士には総司の心がそれらに縛られているのだと安易に想像できた。

「博士は総司さんのことを同情してるんですか？」

「……………」

同情 違う気がする。ただ、自分はベッドの中の世界しか自由のない憐れらしい少年の横に腰を掛け、ときおり語らったり、笑っている彼の顔を眺めたりしていただけのように思えた。そう、それは欲なのだろ。

「好きなんでしょう？総司さんのこと」

そうかもしれない。

愛だとか、そんな定義もないものは理解できなくても、好きか嫌いかでなら判別はできる。そう、自分は鉄総司とときを共有することを何にも替えがたいと思っている。

「だったらできることをしましょ？大切なものを守るために」

「……………」

関俊彦の言葉はやはり詭弁だ。ただ単に己れの知識欲にしたがい、説得を試みているだけ。

それも最も有効と思われる手段を講じて。

人の心をかき乱してでも我俣に忠実。

「……………」

トルⅡシンラには全てお見通しだった。

それでもこの研究所という名の海上にいるかぎり王者の鯨に飲み込まれてしまった。

ここが数多にある歴史の分岐点であることを認識しつつ。

二二年前

トル・シンラ博士が開発したベリ・ナノクレ・シュより偶然生まれ出た細胞。これはやはり関俊彦の指摘通り、遺伝子は疎か細胞の形、配列までもを自由に操作できる代物だということが証明された。

この細胞をシンラ博士は「キザン」と命名する。皆はそれを中国の山から取ったものだろうと解釈したが、しかし博士の口からその真意が語られることはなかった。

そして「キザン」誕生より三年、その有効活用の研究のため、

昨年ヒトゲノム研究に大きな成果を上げた研究機関より「ユジン

」ア・ガイアなる人物がアカデミに引き抜かれることとなった。

「はじめまして、ユジン・ア・ガイアです」

そう流暢な日本語で述べたのは、白人のうら若き女性であった。

その場にいるのはシンラ博士と俊彦の二人である。博士は例によって、興味なさげに鼻を鳴らすだけである。一方俊彦の方は、

「女性の方だったんですね」

と驚きを見せる。

文化的に「ユジン」は男性に付ける名称であるからだ。

「しかも、こんな若くてきれいな人だったなんて」

「そうですか？」

俊彦の賛辞に彼女は笑みを零すがそこに照れはないように見えた。恐らく彼女にとっては言われ慣れた言葉なのだろう。

実際、「ユジン・ア・ガイア」は権威ある研究機関から引き抜か

れたにしては驚くほど若いし、その容姿はどこぞの銀幕で華と咲き乱れていてもおかしくないほどである。

「名は祖父が付けてくれたんです。家は代々学者の家系でホントは男の子が欲しかったらしいのですが、せめて名前だけでもということだったらいいです。あつジンって気軽に呼んでください」

「うん」

俊彦は屈託ない笑みを浮かべた。

ともすれば俊彦もジンに負けないほど容姿端麗である。賛辞には靡かなくとも、この笑顔にはジンも照れを覚えないではいられなかった。

思えば、この笑みこそ俊彦の最大の武器であり、また今後の命運を紡ぐ楔だったのかもしれない。

「ウアア」

子供相手にと恥じらいつつ、ジンは話題を移す。

「ドクタ シンラ、ご高名はかねがね。お会いできて光栄です」

「ふん」

博士は仏頂面で鼻を鳴らすだけだった。

だがジンは怯まず続ける。

「ドクタ の書かれた『軌条進化論』のレポートは我々遺伝子学者にとつてのバイブルです」

「あんなもの十年も前の稚拙な空論だ」

「確かに当時、ダ ウイニストからの批判はありましたが、しかしヒトゲノムプロジェクトであのレポートが大いなる指針となったのは事実です」

「っ！」

博士の顔色がほんの少しだけ変わった。

しばらく押し黙った後で、博士は押し殺したような声で言う。

「一つ忠告しとく。深淵に興味を抱くのは勝手だが、足元を掬われんよう気をつけることだ」

そして博士はその場を去っていった。
残されたジンは、

「私、何かまずいこと言ったかしら？」
キョトンとなる。

俊彦はケラケラと笑いながら言う。

「あんま気にしない方がいいですよ。博士はステロな天才肌だし。
それに見かけによらず心配性だから」

「インディ ド（本当に）？」

あっけらかんと述べる俊彦に、しかしジンは博士の言葉に聊か
真実めいた焦りがあつたと納得行きかねていた。

「今日、ラボに新しい人が来たんでしょ？」

何となく行き場を失った博士は総司の病室へ顔を出した。三年が
過ぎてても総司の自由の広さは変わってない。ベッドの中、それが彼
の世界だ。

「……………」

いつもなら喜んで博士を迎え入れる総司だが、しかし今日は開口
一番から機嫌が悪かった。なんとなく理由も分からなくはないが。

「気になったから貴子に訊いて、履歴の写真見せてもらったんです
よ」

「……………」

「すごい美人でしたね」

要は焼餅である。

「好きになっちゃったりなんかして」

その言葉に主語はない。自分がとも先生がとも取れる。しかし、
彼のその態度を見れば後者だということは火を見るより明らかだ。

「バカもんが」

博士は総司の頭を軽く小突く。

「ふんだ」

総司は拗ねて目を瞑る。

博士は困ったようにため息を吐き、

「……………」

そして黙って総司の手を握った。総司は外方を向く。

「ねえ……先生？」

「ん？」

「……………」

総司はそれ以上口を開かなかった。代わりに博士の手を強く握り返す。

博士はほんの少しだけ表情を緩め、総司の髪を優しく撫でた。

二〇年前

「よしっ！新作綾取り、ミクロコスモスって名付けよう」

正午の休憩時間、俊彦はいつものようにアカデミの屋上に上がり一人綾取りに熱中していた。

「アイ・スパイ・トシ（トシ、みつけ）」

そこにジンがやってくる。

「いつもお昼になると消えちゃうって思ってたけど、こんなところにいたのね」

「へへ　ここ、めったに人こないから一人で熱中するには最適なんですよ」

「フン？」

俊彦の言葉を受けジンは不思議そうに辺りを見回す。

「見晴らしよくて、気持ちいいのに変ね」

「ああ、それには理由があるんですよ」

俊彦は立ち上がり、屋上の縁にゆっくりと足を進める。

「ほらあそこ」

「フン？」

ジンも俊彦に習い、そして彼の指差す方向に目を向ける。

「手前の病棟の右奥　　公園が見渡せるでしょ」

「ええ」

「だからです」

「？」

ジンには俊彦の言葉が何を指しているか把握できなかった。俊彦はそれに気が付き続ける。

「ここにいるほとんどの人間が小さい頃から勉強に精を出すよう仕向けられています。自由時間も沢山あるし、外出も自由ですからシステム上問題はないんですけど、そういった時間も大抵の子供が勉強してるんです」

「どうして？」

「おちこぼれるからです」

「おち　　」

「べつにおちこぼれたからといって何かペナルティ　があるわけではないんですけど　でもここには学力が絶対という見えない力場みたいなものがあるんです。おちこぼればきつと惨めになる。普通ならそういった壁にぶつかつたとき別の生き方を模索するのもかもしれない。でも、ここにいる子供たちはその方法を教えられていない。だから、石に齧り付くように勉強するんです。自分の価値を見いだすために。それでもここに来て自分たちとそう変わらないような子供たちが遊んでいるのを見ると自分たちの存在意義にぶつかり心が揺らぐ……だから　　」

「……………」

ジンは息を呑んだ。外部の人間だった彼女が初めて聞かされた地獄。そう、ここは子供の未来を踏み躪る地獄だ。

表向きは巨大企業が設立した孤児院。

だがその実体は人生の実験場。

偉い人たちがどういつつもりでここを作つたか計りかねるがなん

と残酷なことだろう。

「トシはどうなの？」

いつも明るく前向きな俊彦。ジンには彼がそんな苦況を抱えて生きているとは思えなかった。

「ボクは……よく分かりません」

俊彦は公園に向けている目を眩しそうに細めた。ジンも釣られてその方を向くと、公園の広場で数人の男の子たちがサツカをやっていた。

「彼らがボクより幸せかは分からないし」

「……………」

すごい発言だと思う。聞き様によつては、他人をとことん蔑んでいるようにも、対等の立場だと尊厳を押し量っているようにも聞こえる。

俊彦は笑っている。そのどちらと取るにも似付かわしくない表情で。

「それに、シンラ博士曰くボクは恵まれてるらしいし」

「そう」

ジンはどう答えていいのか分からず曖昧に返事をする。だが、同時にシンラ博士の言う通りかもしれないと思う。

俊彦はアカデミ 内の人間の中で特に秀でているものはもってない。しかし全体として全てにおいて勝っているのだという印象を受ける。

自信 根底にあるこの言葉が彼をそうさせているのだろう。

「そうそう、この人たちでもう一つ理由があつて祝祭日外出しただらないんですよ」

「もう一つの理由？」

「ええ。休みの日ともなると家族連れが多いでしょ……みんな孤児だから、辛いんですよね そういうの見るの」

「……………」

母親がいて父親がいる。彼らがどういうものを背負って日々生き

ているのかは分からない。

でも、それすらないものにとっては心が引き裂かれるほど羨ましく映る光景。

「でも、ボクなんか思っんですよ。今、家族がないんなら自分で作ればいいって」

「作る？」

「そう、結婚して子供を授かって幸せな家庭を築く　それが当面のボクの目標かな」

蒼天を仰ぎながら語る俊彦を見て、ジンは思わず彼をぎゅっと抱き締めたくなる衝動に駆られる。

その代わりに彼女は、

「いい人が見つかるといいね」

そうそつと囁いた。

俊彦は何も答えず静かに微笑んでいた。

「ねえ先生」

「

その日、珍しく貴子がシンラ博士の研究室を訪れた。

「子供っていうのはさ、やっぱり親のいうこと聞かなきゃなんないのかな？」

どうやら彼女は何か悩みがあるらしい。これも珍しい気がした。

シンラ博士は黙って貴子にコ　ヒ　の入ったカップを手渡す。

「ありがとう」

貴子はテ　ブルに置いてあったミルクを入れスティックシュガで掻き混ぜる。

「ほら、なんだかんだ言っても大人ってのは子供より長く生きてる分、色々悟ってるわけじゃない？」

そんなことを口にする貴子の方がずいぶん悟っているように見える。

彼女はまだ十四歳。いささか落ち着き過ぎているというか、かな

り自分を押し込めた悩み方をするものだ。

「でもね、私はどうしてもお母さんの考え方には付いていけないのよね。これって若さ故の理解力のなさっての？てか、ぶっちゃけ私が間違ってるのとか思っわけ」

「ふん」

それまで黙って聞いていたシンラ博士が鼻を鳴らし、そして貴子に言葉を叩きつける。

「ガキが物分かりいい振りするなっ！」

突然の叱咤に、しかし貴子は驚くでもなく怒るでもなく、真剣な眼差しで博士の言葉を受けとめる。

「大人がガキを保護する義務はあっても、ガキが大人の言いなりになる義務なんぞない」

「うん」

「ガキは所詮ガキだ！バカのくせして生意気で、間違っただけで他人に尻拭いさせるクズ。だが、そんなガキが明日の社会を築いていく貴重な人材であることもまた事実。だからこそ大人がガキを守り、育んでいかならんが、正論をぶつけて理解するようならガキはガキではない。故に全ての大人はガキが憧れを抱き、その目標にするような人物になる義務がある」

「なるほどね」

即ち、子供が自ら大人の指示に従いたいと思わなければ、それだけで大人の責任になるということ。

それは極論ではあるが一つの結論である。

「先生は今年で二十歳よね？先生はそんな大人になれると思う？」

「なれんな」

きっぱりと言う。

恐らくそれは人間としての強さの究極。その域に達するものなどそうそういるものではない。

そして「第二次性徴不全」という大人になれない体を持つ博士にとつて、とてもそんな極致に辿り着けるとは思えなかった。

「私もそんな大人にはなれそうにないわね」

苦笑いを浮かべる貴子。

博士はそんな彼女を厳しく見据えて言う。

「だが、匙を投げるわけにもいくまい」

「そうね」

「全力を尽くす。守るべき者のために」

「……………」

貴子は少しだけ肩の荷が下りたような気がした。と、同時にほんの少し寂しい気持ちになる。

博士の『守るべき者』は決して自分ではありえないと。

「どうしてあなたはお母さんの言うことが聞けないの！」

響く鉄巴の怒鳴り声。それに負けじと彼女と対峙する貴子も声を張り上げる。

「私にだって自分で考える権利があるわ！行きたい高校ぐらい自分で決めたっていいじゃない！？」

「あなたは将来、クロガネを背負って立つ人間です。そのための英才教育が必要だといってるのが分からないの！？」

「なによそれ じゃあ私は会社のために生まれてきたの？それじゃあ単なる道具じゃない！？」

「そうよ、あなたはクロガネのために生を受けクロガネのためにここまで育てられた。そのことをもつと自覚しなさい！」

薄々は気付いていた。気付いていたが 実際に面と向かって実の母親からそんな言葉を浴びせられ、貴子はショックを覚えずにはいられなかった。

やがてその衝撃はどす黒いもやもやとしたものにならっていく。
「おかしいよ…………お母さん 。お兄ちゃんが駄目だったから、健康な精子買って…………私のこと操り人形にしたて…………」

貴子は所謂試験官ベイビ だったのだ。総司が健康体でないこと

が分かり、跡取りとしての価値を押しつけられる形で彼女は生まれた。

だからこそ兄には自分の大切な気持ちさえ譲ったのだ。

「人を人だと思わない。家族でさえ道具と言う　　そんなんだから、お父さんはお母さんに絶望して出ていったんじゃない！」

「っの！」

バシンっ

巴の平手打ちが貴子を襲う。強烈な一撃だったがそれでも貴子は怯まず、牙を剥いたような視線を巴に向けた。

「くっ」

「あなたは何なの？」

不快さに巴の顔が歪んでいく。

「……………」

「あなたは何様のつもりなの？今日まであなたを育ててきたのは誰？この私でしょ？」

「……………」

「そんなに私の言うことが聞けないなら……私が気に食わないなら、この家から出ていきなさい！そしてあの男のように何の価値もない人間に成り下がればいいわ！？」

全てをぶちまけ巴は踵を返して貴子の前から去っていった。

「価値が　　価値がないのはあなたよ、お母さん」

鉄貴子が勘当されたというニュ　　スは立ち所にアカデミ　　内に広まった。

「先生、私これでよかったと思う」

「そうか」

旅立ちの見送り。結局、貴子は父に　　厳密に言うなら総司の父親に引き取られることとなった。

「お父さんは優しい人だったから、血の繋がってない私のことも本

当の娘として接してくれてたし」

「ああ」

総司の父のことはシンラ博士もよく知っていた。確かにあの人は総司も貴子も別け隔てなく可愛がつていたし、半ば巴から追い出されるように家を出ていった今でも総司のことを気に掛け博士に便りを求めている。

「でも気掛かりなことがあって」

貴子は俯く。

「私、ずっと思ってた。私はお兄ちゃんの体が健康じゃなかったから生まれることが出来て、だからお兄ちゃんには一生頭が上がらないって。お兄ちゃんのために出来ることはなんでもしようって」

「……………」

「それなのに今更自分だけ自由を手にしうとしてる。逃げ出してる。本当は先生のことだつて欲しくて　　ずっと好きだったのに自分の心圧し殺して　　先生の心、独り占めしてるお兄ちゃんのとが憎くて憎くてたまらなかった。　　いっそ消えてくれればいいのにつて何度も何度も　　最低な、浅ましい女なんです。私」

「……………」

博士はいつものように眉間に皺を寄せて貴子を見上げる。思えば疾くに身長を追い抜かされていた。

「安心しろ」

「っ!？」

「わしはどんなことがあるうと、お前より総司のことを第一にする。総司のためならどんな犠牲も厭わない。そんな最低で浅ましい男だからな、わしは」

氷解する。貴子の瞳からはらりと涙が零れ落ちた。

突放され、きっぱりと振られたのに不思議と心は軽かった。

きつとそこに優しさが見えるから……痛いほどの思いやりが。

「先生　　ありがと。お兄ちゃんをよろしくお願いします」

引きつった笑みを作り、そして貴子は背を向ける。

別れの挨拶はない。『さよなら』を言えば寂しく、『また』を言えば嘘のように聞こえるから。

やがてエントランスを抜け、彼女の姿は見えなくなる。それでも博士は彼女の進む道を射るような目付きで見続けた。

「アレ、シンラじゃない？」

端から見れば茫然と立ち尽くしているように見える博士の背中に同期の青柳めぐみが声を掛ける。

「どうしたの？こんなところで」

「……………」

「あつそつかお嬢さんが」

「……………」

博士は彼女の存在自体を無視してその場を後にした。

「そんなに」

青柳は奥歯を噛み締める。

「そんなにあの兄妹がいいの！？」

その顔は絶望にも似た憎しみに歪んでいた。

数日後、シンラ博士はクロガネグル プ会長であり、アカデミ

の代表取締役である鉄巴に呼び出される。博士がそれに応じ応接間に顔を出すと、そこには巴の他に俊彦とジンの顔触れがあった。

「患者の場合、生れ付き　つまり、遺伝的或いは原因不明による腎不全の傾向にあり、合併症として再生不良貧血や多発性筋炎症

候群などの

俊彦が総司の病状を読み上げる。

話は単純であった。巴の後を継ぐはずであった貴子が去ったために空いた穴を総司で埋めるべく、彼をある程度動かせるようになるまでに回復させよとのこと。そして博士が呼ばれたことを考えればおよその流れは定まってくる。

「抜本的な治療として骨髄移植、腎移植を提案しますが、患者は過去二回の腎移植が失敗に終わったという経緯があります」

二回の腎移植、その内最初の一回目は父親からの提供だったのが失敗に終わってしまった。生体腎移植に高い成功率を誇る現代においては異例のことではあった。

「原因は不明ですがHLAになんらかの要因が見られること、患者の現在の容体を考えますと同種同系移植が好ましいわけです」

同種同系移植 同一の遺伝子を持つ他人つまり一卵性双生児からの移植をいう。だが残念ながら総司には双子の兄弟などいない。俊彦からジーンに話が引き継がれる。

「そこでまず、患者の強化クロンを制作することを私は提案します」

「.....」

「患者の遺伝子をデータ化し、スパコン上で補正した遺伝子を再現する」

「その遺伝子データをを使ってキザンで強化クロンの受精卵を作り出すか」

全てはシンラ博士が前々から用意していたシナリオ。キザンを世に解き放つよう俊彦に唆された日から描いていた。

「それで、わしが開発しとるキザン培養槽がいるか」

キザン培養槽こそ後に人造人間の母体となったAU（人工子宮）の原型となるものである。

「はい。アレは生物単位での培養を視野に入れられていたものようでしたから、人工的な子宮としての役割も担うことが出来ると踏みました。開発はどの程度まで進んでらっしゃいますか？」

「すでに動物実験は哺乳類の段階まで成功しとる。だがその強化クロン、幹細胞による部分精製というわけにはいかんのか？」

クロン人間制作など完全なる国際公約違反だ。

博士の提案に、しかしジーンは首を横に振る。

「部分クロンに関してはまだ実用段階に至っていません。仮に博

士の培養槽によって成功できたとしても、それを患者に移植するのは早計ですし――

依頼人から急かされていることも要因であった。その当人である鉄巴が口を開く。

「倫理だかなんだか知らないけど構うことはないわ。ここで身元不明人が一人や二人出てきたところで問題ないでしょ？ここはそういう場所なんだし」

巴はいささか嘲笑めいて唇を歪ませる。

孤児を集めることに對して、利害以外のなんの感情も存在しないと物語っていた。

そして一行は総司の病室を訪れ彼にことの次第を掻い摘んで説明した。

「えっ？」

総司の表情になんらかの喪失が色濃く現われる。

「総司、よかったわね。健康になれるのよ、あなた」

巴のその祝福は柔らかく優美なさまを見受けられるが、しかし誰一人としてそれからいたわりという愛を感じ受けるものはいなかった。

当然である。これまで彼女が総司のもとを訪れることなど殆どなかったのだから。

「僕は――」

健康な体になる。それは確かに総司の願いではあった。だが実際にその実現を目の前に突き付けられたとき、彼の中に様々な不安が込み上げてきた。

そして、その不安の中でも大きく心を占拠しているものは――。
「先生……」

総司は巴の後ろに立っているシンラ博士の顔を見る。博士は相変わらずの表情で、総司の顔を見つめている。

「僕は――」

恐らく不幸な身の上だ。自分がそうなのだと思います、世界――

不幸であるといえるだろう。それは同時に万人の同情を得るための力ともいえる。

先生だって……。

「いやだ」

「なんですって？」

「いい……僕、健康なんてならなくていい。このままで十分だ！」

総司は堅く目を閉じて叫んだ。

「あなた、何言ってるの!？」

それまで曲がりなりにも穏やかだった巴の態度が180度引つ繰り返った。これでもかと思うほどヒステリックに総司に迫る。

「世界の最高峰の先生方があなたのために知恵を絞ってくださってるのよ!一生使いものにならないはずだった自分が、立直るチャンスを与えられていることに」

「」

総司は母親からの罵倒を心を閉じるようにして歯を食いしばって甘んじている。なぜならそんな侮辱よりももっと恐ろしいことがあるから。

「自分がどれほどの人間かこれまで生かされてきて」

「黙れっ!？」

母親の癪癪を止めたのはシンラ博士の雷であった。巴は驚き後ろを振り向く。

「総司と二人きりで話がある。皆出ていけ」

「」

憤怒か侮蔑か、巴の視線が醜く歪む。それを博士は睨み上げきっぱりと断言する。

「貴様、何か勘違いしとらんか!？」

「なんですって？」

「キザンはわしのものだ。クロガネのものでも、まして貴様のものでも毛頭ない」

『キザン』はそのまま『総司』と置き換えできるような感も含ん

でいた。

「……………」

巴は激しい歯軋りをする。

馬鹿にされた話だと感じつつも、経営者よりも一才能のある人員の方が会社にとっての価値は高いことを彼女は重々承知していた。

故に、腸の加減はさておき巴は黙って病室を後にした。俊彦とジーンも『失礼します』とだけ付け加え彼女に倣った。

「先生、怒ってる？」

総司は消え入るような声で訊ねる。

「怒つとらん」

博士はいつものように、少しだけ怒っているような語気で答えた。総司は外方を向く。博士は近くにあったパイプ椅子に腰掛ける。

「……………」

そのまま沈黙が数十分続いた。

やがて博士はぼそりと零す。

「初めて会ったときのことを思い出すな」

それを聞き総司は博士の方に顔を戻す。絶るような表情で。

最初の出会いは十一年前 シンラ博士が十一歳、総司が九歳のときだった。

その頃から病床に伏せていた総司を不憫に思っていた父親から息子の友達になってくれるよう、博士が頼まれたことが切っ掛けである。総司の父と懇意な間柄だった博士は煩わしく思いつつもそれを承諾した。

そして総司の病室を訪れるも生来の人間付き合いの不器用さから、ただただ今のように仏頂面で黙りこくるに止まってしまっのだった。数十分間黙り通した挙げ句暇も告げずに立ち去ろうとした博士。

しかし、その背中に総司から思いもよらぬ言葉が掛けられる。

『また、訪ねてきて欲しい』

自分の何がどうして、また会いたい気持ちが起こったのか博士には理解できなかった。それからというものの、それを知りたいという

好奇心から博士は度々総司のもとを訪れるようになっていった。

そうしていく内に総司とは徐々に親しくなっていくものの、疑問に対する答えは見つからず、しかし博士の中に和む気持ちだとか楽しむ喜びだとか、他では得難い尊いものを育むときとなっていたのだ。

「先生」

総司の瞳にじわりと滲む涙。

「先生は僕のこと同情してるだけ？」

「……………」

「僕、先生を失うくらいならいっそ」

「馬鹿野郎」

総司の口が塞がれる。

「っ!？」

博士の小さな唇で。

それが博士の出した総司への精一杯の答えだった。

「シンラ博士は幸せものですよね」

ジンと共に研究室に戻ってきていた俊彦はぼやくように呟いた。
「どうして？」

「だってさ、こういつちゃあなんだけど、博士は性愛も持てない体で、心も頑なに、唯一の人から掛け替えもなく愛されているんだもん。まあそれは総司さんも似たようなもんだけど」

そう言っ俊彦はジンに笑顔を向ける。

彼ほど自然な笑顔を作れるものを彼女は知らなかった。

「……………」

ジンはいつときの間考え込んでから、

「トシだって愛されてるわ」

と照れ臭そうに言った。

一九年前

この年、俊彦が一八歳の誕生日を以てジンは彼のもとへと入籍をした。式は上げなかったが、その日より幸せを約束した結婚生活が始まりを迎えるはずだった。

そして、その年の末にキザンを用いた総司の強化クロン人間が誕生する。

キザンの培養はその分裂の速ささえ、ある程度の操作が可能であり、二年程で健康な成人体を精製することに成功した。

頃合を見計らい、総司の移植手術が行なわれる。手術は見事成功しその経過もまずまずであった。

程なくして総司のリハビリテーションが始まる。想像絶する苦痛が総司を襲う。何しろ人生のその殆どをベッドの中で過ごしていたのだ。そのツケを払うには、並みの精神力では及ばぬものであった。シンラ博士はそんな総司を特別大げさに励ますでもなく、いつものように眉間に皺を寄せ傍らから見守るだけだった。それでもその眼差しは総司の闘病魂に消えることのない炎を灯らせる。

それから半年の月日が流れた。

「うわっ」

両腕に金属性の杖を填めて歩行の訓練をしていた総司。その途中で杖を滑らせ思いつきり転んでしまった。

「総司。あまり根を詰めるな。休憩しろ」

端から見守っていたシンラ博士は総司の体調を考慮し休息を進める。しかし総司は俄然張り切り声を上げ、

「まだまだあ！僕、先生をお姫さま抱っこしてあげられるようになるまで絶対挫けないもん！」

訓練を再開させる。

総司の発言を聞いた周りの看護師などは失笑していた。

さすがの博士も恥ずかしさを覚え、蟀谷をポリポリ掻く。

その折り博士のポケベルが鳴る。見るとジンから研究室に来て欲しいとのことだ。

ジンは今日、俊彦共々休みだったはずだが。

「総司、用ができた」

「え〜！」

博士の言葉に総司は口を尖らせる。

思えば総司も昔に比べてずいぶんと自分の我を見せるようになった。心身共に健全に向かっている証拠であろう。

「埋合わせはする。我慢しろ」

そして博士は総司に耳打ちをする。

「今度、また口でしてやるから」

「うっ」

総司は耳の先まで真っ赤にしてすっころんだ。

シンラ博士が研究室に到着するとジンが待つてましたと寄ってくる。

「どうした？」

「博士……」

注視するとジンの顔は酷いものだった。いつもの大人びた美しさは形を潜め、打ち拉がれた疲れがその割合を締めている。

「私」

彼女のその声もその体も絶望に震えきっていた。

「私、子供が産めない体」

「なんだとっ!？」

「この一年間、普通に性生活を送って来たのに子供が出来なかったから 自分で調べてみて」

通常、避妊をしない場合一年以内に85%は妊娠するといわれており、その期間を過ぎても妊娠しないのであれば不妊症の疑いがある。てくる。

「卵 異常が」

とうとうジンは泣き崩れる。

「俊彦は 俊彦には相談したのか？」

「言っていない 言えません！」

「……………」

「あの人 私との子供切望してるのに。あの人の愛を疑うわけじゃないけど、トシはもともと家族が欲しいって それで……私のせいで子供ができないなんて 言えない……怖い」

女性が愛する人の子を授かることが出来ないと分かったときの恐怖、屈辱、愛する人との営みを共に感じることの出来ない博士にとって、ジンの絶望は或いは共感に値するものだった。

「博士 キザンを使わせてください！？」

「……………」

このとき、全力で止めるべきだったのかもしれない。

それでも総司を救うために禁忌を犯していた博士にとって、その資格は存在しないように思えた。

スパ コンピュ タ 上でジンと俊彦の遺伝子をハイブリッドし、キザンで受精卵を作る。

ジンは二つの受精卵を自らの子宮に入れ妊娠する。この事実を知っているのは当人とシンラ博士のみであった。

そして俗に言う十月十日が過ぎた。

「ほら、元気な双子の男の子だよ！頑張ったね、ありがとうジン」

俊彦は自分の血肉を受け継いでいると信じて止まない子供たちの誕生に感涙し、ジンに猛烈な感謝を示した。

「名前、お兄ちゃんの方が樹東で弟が光冴だったね」

「ええ」

「ふふ、遺伝子学者のキミらしいというか、ちょっと変わった名前だけ」

光冴とは「交叉である。英語でクロシングオバ といい、細胞

の減数分裂の際に起こる遺伝子の組み替えのことであり、それが発生する部位をキアズマというのだ。

「この子たちは人類に到来する新しい風。世界に組み替えを起こすクロシングオバ」

「そっかぁ。なんか壮大だね」

俊彦は眠っている樹東の頬をそつと優しく撫でた。

「……………」

そのいとおしい光景はジンの瞳に冷たく映る。

幸せの絶頂にある俊彦は気付くこともなかった。

このときには既に、家族という宝玉に無数の亀裂が生じていたことを。

ジンの心の奥底を中心に。

一五年前

「ごめんなさいね。最近忙しくて、子供たち任せっきりで」

関家の食卓に久しぶりに家族四人がそろった。

帰宅時間がまちまちで中々育児や家事に助力できないジンは俊彦に謝罪する。

「いいんだよ。子供たちと一緒にいたいって言って休業取ったのはボクなんだから」

俊彦は甲斐甲斐しく樹東と光冴、交互にご飯を食べさせながら答えた。

「子供たちといると毎日楽しいよ」

もともと動物の世話などが好きだった俊彦にとって育児は遊戯にも同じで、医学に精通しこの上なく器用な彼にとってそれに伴う苦労はどこ吹く風であった。

「遺伝子的にはまったく同じなのに二人ともちよつとずつ個性があるんだよ。光冴の方が感受性が強いみたいでよく言葉を覚えてね。」

樹東は大人しいけど聞き分けがよく、しっかりしてるんだ」

「ペア」

樹東にスプーンで食べさせていると、光冴が俊彦の手を自分の方に持ってこようと手を出した。その拍子にスプーンが跳ねて樹東の顔に当たってしまう。それに驚いた樹東は泣き始めた。

「あらら」

俊彦は苦笑いを浮かべ、泣いている樹東を抱っこした。それを見て嫉妬した光冴まで泣きだしてしまう。仕方なく俊彦は子供たちを両腕に抱えた。

「子供は泣くのが仕事だけどね、笑ってるほうが楽しいよ」

そういつて俊彦は歌を歌いだす。

「『愛してる』って言うけれど

愛のカタチを

知ってる人はいない

『信じよう』って言うけれど

でも心、弱いから

伝えきれないね

だけどあなたがいつも

キラキラ笑うことができたなら

それがきつと愛

」

歌の途中で二人とも泣き止み、『だあゝ』だの『ぶう』だの言いながら俊彦と一緒に歌いだす。

「雪降る日はうれしくて

心、はしゃぐけど

せつないこともあって

まどの霜にうつるボクは

あの日のように泣いていた

雪がとけだして

だからあなたと二人

暖炉の前でこえたその手を

かさね暖めよう

「

子供たちはたった今、泣いていたことなど忘れたように父親の顔をうつとりと見上げている。

それを見ていたジンはまるで魔法のようだと思った。

「エクセレント！」

「まあ、歌がストレスを緩和するのはとくに実証されていることだからね」

それにしても、何か特別な力が働いているのだと思えた。

暫らくたってジンは俊彦に相談を持ち掛ける。

「少しの間、樹東を入院させたいんだけど」

「えっ！？何で？」

「前にあなたにも話したと思うけど、不妊のために結構無理したでしよ。それで子供になんらかの悪影響がなかったか、検査したほうがいいと思って」

「そうか 早めに調べて、何かあるようなら早急に対処をするべきかもね」

俊彦は樹東の検査入院を快諾する。

それが悲劇へのゴサインだと知る由もなく。

一二年前

俊彦がいつものように夕食の準備をしていたときのこと。光冴はお昼寝をしていて、樹東はテレビを見ていた。

俊彦は樹東がなんの番組を見ているのか気になり作業を中断させる。

最近、樹東の様子に微妙な違和感を覚えるようになっていた俊彦は少し神経質になっていた。というのも、やたらと利発になり、同い年の兄弟とは思えないほど光冴の面倒を自分から見ようになっ

ていたのだ。

「何を見てるんだい？」

樹東は公共放送の高校生講座を見ていた。

「ふふ、こんなの見てもわけ分からなくて面白くないんじゃない？」

「うつん。そんなことないよ。だいたい分かったし」

「本当かい？」

「うん。つまり、いっぱい死んじゃうような災害とかと、へんてこなのが生まれることを繰り返したことで、動物とかいっぱいいるってことでしょ？」

「えっ!？」

俊彦は我が耳を疑った。

特殊な教育を施していない普通の四歳の子供が『種の起源』のおよその内容を理解したことに驚いたのだが。

「でも、ボク思っただけでこれだけじゃヒトが生まれるのは無理なんじゃないかなあ。海で最初の命が生まれて、哺乳類が生まれるまで三十四億年かかってるんでしょ？それから二億年で人に進化。恐竜は同じ期間過ごしてもほとんど恐竜。新生代の進化はそれまでのものに比べて明らかに早すぎるよね。もしかしたら恐竜の絶滅のときに人の種みたいのがばらまかれたんじゃないのかなあ。ほら、ウィルスなんか宇宙から来たりするじゃない？それに似たものがあるんじゃないかって」

だからこそ、ヒトの進化にはある種の方向性があるのではないかいや、人は進化して生まれたのではなく先祖返りして誕生したのだ。

これはまさしくシンラ博士が子供の頃に提唱した『軌条進化論』そのままである。

「どうして

」

総司の強化クロン 名をコピペといった。

これは総司との人権の差を明確にするために鉄巴が名付けた記号

である。

「センス、センス」

シンラ博士がコピペのもとを訪れると、彼は赤ん坊のようにハイハイしながら博士に駆け寄る。

コピペは誕生から数えれば六歳になっていた。しかし、その見た目はほぼ成人のそれであり、逆に知能は三歳児並みにしか成長を遂げていない。

「センス、センス」

コピペは親にするように、博士の体に『キヤツキヤ、キヤツキヤ』とまとわりつく。博士は自分の体よりもずっと大きな彼をよしよしとあやすのだった。

「やはり知能の遅れは顕著ですね」

コピペの乳母が博士に言った。博士はコピペと玩具で遊びながら頷く。

原因ははつきりしていた。

人間の脳の成長率は成人と子供のそれとは比べものにならない程の差がある。幼児期を素っ飛ばして成人として成形されたコピペにとって、基本知識を身につけるピクは訪れる間もなく今に至っているのだ。

暫らくコピペと遊んでいると博士の携帯電話が鳴りだす。出ると相手は俊彦だった。

「久しぶりだな。子連れでもいいからたまにはこっちに顔を出せ」

博士の挨拶に俊彦は沈黙する。

「どうした？」

博士の催促に俊彦の震える声が耳に届く。

「なんだと!？」

博士は目を剥き、引き止めようとするコピペを宥めてから急いで研究室に向かう。

数名の研究員たちの中にジンの姿があった。

「あら、博士。お久しぶりです」

シンラ博士はこの数年、総司とコピペの世話と別の研究に時間を割いていて彼女の研究にタッチしていなかった。

「貴様っ！自分の息子に何をした！？」

博士はジンに詰め寄る。彼女は冷笑を浮かべ、ここではなんだからと人気のないところに博士を連れ移った。

「夫から何か連絡が？」

「そうだ！」

「何と？」

「分かつとるんだろう」

「ふっ樹東がお利口になったとでも？」

ジンは感情の希薄な笑みを浮かべる。

やはり博士の睨んだとおり、この問題の鍵はジンが握っていた。
「何をした？」

「実験です。キザンは生体として固定してからでも、後付けで成形可能ということが分かりました。そこで生理学者たちとチームを組み研究を。キザンを使った研究はそれまでとは比べものにならないスピードで生命の神秘を説き明かしてくれましたわ。それは脳髄も同じでしてね。そこでキザンを成形するパルス発生装置を小型化して」

「まさか、樹東の脳内にインプラントしたのかっ！」

博士の難詰にジンは笑みで答えた。

「パルスは脳髄の発達を促すものと、特定の対象物を補助しようと思えるものを」

つまり樹東が光冴の世話を焼き始めたのはこのため。

「貴様っ！自分の子供を 命をなんだと思ってるんだ！？」

「だから双子を作ったんです。トシの子供としての光冴 私の実験のための樹東 対照実験としても丁度いいですし」

博士は愕然となった。目の前にいる女はもはや狂人と化している。
「まあそう怒らないでください。この技術はコピペにも応用できるでしょ？あの哀れな子にも」

「哀れだと？」

「アレを哀れと言わずに何というんですか？人権を剥奪され、成人にも関わらずその知能は赤ん坊並み」

「勝手なこと吐かすな！？コピペのことなら大きなお世話だ。どんなに時間が掛かって、わしが総司共々立派にしてみせる」

博士の啖呵。

だがジンは怯むことなく嘲笑を携えたまま言い放つ。

「ふふ、時間を掛けて？そのお体ですか？ご自身の体のことですか？お分りでしょう？」

「うぐ」

「細胞の異常活性 たとえどんなに小さな病巣でも、できようものなら一瞬にして体中蝕まれる。綱渡りの上で生きているようなその身で時間を掛けてですか？」

博士の顔が歪む。それは博士自身が一番気に掛けていたこと。自分はいつ死んでしまってもおかしくない体であり、身の上だ。だからこそ、禁忌を犯してでも総司を一人前にしたかった。

そう、一人でも生きていけるように。

「お前は何かしたいんだ？それは自分の子供を犠牲にしてまでするべきことか？」

「プロジェクト・クロシングオバ」

「クロシングオバ……」

キアズマ、そしてコウサ。最初から、子供の名を付けたそのときからもうすでに。

「もう、女が子供を生み、人間が人間を育てる時代は限界に來ています。そんな不完全なシステムだからこそ、人の中に不幸の種は尽きることはない。だから、生まれたときから社会規範や優れた知能を持ち、健康で人に優しい心を持った新しい人類のカタチを作らなければならいんです」

「それが本音か？」

全ての命に対する宣戦布告。

新人類創造。

それは現行人類の自然的なり長期的なりの淘汰を意味する。

「私の作った人類が目的の国を実現化することも夢じゃないですよ」

『目的の国』

人格の尊厳を主目的とした人類究極の理想社

会。民主社会の基本的理念であり、しかしその完全なる実現はあまりにも非現実的。その流れにある種のファシズムが先行してしまうのも仕方がないのかもしれない。

だが博士の考えは違った。

「お前は間違つとる。幸せに明確なものを求めること自体愚考であり、そこにカテゴリ を作ることはすでに不幸の始まりだ。そう、人は不完全だからこそそこに可能性を見いだし進歩する生き物だ。その中に身を投じる群れに共感という概念があるからこそ幸せが生まれ得る。知力や道徳や能力の違いでは断じてない。そこに触れ合える感情があることが重要なのだ。お前の言う通りコピペは能力や生い立ちを考えれば確かに哀れかもしれない。それでもわしに触れ、笑顔を向けてくれるコピペは決して不幸ではない」

「だったらなぜ博士はコピペを作って、総司さんを救ったんですか？」

そう問い掛けるジ ンの瞳には、いつの間にか涙が滲んでいた。彼女自身、その問いの答えも、博士の言わんとしていることも重々承知の上だった。

それでも彼女は人類の尊厳を踏み躪る道を歩むことを決断したのだ。

「それは」

「結局、詭弁振り翳してるだけじゃないですか」

「.....」

『詭弁を振り翳すなら、わしのもとから去れ！』

それはかつてキザンの是非を俊彦と問答したとき、博士が彼に放った言葉。それを今、俊彦の妻であるジ ンに突き返されてしまった。

「もう止められませんか」

ジンは博士を睨み下ろす。

「これは博士がキザンを　いえ、ベリ　ナノクレイシユ理論を
ひも解いたそのときから決定された運命なんですから」

「お前、まさか　」

その次の日、自室よりトルシンラ博士の刺殺体が発見される。
同日、ユジンは新方式の脳髄スキャナの人体実験で自らが
被験者になるも失敗。植物状態に至る。この事故は作為的なミスの
誘発があるのではないかと仄めかされる。

これらの事象と同時に行方を晦ませた青柳めぐみになんらかの関
与があるとみて警察は捜査するが今日まで何の進展もない。

その後、警察の介入によりアカデミの非人道性が露呈し解体に
向け話が流れる。

数年後、鉄巴の死去とともにグルプ会長に就任した総司の手に
よって、アカデミはそのまま社団法人シンラ研究会と名を代え、
ほぼその実情は変わらぬまま存命した。

つづく

キル

キル

トルⅡシンラが死に、ユジンが廃人になった経緯で、関俊彦はその後釜として研究所に復帰することとなる。

彼はそこで真実の断片を知った。

「そんな、樹東がキザンで作られていたなんて　しかも、マシ
ンインプラントっ!？」

何故そんなことが起こったのか、俊彦には知る術はなかった。

事実を明確に把握している二人はもう喋ることが出来ないのだから。

「何故？」

混乱する頭で俊彦は帰宅する。

正直な話、どういう顔で樹東と接すればいいのか分からなかった。血肉がキザンとはいえ、遺伝子的には自分のものが使われているのだから樹東は自分の子供なのか？マシ　ンインプラントでどの程度操作されているのかは分からないけど、脳を弄くられて果たしてそれは人間なのか？

「お父さんお帰りなさい」

「あっああ」

樹東からの出迎え。彼は現在とはまったく異なり快活な笑みを浮かべている。

「疲れたでしょ？今日ね、ゆうちゃんちのお母さんにご飯の作り方ならって夕飯、僕が一人で作ったんだよ。お父さんお仕事大変だろうから、家事はなるべく僕がやるうって思うんだ」

「そう」

肉じゃが、味噌汁、ほうれん草のお浸し。食卓に並ぶそれらほとても幼稚園児が作ったとは思えない出来栄だった。

これがキザンとマシ　ンインプラントの力か。

「光冴、ただいま」

俊彦は奥の部屋に引っ込んでいた光冴に挨拶する。しかし、光冴は返事もせずに外方を向いた。

「光冴の奴、すねてんだよ。お父さんが急に働かなきゃならなくなつたから」

「……………」

「でも、心配しないで。光冴の面倒は僕がちゃんとみるから」

「……………」

孤独　。

樹東は不誠実な支えによつて、一人どんどんと力を増大させていく。

光冴は自分から冷たく目を逸らした。

初めての挫折。

相談する相手はもうどこにもない。

寂しい　　寂しいよ……。

「お父さん、ご飯食べよ」

「ああ」

かくて陸上の獅子は大海に溺れ、海原の鯨は陸に打ち上げられた。

自分が『人間ではない』ということは薄々感じていた。あの日、光冴の姿をしたクロシングオ　バ　と暮らし始めたときから。

それでも父が自分を必要としてくれていると、たとえ人間でなくとも家族だと言ってくれるのではないかと仄かに期待していた。

本当に微かな希望として。

「お前が人間じゃないからっ!？」

俊彦の言葉の一つ一つが樹東を支配していく。

そして今の一言は強烈に彼を締め付けた。

「クロシングオバは壊れてはいなかったんだ。お前が人間じゃないことに気付いたから」

「そうか、人じゃないと判断したから制御のいろはである三原則に引つ掛からないと」

高木の納得は樹東のみならず、その後にしたゆうや青木にも衝撃を与える。

「お前はジンが作った人造人間なんだよ」

「……………」

「そしてジンも……光冴も……お前がボクから奪ったんだ!」
樹東は俯く。父の辛辣な言葉を全身で受けとめて。

「そう……だったんだ……」

自分がいたから父さんは帰ってこなくなった。

光冴を追い詰めることになった。

郊外にある廃ビルに飛び込むクロス。そこに遅れて白い軽トラが派手な音を立てて飛び込んできた。

「いやはや、おあつらえむきなこって」

運転席から下りてくるコピペ。その左手には日本刀が握られていた。

「銃火器はどうも苦手ですね」

そう言うコピペは刀を抜き放つ。

「じゃん!神父のコスプレに日本刀ってタランティノ映画みたくてかっこいいしょ!？」

「あんた」

あくまでも軽い風潮を崩そうとしないコピペに対し、クロスは声を震わせ問い掛ける。

「何がしたいの？」

「……………」

「いきなり出てきてさあ 訳分かんないこと言ってきてボクを混乱させて…… あげく大暴れって、頭おかしんじゃないの？」

閑散と広がる廃ビルのフロア にクロスの怒号が響く。それを受け、コピペは少しだけ笑みをひそめる。

「でも、答えは出たんだろ？」

穏やかな口振りだった。まるで水面の木の葉を優しく揺らす風のように。

だが、

「答え…… お父さんもお兄ちゃんも誰もお前のこと必要としていないことに気付いたんだろ？」

その意味するところはクロスの張り詰めた心という水面を大荒れにするには十分だった。

「糸が切れた人形はごみ箱行きだ」

「自分だって用済みの人形のくせに」

「……………」

ここにきて完全にコピペから表情が消え失せる。

「ここまでは予定通りだ。派手に暴れて奴らがどう動くか見極める……だが、オレにも思うところはある」

「?」

「私怨だよ。お前をいじめる理由」

コピペは持っていた刀の鞘を床に投げ捨てた。カラカラと乾いた音が虚しげに響く。

「お前の言う通り既にオレは用済み。人形といえば最初に造られた人形だ。そしてコピペなんてふざけた名を与えられ、十年近くも幽閉されてた」

「……………」

「一方、お前は光冴の死というアクシデントによって、生まれてすぐに外の世界に出された。そして何よりクロシングオバ ……ク

ロスという名は異世界を救った誇るべき勇者の名前　　- お前
たいなガラクタには不釣り合いだ」

いつときの静寂　　。

そして、

「殺すっ！お兄ちゃんもお父さんも、みんなみんないない
でも、一番最初にお前を殺すっ！！」

「そうだ　　お前も樹東も……そしてオレもこの世界には必要な
い　　だから殺し合おうぜ！ガラクタはガラクタ同士よっ！！」
人ならざる者どうしの戦いが始まる。

樹東の声は哀しげにも、しかしどこか微かに笑っているようにも
聞こえる。

「オレが全部悪かったんだ」

「キキ」

『そんなことない』　　そう言ってあげたかった。しかし立て
続けに曝される衝撃の事実にようは彼の名を呼ぶことしかできない
でいた。

「ごっ……ごめんなさい　　」

「キキっ！？」

樹東は謝罪の言葉を残し、エレベ　タ　へ駆け込む。

ゆうが追い掛けようとしたときには既に扉が閉まっていた。

上っていくエレベ　タ　の駆動音が誰かの嘆きのように聞こえる。
やはり、樹東の手が父に届くことはないのだと。

最初に動いたのはコピペだった。弾けたように一気に間合いを詰
め、クロスに刀を振り下ろす。

「くっ」

クロスはあの驚異の跳躍でそれを躲す。およそ十メ　トル近い間

合いを確保することに成功した。

やはり身体能力でははるかに自分の方が上だ。

そう確信した瞬間、

「なっ!？」

コPIPEが目の前に迫っていた。再びクロスを捉えようとする刃。

クロスはギリギリのところまで跳躍してそれを躲す。

だが、またしてもコPIPEは自分に追い付いてきた。

しばらくの間、ギリギリのところまで躲し続けるという回避戦が続く。

どうということだ？

クロスの目にはコPIPEが瞬間移動でもしているようにしか写らない。

「どうということだっって顔してるな？」

好戦している中、コPIPEが余裕に口を開いた。

「お前の考えている通り、確かにお前の身体能力はオレのを遥かに超えている」

「くっ」

その間にもコPIPEの猛攻は続いている。

「オレを一とすればお前は十。剣道三倍段に当てはめても到底届かない」

「……………」

「じゃあ、なぜ身体能力で遥かに劣るオレがお前と対等に渡り合えているのか……それはいくら優れた身体能力を持つとも、人間の形をしている以上動きのパターンはおのずと制限されるからだ」

「っあ!」

コPIPEの刀を寸でところで躲しクロスは突きを繰り出す。軽く肩を振っただけで200キロ以上の球速をもたらす筋力、その拳を食らえばただで済むはずがない。

だがコPIPEは、

「ふっ」

「っ！？」

クルツと体を回転させクロスの突き避ける。更にその動きの延長でクロス目掛けて刀を薙いだ。

「くっ」

また、あの驚異の跳躍で辛うじて避けることはできた。しかし、少しだけ反応が遅れて脇腹を薄く切ってしまう。

そして、またコピペは自分に追い付き　いや、違う！

「動きが読まれてる！？」

「ピンポン！ご名答。普通に考えればオレがお前に追い付けるはずがない。でも、フライングすりゃあハンディ　キャップってな」

「ちい」

「オレには肘や膝の動きでお前の次の行動が手に取るように分かる」
クロスが跳躍する寸前にコピペはクロスが着地するであろう場所に既に向かっているから追い付ける。

「ついでに言うならお前はジャンプして立体に動いているが、オレはすり足で地面に平行して動いてる。その立体的に生じた距離の差がそのままタイムラグになっているんだよ」

「……………」

経験と技術力の差。この差が身体能力の差をゼロ以上に押し上げている。言うならば格闘センスだ。汎用に作られたクロスにそんなものはインストールされているはずがなかった。コピペとて人格移植A.Iの技術が確立されていなかったゆえ、それは死ぬような修練の末手に入れることができたもの。

既に勝敗は目に見えていた。

だが、

「つうあああああ」

コピペの刃がクロスの喉元に迫る。

「？」

一瞬、ほんの一瞬クロスが微笑んだように見えた。
そしてクロスは小さく上に跳ぶ。

グシュ

刃がクロスの腹を突き破る。

決まったと勝利を確信したとほぼ同時に、コピペの脳裏に焦りが過った。

刀が動かないっ！

クロスの腹から抜こうとしている刃が微動だにしない。信じられないことだがクロスが突き破られた腹と腹の間にある筋肉で締め付けているのだ。

「やっ」

やばいっ！

そう思ったときにはもう遅かった。

「ぐえ」

クロスの放ったフックがコピペの下顎にクリンヒットとする。

「」

声も上げられず、強風に舞うボロ布のように吹っ飛ぶコピペ。地面に落ちてもその勢いは衰えず、引きずられるように地面を転がった。

「あうあ」

辛うじて首は折れていない。だが、意識はあるのに体が動かない。脳が激しく揺すぶられ機能障害を起こしている。

「長々解説ありがと」

クロスはそう言うのと、自らの腹に突き刺さった刀を抜く。

「鬱陶しい蚊は血を吸わせている最中に叩きつぶせばいいよね」

深緑の緞帳で隠れているが、恐らく土手っ腹に開いた風穴は既にクロスの驚異の回復力によって塞がっていつていることだろう。

その性能とそれに対する絶対的自信が全ての能力値をちゃらにした。

そう、クロスにとって刀で刺されることなど蚊が血を集めている程度のことなのだ。

「確かに日本刀ってかっこいいよね」

クロスは血糊でべったりとなつた日本刀をブンブン振り回しながら目を輝かせる。

「えへへ」

クロスが躍り寄ってくる。未だコピペの体は自由が奪われたままだ。

「さよおならあ」

「あゝあ」

ここでゲムオバか……死を迎えるにはあまりにも軽薄な覚悟をコピペが決めたとき、クロスが大きく横に跳んだ。

「？」

ペチャペチャ

コピペの顔に赤い血が数滴落ちてきた。

「ちっ逃げられたわね」

既にクロスは姿を晦ませていた。

代わりに現れたのが、

「ごきげんよう、お人形さん」

サイレンサ 付きの武骨い拳銃を手にしている松雪貴子だった。

「わああ。トカレフとかならいざ知らず、Mk23なんて一介の記者がどうやって手にいれたんだ？」

それはどこその軍隊が使用しているような拳銃である。

「うふ？ パパにおねだりしちゃった」

貴子にはっこり笑うと拳銃をコピペに突き付ける。

「おい。やめろよう。オレ、遺伝子的にはお前の兄ちゃんだぞ」

「あら、生まれた順番からすれば私の方がお姉さんよ」

「そうだけどさあ」

コピペは動かない体の代わりに不貞腐れたように目を横に向ける。

「あなたに二・三聞きたいことがあるんだけどよろしくって？」

「どうぞ」

「広田議員を殺したのはあなたね？」

「そだよ」

コピペはあっさりと認めた。

「看守に変装して飯に検出されない毒をね。ただの心筋梗塞にしかみえないの」

「理由は私への当て付け？それとも広田議員がわりと永田町の顔で彼が色々喋ると困る人がたくさんいるからかしら？」

鉄総司が政界にその力の網を張り巡らせているのは明白な事実。

そしてコピペはまたしてもあっけらかんと自供する。

「ご明察だよね。でも、もう一つ理由がある。昔日の恨みがあるのだよ」

「恨み？」

「そう。アカデミの創立。あれには色々と裏があるんだけどね。まあとにかく、そのときに色々と根回ししたのが広田だったってわけ。あんなくだらないもの創った奴には、それ相応の罰を与えなくちゃね」

「……………」

確かにアカデミの創立がそもその元凶とも言える。あの地獄を平気な顔をして創った大人たちを許せないという気持ちも分からないではない。それに裏があるというなら尚更。

「じゃあ次の質問　関光牙を殺したのもあなた？」

「冗談よせよう。確かにオレはコスプレと殺しが趣味だけさあ。

いや、カラオケとゲセンも趣味だな。あと映画とかアニメ見るのも好きだし……」

「中々、多趣味なお人形さんね」

「とにかく、オレじゃない。第一オレ、トシちゃんに頼まれて光牙のこと隠れてボディガードしてたんだぜ」

「トシちゃん」

関俊彦のことか？

「そつ。そりゃ何年も監視してりゃあ情も沸くってmondar?それがさ、あのときたまたまダチの子供預かってて、ちょっと目を離した隙に殺られたんだ。こっちもまじム力ついてんの」

「……………」

どこまで信用していいものか。
本当の嘘つきはほとんど嘘をつかない。真実をちらばめてその中に嘘を潜ませるのだ。

さて、この場合どうなのだろうか？見極める手段は今のところない。

「じゃあ最後の質問　あなた、先生の死の真相を知ってるの？」

「おっ確信だな？それがあんたの求めてる真実か」

「……………」

そう、それが私の求めている獲物。この数年間、霧を払っても払っても届くことのなかった。

そもそも、トル・シンラという人間が生きていたという記録自体が存在しない。彼の死は書類上なかったことなのだ。しかし彼は確かに存在していたし、彼の遺した功績は現代科学の基礎として伝説になっている。

謎……。まるで世界中がグルになってトル・シンラを神祕の産物に仕立てているような。

「半々だな。知っていることと知らないことがある」

「あなたが私に伝えたいことだけでいい。教えて」

「謙虚だね……。まあ知ってること自体それほど多くないんだ。た一つ言えることは、ある大きな組織とそれを後から系引いている大きな流れが存在しているということ」

「まさかっ!？」

貴子はハツとなる。

「そう、その組織の名は『アシミレイト・ハラル』　あなた
の後ろ盾だよ、お姉ちゃん」

「くう」

貴子は頭を抱える。

それが事実とすれば自分はとんでもないピエロだ。仇とも知らずにそれに加担していたのだから。

「ふふ」

貴子は薄笑いを浮かべてコピペに背を向ける。

「これからどうすんの？」

「とりあえず、今住んでるところを引き払うわね」

とにかく今は身を隠すのが最優先だ。自分が真実に癒着したと奴らに気付かれる前に。

「お兄さまによりしく言つといて。あなたの妹は最後の最後まで愚かを貫き通しますってね」

「ういっす」

貴子は振り返らずに去っていった。

「素敵な人だよね」

「そうだな」

どこからともなく声がした。そして少女がコピペの横に現れる。まるで透明人間がその効果を切らしてしまったかのような出現のしかた。

「大丈夫？」

少女は心底心配そうにコピペに訊ねた。

「うんにゃ、ダメ。頭揺れすぎたせいでインプラちゃん（マシンインプラント）エラ　っちゃってる」

「ごめんね。ヒ　リングは使えないんだ」

「いいっていいって、しばらくしたらもどるから。それより嬢ちゃんお母さんは？」

「気絶してたからちゃっかりはぐれてきちゃった」

「げっ」

コピペは絶句する。

「もしかして、オレのせい？てつきりもう病院から離れてると思っただけだ」

「大丈夫だよ。ホント気絶しただけだもん」

「そっか。すまんね。こっちは見ての通りダメだ。奴があんな化物とは　　罔にすらなれんかったよ」

トホホと嘆くコピペ。そして少女は目を瞑る。

「模倣されし翼……大蛇のしっぽが仄かに笑う」

「なっ！？デコイに引っ掛かったのか？」

「たぶん　　だけど、それがどこまで行くかは運しだいだよ。とりあえずお疲れさま」

ぺこりと頭を下げる少女。

「ああ。だが問題はクロシングオバの方だ。嬢ちゃん、悪いが後は頼む」

「法師さまは？」

「あゝダメダメ。あの人、オレに大智くん預けてあっちにいつちやつたんだ。なんかトラブルらしい」

「大智くんは？」

「オレも忙しくなったから、上条さんと共に預けてきた。つうわけで、アレを止められるのは後、嬢ちゃんしか残ってないの」

「そう」

少女は耳に掛かった細くてしっとりとした髪をかきあげる。

「でも、その結論は早いかもしれないよ」

「？」

「役者は他にもいるから」

少女は笑う。

カ　テンコ　ルの訪れにはまだまだ早いのだと。

ゆうは頂垂れエレベタ　の扉に縋り付いた。

「　　キキ……」

樹東がクロシングオバ　同様、人造人間だった。

それは確かに驚きの事実だ。

でもよくよく思えばそうだろうなと思う。彼の完璧さはやはり人間のそれにしてはできすぎていたから。

問題なのはそれを知った今でも自分が彼のことを好きだということ

と。彼の横にいて、彼の支えになってあげたいと切に願っているということだ。

「あいつのせいだ」

俊彦のぼやき。彼は焦点のあわない目を明後日の方に向けていた。「あいつがボクの家族をメチャクチャにしたんだ」

「あんた」

ゆうはエレベータの扉に触れていたその手を堅く握り締める。

そして声を震わせ叫んだ。

「あんたいい加減にしなさいよっ!？」

「っ!？」

先日、俊彦に会ったときゆうはとても太刀打ちできる相手ではないと思った。どんな手段を使っても自分の我俣を貫き通そうとする人間ほど手に負えないものはない。

だが違う この男はそれほど自らに忠実なわけでも、まして何かを得ることに覚悟を賭しているわけでもない。

子供ですらない。

何も見えていない 見ようとしていないただの瞽だ。

「家族をメチャクチャにされたですって? ざけんじゃないわ! 家族なんて一体全体、どこにあつたつてのよ!？」

「っ!？」

「あんた何か勘違いしてんじゃないの? 父親がいて母親がいて子供ができたから、ハイっ家族になりましたって……んなわけないでしょっ!？ 家族つてのは、その一員が自覚し認め合い、思いやるという最低限の努力を怠らなかつた人たちに生まれた絆が『家族』という結晶になっていくんでしょ？」

「……………」

「それすらできないなら、たとえ血が繋がってても『家族』になんてなれないし、その絆さえあればたとえ血が繋がらなくても、相手が人間でなくても『家族』になるんでしょ。それすら分からず父親になつたあんたに、キキのこととやかく言う資格なんてあるわけな

「いじゃない!？」

「……………」

惚けたように固まる俊彦。そんな彼に背を向けたままエレベーターが下りてくるのを待ち続けるゆう。

樹東を追うために。

「あの、ちよつといいですか？」

青木が口を開いた。

「オレ、光冴くんのダチです。よく相談とかのつてました」

「光冴の……………」

俊彦は光冴という名に反応し、顔を上げて青木を見上げる。

「光冴くんよく言つてました。『お兄ちゃんがいるからお父さんが帰つてこなくなつたんだ』つて。だからあなたの言つてることも、オレには少し分かります。実際、樹東の光冴に対する接し方は異常でしたから。でも、じゃあなんで樹東は光冴にあんな風になつてしまつたんですかね」

「それは……そうプログラムされて

「ほんとにそうですかね？」

「えっ？」

「あいつが人造人間で、光冴を守るようにプログラムされていた。ほんとにそう思いますか？」

青木は俊彦に真つすぐと疑問を投げる。

「だって　　そうだろ？」

「オレはそうは思わない。もし、ほんとにそれが事実として、オレが樹東の立場なら、あんたのこと殴つて引きずつても家に連れ戻した」

「っ!？」

「それが光冴のためにできる一番のことだから。親が子供のもとに戻らない、それは一番子供にとって悲しいことだから。それが分からないほど樹東はバカじゃない。なのに奴はなぜそれをしなかったのか」

「……………」

俊彦の眼がピクリと大きくなる。

「いや、できなかったんだ」

「まさか」

「樹東はあんたに逆らう力がなかったんだ」

「なるほど」

高木が呟いた。そして、俊彦の後にあるユジンのカタチをした人形に目をやる。

「彼女は自分の代わりに夫の手助けをするよう樹東くんに施していたのか」

「そんなバカなっ!？」

俊彦は雷に射たれ弾かれたように立ち上がる。

「そんな」

「もつと言えばあいつが光冴を自分の手のひらに隠してたのは、あんたに自分だけを見てもらおうと必死だったんじゃないのか？」

「違うっ!？違う違う違うっ!？」

「光冴が言ってたんだっ!『お兄ちゃん、自分でお父さんに頼みきらないからいつもボクをだしに使う』って。あいつはそうやってあんたを得るのに光冴を利用してたんだ」

「そんな……………」

両手で頭を抱える俊彦。

『お父さん、もつと頻繁に帰れないの？光冴が可哀相だ』

確かに樹東が俊彦に意見をするとき、たいてい『光冴が』と付けていた。それは光冴のためという代弁を隠れ蓑に、自分の欲望を代弁させていたのだ。

「あんたがあいつから目を逸らしたからこうなったんだ」

「……………」

エレベータが下りてきて扉が開く。ゆうが乗り込み、そして青木も続いた。

「早く気付けよ。でないと、あんたは最初から最後までひとりぼっ

ちだ」

エレベータは扉を閉め上昇し始める。
ゆうが青木の背中に問う。

「青木、あんたはあのダメ親父の味方？」

「……………」

いつときの沈黙。

そして、

「このまま終わるなんて、光冴は望んでないだろうが」
地上へ。

『軍師のハッキング止まりません』

「まさに最悪の事態か」

二人が研究所に顔を出すと先よりも数段激しい喧騒が散らばっていた。

『少なくとも米・ロ・仏・中の主要軍事施設を同時に侵入』

「くっ」

下唇を噛む山本。そんな彼に樹東の行方を訊ねるのは気が引けたが、他にどうしようもない。

「山本さん キキ……樹東くんは？」

「ああ、キミか すまない、気付かなかった。こちらも見えての通り手いっぱいだね。彼が廊下を走っていく気配は感じたんだが」

ゆうにはよく事態を飲み込めなかったが大変なことが起きていることだけは分かった。

「わかりました」

「とにかく手分けして探そう」

ゆうと青木は樹東を探すべくその場から離れた。

『まさか 軍師にこれほどのスペックがあったとは』

オペレタの一人が驚愕と呟く。

たった一つのコンピュータが世界中の、しかも最高峰のプロテクトを保有しているであろう軍事施設に侵入できるなど誰が想像するか。

しかし、山本は当然だと言う。

「グリッドコンピューティングだ」

「えっ？」

グリッドコンピューティングとは複数のコンピュータをネットワークで繋げ、仮想的な大規模コンピュータを構築して高速演算処理を実現するシステムのことである。家庭にあるパソコンを普段からその能力をフル活用している人間など殆どいない。企業のコンピュータにしても深夜はほぼ活動していないわけで、それらの持て余された部分を繋げ一つの演算処理に使用すれば或いはスーパーコンピュータ以上の能力を生み出すことが可能だと考えられているのだ。

「恐らく軍師は生まれてこの方、手当たり次第、世界中のコンピュータをグリッドコンピューティングしている。誰にも気付かれないようステルスして」

「……………」

つまり世界中のコンピュータと名の付くものは文字通り軍師の兵と化している。

誰にも気付かない透明な最強の軍隊か。

「そう……」蠅の王「の横暴が表向き許されているのは軍師の存在があつたからだからな」

鉄総司は七年前にコレと同じことをやったことがある。

世界中の権力者を跪かせるために。

ただ、今回は脅しだけではすまないだろう。

「クロシングオバ……………」

愛されなかった子供が取る行動は二つに一つ。自傷か他者を傷つけるかのどちらか。

「或いはその両方か」

「嘆きの王」が掴んだ蜘蛛の頂。

人間という虫けらを蹴散らそうと触手をのばす。

たとえそれが自らを滅ぼそうとも。

オ ガンズX 地中深いその場所で眠る人形を見上げ高木は言う。

「綺麗な人ですね、奥さん」

「……………」

幾分かの間をおき俊彦は頷いた。

「 ああ………… ボクにはもったいないくらいに それなのに
ボクは彼女を守ってあげられなかった…………」

俊彦は誰とでもなく懺悔するように茫然と語る。

「何がいけなかったのか知りたくて、こんなもの作ろうとしたけど
的外れもいいとこだ 結局、何をどう守ればいいのか全
然分からない………… ボクはどうしたらいい…………」

俊彦は頭を抱えた。

ずっと欲しいものがあつた。

それは生まれてすぐに失つたもの。

家族。

自信があつた。

不可能なことなんてなにもない。世界は自分を存在させるために
あつて、欲望を満たす材料はそこら中に転がっている。人もモノも
全部自分が満足するためのただのパツ。後はそれを組み立てれば
いい。簡単なことだ。

なんの疑いもせずそう信じ切っていた。

そして手に入れた。

家族。

賢く、美しく、そして優しい申し分のない妻。目の中に入れても
痛くないほど可愛い自分に似た子供たち。

自分は勝つたのだ。

あの公園で楽しくサツカをしていたあいつらに 。 なんの
苦労もなく家族を持っていたあいつらに 。

あいつらにこんなに素晴らしい家族が作れるものかつ！？

でも、守れなかった。

それどころか全部偽りだった。

全てが崩れていく。

今までスラスラ解けていた方程式が、ある日突然解けなくなってしまうような。

わけが分からない。

自分はどやって家族を作った？どやって生きてきた？どやって欲しいものを手に入れたらいい？

どやって？

どやって？

「心はカタチが見えないものだから答えは簡単にでない」

「えっ？」

高木は静かに言った。

「死んだ母が言っていました　楽しかったときの思い出。そこにきつとヒントがある……」

「……………」

「僕にはよく分からないけど。でも、もし思い出を共有できる人がいるならまた違うのかもしれない」

自分にはいませんけど、そう続けられた。

一際高いビルの屋上。

クロスは纏った深緑の緞帳を風に靡かせ突っ立っていた。

「白鳥はかなしからずや　」

青空がどこまでも続く道の群れを包み込んでいる。
でもその中に自分はいない気がした。

「もうすぐみんなまっかつか……」

すでにその弄くられた脳髄には、眼下に広がる人間の町がごみと写っていた。

ごみを始末する筈はこの世界にいくらでも存在する。

そう、原子力という名の……。

「うん？……歌？」

突如、クロスの耳に いや、頭の中に直接歌が響きだした。

「お兄ちゃん？」

自分の声にも似ている。だが、それは紛れもなく樹東の声であった。

「この歌」

聞き覚えのある歌。

ひどく懐かしい。

「どうして」

こんな昔の子守歌を。

「愛してるっていうけれど」

『米・口の核危機軽減センタ 完全に沈黙』

『軍師 核自動報復システムに以前侵入していきます』

「オペレタの悲痛の叫びに山本は堅く目を閉じる。

『山本さん このままでは核戦争がつー！』

「戦争？違っつ！」

これは世界の落日だ。

決して明日を向かえることのない。

「愛のカタチを知ってる人はいない」

カンカンと日光が降り注ぐ校庭。その角で一人、的に向かって投球練習しつづける影。

「っ！」

放たれたボールは激しく的を波立たせる。

「黒田くん」

「ん？ああ、なんだお前か」

いつの間にか背後に立っていた制服の少女に一瞥くれて、黒田は再び練習を再開する。

「ナイスストライク」

「ボールだよ今は」

元気に声を掛けてくる少女に、黒田はぶっきらぼうに答えた。

「お前さ、マネージャだからってこんな日まで付き合う必要ないぞ」

「いいじゃんべつに、好きで来てるんだし」

「……………」

刹那の沈黙。

「物好きな奴」

そう言って黒田は転がったボールを拾い始めた。少女もそれを手伝う。

「ねえ部員集めの方はどう？」

「全然ダメ」

籠にボールを放りながら答える黒田。

「この時期に入部するくらいなら、もうとっくに入ってるんだろ」
「そっか」

少女は少しだけ明るさを顰めた。そんな彼女を横目で見て黒田は立ち上がり背伸びをする。

「でも、まあまだ猶予はあるし　色々あたってみるさ」

「そだね。私も中学の後輩とかあたってみるから、最後までがんばる」

「ん……………」

黒田は少女に背を向けたまま鼻を嚙った。

// 信じようっていうけれど //

「うげえ全然わかんねえ」

樹東のクラスメートの宮下は弱音を吐いてテブルに突っ伏す。
ファミリ レストランで友達数人と夏休みの宿題をやっていた。
「やっぱ樹東、呼ぶべきだって」

「とかなんとかいって、樹東の写すつもりだろ、てめえ」
「へへへ……」

友人の指摘に苦笑いを浮かべる宮下。

「てか、あいつ こないだの何だったんだろっな？」

「青木とかいったっけ？」

「『人造人間』って、あいつぜってえキメてるって」

「言えてるう」

げらげらと笑う宮下たち。

「でもさ、樹東は気になるよな」

「まああいつがああいうボケかたするときは大抵、自分追い詰めてるときだし。心配っちゃあ心配だな」

「しっかしさあ『鼻血は落ちにくいんだよ』って、あいつ誤魔化すの下手すぎじゃね」

「役者としては大根だな」

『樹東の欠点見付けたら』とみんなでわいわい騒ぐ。
そして、

「明日にでもみんなであいつん家押し掛けようぜ」

「おっ賛成え！」

「とかいって宿題写したいだけだろうが、宮下は」
「えっへっへっ」

やっぱり宮下は苦笑いを浮かべるのであった。

「でも、心弱いから伝えきれないね」

「お母さん、最近ゆうの奴元氣ないなあ」

リビングで新聞を読んでいた柊沢修司は台所に立っている妻・香代子に言った。

「そうですね」

香代子は食器を洗っていた手を止め、ため息混じりに修司に応じる。

「なにかあったんでしょうか？」

「うゝむ、まあ生きてりや色々あるもんだからな」

修司は新聞を畳みながらのんきに悟ったことを言った。

そんな夫に香代子は一瞬呆れた顔をしたかと思うと、今度は名案を思いついたと口にする。

「そうだ。今度、久しぶりに樹東くんたちを夕食に招待するってのはどうでしょう？」

「おおっそれいいな！なんだったら休み取ってみんなでキャンプに行くってのどうだ？」

「まあすてき」

修司の提案に明るくなる香代子。

「大自然の中、釣りしたり、花火したり
　　そういやあ昔は光冨
　　くんとよくキャッチボ　ルしたっけなあ」

「ふふ、樹東くんはその間私の手伝いをよくしてくれて
　　夫婦は思い出に胸をときめかせ、未来に希望をのせる。」

「ただどあなたがいつも

」

綾取りの糸が切れる。

そして俊彦は妻のカタチをした人形を見上げて呟いた。

「心、弱いから伝えきれないね」……」

いつか歌った子守歌　泣いた顔も愛しいけれど、自分を見上げて笑ってくれる彼らに胸を熱くしたあの日々。

「なんだ……分かってたんじゃないか」

始めから答えはそこにあった。

でも、目を瞑ってたから　そのことにも気付けなかったから。

バカみたいな話だけでも……。

「キラキラ笑うことができたなら

」

「はあはあ……」

肩で息をするゆう。

青木と手分けして樹東を探しているが見つからない。家に戻っているのではないかと思い走って行ってみたがいなかった。しかたがないので、辺りを探しながら再び研究所の前まで戻ってきた。

「……キキ」

いったいどこ行つたのよ。

『愛してるっていうけれど』

「っ!？」

微かに歌が聞こえてきた。

『愛のカタチを知ってる人はいない』

「キキっ!？」

樹東が研究所の屋上の縁に立って歌っている。

『信じようっていうけれど、でも心弱いから伝えきれないね』

それは大昔の流行歌。樹東がときどき　　本当にときどきではあるのだけど、一人鼻歌を歌っているのを聞いたことがある。

『だけどあなたがいつも　　』

綺麗な歌。人の芯を震わせるような声。

『キラキラ笑うことができたなら　　』

「……………」

だけど聞き惚れている場合ではない。

恐らくこれはレクイエム。

『それがきつと　　』

ゆうは駆け出す。自らの魂を鎮める歌のもとへと。

“それがきつと愛”

「ら・ら・ら・ら・ら　　」

屋上の扉が開かれる。

ゆうは静かに鼻歌を歌う樹東の背後に歩み寄っていった。

「ら・ら・ら・ら・ら・ら・ら・ら……オレ、小さいころは光牙より泣き虫でさ、オレがベソかくたんびに父さんがニコニコしながらこの歌歌ってくれた」

樹東はゆうに背を向けたまま空を仰ぐ。

「好きだったあ……………」

「キキ……………」

「父さんがオレのこと嫌ってるの知ってたから、父さんを困らせないようにオレも父さんを嫌ってるフリをし続けた　　つらかった」

「……………」

大好きな相手が自分を嫌っているから相手を困らせないように気を使って自分も嫌っているフリをする　　そんな壮絶な愛のカタ

チがこの世に存在するなんて……。

「でも、それも今日で終わり」

「キキ……」

『私じゃダメ?』 その問い掛けがゆうの喉元まで出掛かっていた。でも言えない。樹東はそういう風に作られていないから

- 言うだけ困らせるだけだから。

「お兄ちゃん」

「っ!？」

ゆうの背後から声が聞こえてきた。慌てて振り向くとクロスがそこに立っていた。樹東もゆつくりと振り返る。

「おいで、光冴……いや、クロシングオバ……」

樹東はクロスに手を差し出す。それに吸い込まれるようにクロスは樹東のもとへ。

「お兄ちゃん……」

樹東はクロスをぎゅっと抱き寄せた。

「お兄ちゃんはボクのこと必要じゃないんでしょう? ボクのこと好きじゃないんでしょう?」

「ごめん 分からない……」

「……」

「分からないんだ」

互いの心音が聞こえる。それでも自分たちは人間ではない。

心があっても 生命に限りなく近くても……人のプログラム

に従うことを宿命とされたものは道具以外のなものでもない。

「オレは結局、光冴とお前を利用していた。父さんと自分自身を繋ぎ止めるために。でももう父さんはオレを必要としていない」

「……」

「オレたちは優れ過ぎているんだ。だから実質、誰の助けを必要としなくても生きていける」

「でもボクらが必要とされなければ、ボクらはゴミでしかない」

「一緒に死のう」

「……………」
「……クロス　　お兄ちゃんが一緒に死んでやる……。だから

」
樹東は顔を上げ、齒を食いしばり真つすぐと自分を見つめている
ゆうを見た。

「だから、世界を滅ぼすのはやめてくれ」

「……………」
犠牲　　そんな言葉すらしつくりこない。

「お兄ちゃんはお兄ちゃんのことを愛してくれる人を
光冴のことを友達といってくれた人を　　自分たちを見守って
くれた人を　　そして何よりお父さんを守りたいんだね」

「ああ」

樹東は堅く瞳を閉じた。

目尻が日に反射して光る。

『山本さんっ！』

「どうしたっ!？」

『軍師　のコントロールが回復しました』

『更にハッキングも中断されています』

「っ!？」

山本は目を剥いてその状況を確認する。

「クロシングオバ……………」

お前はいい。。

「お兄ちゃん、一緒に死のう」

「ああ」

二人は互いの首筋に手をあてがう。

「……………」

止めなきや。

でもこの二人は世界を天秤にかけて死のうとしている。
どうやったら止められると言うのか？

「やっ」

やめて ゆうがそう言い掛けたとき、

「待ってくれっ!!」

二人を制する声が背後から聞こえてきた。

「父さん……」

現れた俊彦を目に樹東が呟く。

それに釣られるようにゆうとクロスも俊彦の方に振り向いた。

「クロシングオ バ ……」

俊彦がコンクリ トの床に跪く。

「……きつ 樹東……」

両目からぽたぽたと雫が零れた。

「すまなかった」

「っ!？」

「謝ったところで償うことなんてできないけど、今は謝ることしか
できないから」

「……………」

「ボクを 父さんを独りにしないでくれ。おいて行かないで…」

……」

どこまでも我侭な大人。

だけれども、

「もういいよ」

クロスが呟く。

「ボクらは人間じゃないから 好きな人が泣いてるところなん
か見たくないから 必要とされるだけで十分だ そうでし

よ、お兄ちゃん」

太陽が西に傾く。

「ああ」

やがてすべてのものが真っ赤に染まっていく。でもそれは太陽がくれる明日を迎えるための、些細な別れの贈り物。

「ありがとう」

かくて、父より息子へ林檎が投げられた。

それは酸っぱくて甘い愛のカタチ。

「アシミレイト・ハラ ル」

- 国際組織犯罪対策機構

- 通称「アシハラ」。

二十一世紀最初の年、テロによる「大きな林檎」襲撃に世界中が震撼した。戦争のカタチが変わったのだと誰もが否応無しに認識せざる得なかった。にもかかわらず、大国の取った行動は「正義を振りかざす」という旧世代の産物であり、結果は「大蛇の頭を潰しても尻尾が頭に成り代わる」という凄惨な有様であった。

それを見兼ねた各国の資産家や著名人が集い、独自の理念によって組織したのが民間シ クレッドサ ビスともいえる「アシミレイト・ハラ ル」である。

その理念とは「統合と粛正」。

「そこに善悪はない。なぜならこれは生き残り競争であり、思想の違いにおいて同種族という言葉は成立しないのだから」と当時の設立者たちは語っている。

創立から二十年近く経った現在において、その構成員は末端まで含めると億単位にも上ると噂されている。

人が人を猜疑の目で監視する社会。

そこに渦巻く思念。

『殺られる前に殺る』 世界中の人間が恐怖に侵され、地球という閉塞された空間の中で集団ヒステリ に陥ってしまったかのように。

松雪貴子は路地裏で壁を背にして息を潜めていた。この行為が危機回避にそれほどの効力を生むものなのか甚だ疑問に思うのだが、何か対策を講じていないと落ち着かなくてしょうがない。

それほどまでに彼女の焦りは深刻なものだった。

表通りに黒い4WDが止まる。

「貴子さんっ！！」

呼び付けた高木が迎えにきたのだ。

貴子は素早い動きで車に乗り込んだ。

「貴子さん、何かあつたんですか？」

貴子の尋常じゃない様子に高木が訊ねる。

「ええ、それが　ん？」

助手席に座ろうとした貴子は車の後部座席に白いシートに包まれた大きなものが乗っていることに気が付く。

「高木くん、これっ　きゃっ！」

高木が突然車を発進させ貴子はあわや転倒しそうになる。

「ちよつと高木くん、行き成り　っ！？」

抗議しようとした瞬間、白いシートのからニユルつと白い腕が出てきたのを目のあたりに貴子は声を失った。

「すいません、少し時間がなくて」

それはいつものお人好しな高木の謝罪。

「荷物を早く届けないと腐るかもしれないから
「っ！？」」

貴子の手が懷に伸びたそのとき、運転中の高木の左手が彼女の額に突き出された。

彼の手の平に収められているのは俗にデリンジャ　式と呼ばれる小型の拳銃。

「そう」

貴子にはやりと笑った。

恐怖心や怒りより、新しい発見に出くわしたことへの愉悦が何よ

りも先に出てきたのかもしれない。

「あなたもだつたの」

「アシミレイト・ハラ ル」と繋がりを持っていたのは貴子だけではなかつた。

「すいません」

苦しそうにそう言った高木は真つすぐと前を向いて運転を続ける。貴子に拳銃を突き付けたまま。

「車、ミッションにしとけばよかったかしらねっ!？」

そう皮肉を口にして貴子は後部座席の白いシートを引き剥がす。
「っ!？」

裸の女が横たわっていた。

しかもこれは。

「ユジン」ア ガイア……」

貴子に彼女との面識はないが、それでもその容姿は資料などで見知っている。

これは紛れもなく関俊彦の妻・ユジンのカタチをしたモノだ。
「いえ、これは」

「関俊彦が作りたかつたモノ　そしてあなたが奪取するよう命じられた」

「本当は隙を見てクロスを手に入れるはずでした。でも、あんなことになつたから」

貴子の冷静な問い掛けに高木は躊躇いがちに答えた。

貴子のため息を吐いて、浮かせていた腰を助手席に落とす。

「高木くん、ずっと私を監視してたの？」

「はい」

「こないだの「アシハラ」の指令　広田議員の汚職をスッパ抜いたの、アレは兄さん、鉄総司の目をそちらに向かせるため？」

「はい　でも、彼の持っている情報を手に入れたかつたのも事実です」

「アシハラ」の構成員は警察にも検察にもいるということか。

アカデミ 創立に関わる広田議員の持つ情報を拷問にかけてでも手にしたかったか。しかし、それもコピペによる暗殺によって阻止された。

「それに、狼煙上げの意味もありました。この計画に参加した人たちに対しての」

「……………」

『この計画』 クロシングオ バ を奪取する計画 コ
レに参加した人々の数はその真意を明確に把握していない者たちも含めればかなりの人数になるのである。それらの人々全てに『
月 日に何をしろ』などというメッセ ジを一斉に送ってしまうえば、ネット上に目を光らせている誰かに怪しまれてしまうかもしれない。その危惧を拭うために予め、『週刊誌・広田議員・汚職事件・時間後・ をしろ』といった暗号を潜ませた文章を各自に送っていたのだろう。

まさに狼煙上げ。

貴子のスク プが載った週刊誌の発売日を皮切りに、この国、或いは世界中にいる「アシミレイト・ハラ ル」の構成員たちが各自工作に乗り出した。

「でも、計画は見事に失敗」

「はい」

広田議員の死に動揺が生まれ計画はほんの少し遅延する。その間にコピペはクロスと接触。そしてクロスの猜疑心は頂点に達し隙を見てそれを奪取することができなくなった。

「初めから樹東くんが人造人間だと知っていたら、彼を誘拐するだけで済んだんですが」

ここまで事態が発展してしまつてはそれも困難だろう。結局、クロシングオ バ から仕方なく作りかけのユ ジ ンの人形に目標が切り替わった。

「……………」

そして、計画の修正を行なっている高木は恐らく計画の中心的存

在であつたと言わざる得ない。

「高木くん、もしかして」

貴子の声は震えていた。

こんなこと口に出すのも悍ましかったからだ。

「この計画に関光冴の死は含まれてた？」

全ては水面下で計画されていた。それが水面に顔を出したのはまさしく関光冴の死によってである。

高木は眉間に皺を寄せた。

「クロシングオ バ を表に引つ張り出すために」

「はい」

「あなたは最初から知ってたの？」

「……はい」

少し間を置いて高木は肯定した。

貴子も少し間を置き、

「高木くん、あなたが」

「……」

『僕、やっぱ広田議員のところ張つときますから』

仕事で貴子と高木が別行動をとることはあまりない。高木がごねることが多いからだ。今思えばそれも貴子を監視しなければならぬ立場故だと推測できる。

それなのに、あのときだけは。

「あなたが、関光冴をひき殺した？」

「……」

高木は答えない。

その代わりのように急ブレ キで車を止めた。

貴子はそれを肯定の意と取る。

「どうしてよっ!？」

ここにきて納得できぬ不条理に、怒りと悲しみが吹き出した。

「どうして 確かに関光冴はまったくの無関係者ではないかもしれない。それでも、彼は利害のために殺していいような人間では

なかったはずよ？何の変哲もない、ダメな家族に悩んでただの高
校生。そんな子の命奪う権利なんか誰にもないわっ！！ねえ、そう
でしょっ！？」

「はい」

高木も貴子同様、今にも泣き崩れそうに頭を垂れる。それでも彼
の手からデリンジャ　が下ろされることはない。

「だったらどうしてよっ！？」

「……………」

沈黙。

冷房の風が不快に頬撫でていた。

「キザン式人造人間　それを強化するマシ　ンインプラントの
技術がどうしても必要でした」

コピペの話を信じれば、シンラ博士の死に「アシハラ」が強く関
与しているとのこと。となれば、彼らがそのときに人工細胞キザン
を奪取していただろうことは容易に推測される。

そして待っていたのだ。

キザンの有効活用が示されそれを奪い取る今日という日を

。

「それで無敵の軍隊でも作るつもりっ！？」

貴子の追求。

そして高木は搾り出すような声で答えた。

「必要なんです。そう……「蠅の王」に一矢報いるために
「っ！？」」

「僕の両親と妹は七年前、「蠅の王」に殺されたんだ」

「七年前　」

高木の告白。

それを聞いて貴子はすぐさま事情を理解した。

七年前の事件　裏の世界ではあまりにも有名、というよりホ
ラ　映画が現実起こったかのようなリアルティ　のなさと、それ
に反比例して襲いくる恐怖が人々の戒めにさえなった血塗られた暗
黒史。

それは鉄総司がキザン式スパ コンピュータ 軍師 を以て
米軍のコンピュータ を悪戯にハッキングしたことから始まる。

ハッキングは数時間で止み、しかし上層部はパニックになったの
はいうまでもない。

コンピュータ を掌握されたことで表立って裁きを下せない米軍
は、鉄総司の暗殺を実行。だが、それはものの見事に失敗、米軍の
暗殺部隊は返り討ちにあつた挙げ句、その報復として暗殺計画に携
わつた人間とその親類縁者に至までおよそ千人近い人間が数日の期
間に暗殺されたのだ。

こうして鉄総司は神格化された。

人の死が集う「蠅の王」へと。

「僕、本当はチャイニズアメリカンなんです。僕の父は軍人でした。
たぶん、鉄総司の暗殺に関わっていたんでしょう。だから当時
日本留学していた僕以外の家族はみんな殺された」

「くっ」

貴子は唇を噛む。

「僕、死して屍拾うもの無しなんですよ」 「確かにオレは

コスプレと殺しが趣味だけどさあ」。

あの、デク人形があ！

高木の困つたような笑顔、そしてコピペへの確かな殺意が貴子の
中に芽生える。

七年前のベルゼバブ・ジェノサイドはコピペの手によるものだ。
鉄総司の手駒はそう多くない。彼が脅しにコンピュータ の掌握
を選んだのがその証拠である。にも関わらず数日中に千人もの人間
を殺せたのは、コピペの変身能力によつてもたらされたものに違
ない。

「高木くん」

私はハンタ だ。真実という濃霧に包まれた獲物に標準を合わせ
ている。

「真実は人の手に負えるものではないのかもね」

それはあまりにも強大な悲しみ。

「どうして私を抱かなかったの？」

「……………」

それはあまりにも脆弱な欲望。

「その方が監視も先導もしやすかったはず。こんな孤独で疲れ切った女、あなたなら簡単に落とせたのに」

「僕だって……僕だって初めはそうしようと思ったさっ！！」

高木の怒鳴り声、思えば初めて聞いたかもしれない。

「あの男の妹なんか、利用するだけ利用してボロボロになったら捨ててやろうと思ってたよ。でも」

「……………」

それはあまりにも醜悪な怒り。

「好きになっただ　　どうしようもなく」

「……………」

「あんたが悪い……あんたのせいだ……」

「真実はとことん残酷ね」

そして、あまりにも切ない愛のカタチ。

「さようなら」

ダン

「なんでだよ」

愕然のあまりコピペはその場に膝を付く。

「なんで、総ちゃん」

いつも後手に回っていた。その度に何かを失った。そして、その何倍も誰かのものを奪った。

それがやっとな獲物が餌に食らい付き、先手を打つ機会が訪れるかもしれないというこのときに　　。

「なんで自殺なんかすんだよっ!？」

左手に拳銃、蟀谷に銃創　糸を切られた人形のように力を失った体を車椅子の背もたれが辛うじて支えている。

鉄総司　これが世界中から魔王と恐れられていた男の末路。

「『先生、ボクもういいよね』……」

机の上に置かれたくしゃくしゃの写真。シンラ博士と若かりし日の鉄総司が写った。照れくさそうに外方を向くシンラ博士の辺りは手垢で黒く変色している。

そんな写真の裏に殴り書かれたような文字のメモを見て少女が呟いた。

「総司さん　初めからそのつもりだったのかも」

「っ!？」

「総司さんをこの世に繋ぎ止めていたのは御友人だった俊彦さんの心配だけで、ホントははやくシンラ博士のところへ行きたかったのかも」

「……………」

コピペは項垂れる。

「なあ？」

そして少女に訊ねる。

「今回、オレ何人殺した？」

いつになく沈んだ声で。

少女は目を瞑る。何かを手繰り寄せるような、そんな間を置き目を開いた。

「今のところ八人　」

広田議員。そして病院で巻き添えになった人たち。

「……………」

結局また悲しみを生んだ。

悲しみは怒りに、怒りは憎しみにときとともに変わっていく。そして憎しみは悲しみを生み出す糧となる。

「……………」

「もう、やめる?」

しゃがみこみ沈黙するコピペに少女が優しく声を掛けた。

「やめない」

いじけた子供のようにそう呟く。

「やめられない」

尖っているのに攻撃性のない、どこか臆気な言い草で。

「だって」

コピペは目元を拭う。

「総ちゃんじゃない。これは最初からオレの……いや」

そして口調が変わった。

「わしの戦いだ」

そこには先までの落胆は一切形を顰めていた。

「……………」

それはひどく莊重な面持ちで立ち上がる。その様子はいかにも一
国を背負って断つ柱石の趣があった。

「たとえ」

身が破滅という悲境に陥ろうとも、その眼にはまさに王者にふさ
わしい英知の輝きが厳然と満ち溢れる。

「大切なものを失おうとも　この世の全ての人間を殺すことに
なろうとも、必ずセンセの仇を燻り出す」

世界に静寂が忍び寄ろうとしていた。

それは夜の静けさのようでもあり、真夏の照りつける風のようにで
もある。

「このわしが「蠅の王」だ」

魔王が呻ける。

落ち行く太陽。

明日、その恩恵を受けるものは誰もいないのだと言うように。

「「蠅の王」　カナンを追われし、ペリシテの神」

少女が囁いた。

幕引きの縄に虎視眈眈と狙いを定めて。

エピソード

光冴の葬儀 その帰り道。

ゆうと青木は炎天下の中を並んで歩いていた。

「これでよかったのかしら……」

ゆうが青木というより自分に問い掛ける体で呟いた。

結局、光冴の葬儀は事情に明るいのみのみの出席で行なわれ、当初の予定通りクロシングオバは光冴の戸籍で生きていくことになった。

「知るか……」

青木は伏し目がちに言葉を吐き捨てた。その声は少し鼻に掛かっている。

葬儀の中、光冴の死に一番敏感に反応を示したのは他ならぬ青木だった。

「ふう」

ゆうはため息を吐く。

彼女としては少しでも青木を慰めることが出来ればと思うのだが。

「あつそうだ」

ゆうは思いついたように青木に訊ねる。

「今度、私の家族と樹東たちとでキャンプに行くんだけどあんたもいかない？」

「いかない」

速答する青木。

「そっか、ごめん」

余計なお世話だと言われているような気がしてゆうは謝罪した。

そして沈黙が続く。

真夏の太陽。そして照り返し。

暑さに翻弄されながらゆうはふと思った。

人の死に自分より悲しんでいる人間を横にすると、冷静でいる自分は或いは彼よりも残酷なのではないかと。

「光冴 『アオちゃん、ありがと』 って笑ってた」

青木が小さく呟く。

「嬉しかった ほんとうに 嬉しくて」

「……………」

「もう、見れない」

「……………」

ゆうは何の言葉もかけることができない。その資格がないような気がした。

さつき青木がこつそりとポケットに光冴の遺骨を忍ばしていたのを見た。今もポケットに手をつ込んで歩いている彼の手の中にはそれがあるのだと思うと。

「許さない」

青木の口元が歪んでいく。

その表情は怒りに満ちているようにも泣いているようにも見える。「オレから光冴を あ的笑顔を奪った奴を……絶対に見付けだしてこの手で八つ裂きにしてやる」

「……………」

そしてほんの少し喜んでいるようにも見えた。

復讐 生きがいが見つかったのだと。

その日の夜、久しぶりに関家の食卓に俊彦は座った。

俊彦の横にクロシングオ バ 、前に樹東が座る。食事はいつものように樹東が手際よく用意した。

「……………」

食事を開始してしばらくはクロスが話題を提供していたが、やがて沈黙が訪れる。

しばらく黙々と箸を動かしていたのだが、やがて意を決したように俊彦が口を開く。

「あっあの」

口吃る俊彦に、樹東とクロスは箸を置いて耳を傾けた。

「こっ今度……三人で母さんのお見舞いに行かないか？」

俊彦は怯えた子供のように緊張した面持ちで返事を待つ。

クロスは樹東次第だと彼の顔色を伺った。

そして樹東は、

「母さん」

優しく微笑み、

「早く元気になるといいね」

俊彦が一番心地よくなる言葉で応じた。

翌年、ユジンシア　ガイアは静かに眠ったまま息を引き取ることとなる。彼女の真意を知る術はこれで永遠に閉ざされた。

関俊彦　　思えば初めからしまいまで、彼の家族は妻から与えられた人形だけだったのかもしれない。

糸の代わりに心で動く人形。

人より優れた、人の愛に飢えた新人類。

その匙加減で世界の明日のあり方も決めかねない力を持った人造人間たち。

彼はこれから死ぬまでその人形たちと家族ごっこを演じ続ける。

これが家族の　　そして愛のカタチだ。

そう自分に言い聞かせて。

終劇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112d/>

糸が心の人のかたち

2010年10月8日15時52分発行